立山町文化財調査報告書第11冊

吉　峰　遺　跡

― 第７次発掘調査報告書 ―

1990年

立　山　町　教　育　委　員　会

序

文化財は、祖先の営みを私達に伝えてくれる語り部であり、過去だけではなく現在の文化を理解するためにも重要なものです。中でも、埋蔵文化財はその土地に深く関係しており、郷土をよりよく知るための鍵であると言えましょう。

このたび調査の行われた吉峰遺跡は、過去の調査で旧石器時代から縄文時代にかけての資料が大量に出土しており、特に縄文時代前期には北陸有数の大規模な集落が営まれた遺跡として知られています。

今回の調査でも、多量の土器・石器と共に、抉状耳飾りの未製品が出土し、玉造り遺跡でもあった可能性が高くなりました。

また、今年で集落全域の発掘調査が完了し、北陸における縄文時代前期の村の様相が見えてきたことも、大きな成果と言えましょう。

この報告書がより多くの方々に活用され、地域の歴史と文化の理解に役立てば幸いです。

最後に、調査に際して御援助いただいた富山県埋蔵文化財センターをはじめ、調査に御協力いただいた地元や諸方の皆様に衷心より感謝申し上げます。

平成２年３月

立山町教育委員会
教育長　金　川　正　盛

例　　言

1．本書は、平成元年度に国庫補助金及び県費補助金の交付を受けて実施した、富山県中新川郡立山町吉峰遺跡緊急発掘調査の報告書である。

2．調査期間は、平成元年10月16日～12月15日までの延27日間である。発掘面積は約2.000㎡である。
調査期間中は、地権者をはじめ地元の方々から多くの御協力を得た。記して謝意を表します。

3．調査事務局は立山町教育委員会におき、社会教育課主事森秀典が事務を担当、社会教育課長松井哲男が総括した。

4．調査担当者は、立山町教育委員会社会教育課主事森秀典と立山町教育委員会嘱託調査員山嵜典子である。

5．調査から報告書の作成に至るまで、下記の方々から有益な御教示を得た。記して感謝の意を表します。
富山大学教授小林武彦、橋本　正・山本正敏・狩野　睦・酒井重洋・神保孝造・久々忠義・岡本淳一朗（以上富山県埋蔵文化財センター）、北川美佐子（富山県文化振興財団職員）、魚津市教育委員会学芸員麻柄一志、上市町教育委員会主事高慶　孝

6．遺物整理・実測・製図は、森・山嵜が中心となり、春日真実（富山大学大学院生）が協力した。

7．本書の編集・執筆は、降下火山灰分析に関しては富山大学教授小林武彦氏に依頼し、石器に関しては春日が、他の部分は森・山嵜が担当した。執筆分担は各文末に記した。

目　　次

Ⅰ　遺跡の位置と周辺の遺跡……1
Ⅱ　調査に至る経緯……2
Ⅲ　調査概要……4
　1．立地と層序……4
　2．遺　構……5
　3．遺　物……11
　　(1)　土　器……11
　　(2)　石　器……18
Ⅳ　調査成果……30
　縄文時代前期の集落構造について……30
　　(1)　時期区分と遺構……30
　　(2)　住居跡の変遷……32
　　(3)　集落構造とその推移……43
　　(4)　結　語……46
　註・参考文献……47
　付載　富山県立山町吉峰遺跡の考古遺物
　包含土層の火山灰層序学的研究……48
　写真図版

挿図目次

第1図　遺跡の位置と周辺の環境……1
表1　調査結果一覧……2
第2図　地形と区割図……3
第3図　遺構全体図……4
第4図　遺構実測図……6
第5図　遺構実測図……7
第6図　遺構実測図……9
第7図　遺構実測図……10
第8図　遺物実測図……14
第9図　遺物実測図……15
第10図　遺物実測図……16
第11図　遺物実測図……17
第12図　遺物実測図……20
第13図　遺物実測図……21
第14図　遺物実測図……22
第15図　遺物実測図……23
第16図　遺物実測図……24
第17図　遺物実測図……25
第18図　遺物実測図……26
第19図　遺物実測図……27
第20図　遺物実測図……28
第21図　遺物実測図……29
第22図　集落展開図……31
表2　住居跡の分類と時期区分……32
第23図　遺構実測図……33
第24図　遺構実測図……34
第25図　遺構実測図……35
第26図　遺構実測図……36
第27図　遺構実測図……37
第28図　遺構実測図……38
第29図　遺構実測図……39
第30図　遺構実測……40
第31図　遺構実測図……41
第32図　遺構実測図……42
第33図　遺構実測図……43
表3　住居跡一覧……44
第34図　Ⅲ期集落……45
第35図　Ⅴ・Ⅵ期集落……45

Ⅰ　遺跡の位置と周辺の遺跡

立山町は富山県の東南部に位置し、立山連峰に源を発する常願寺川によって形成された、広大な扇状地に拓けた町である。西は富山市、東は長野県大町市に接し、東西約43km、南北約21km、面積は308km²である。

地勢は、三角洲や扇状地から河岸段丘・丘陵・溶岩台地さらには山岳高地にまでおよぶ多様な地形が、標高約10mから3,000mにかけて展開している。

遺跡の所在する吉峰段丘は、隆起扇状地堆積物によって形成されたもので、上段累層と呼ばれる。この地層は、町の東から南東にかけて広く分布し、本町での高位段丘を形成している。

これらの高位段丘面の縁辺部は比高20～30mの段丘崖となっており、礫層を観察することができる。礫層の厚さは約20mである。

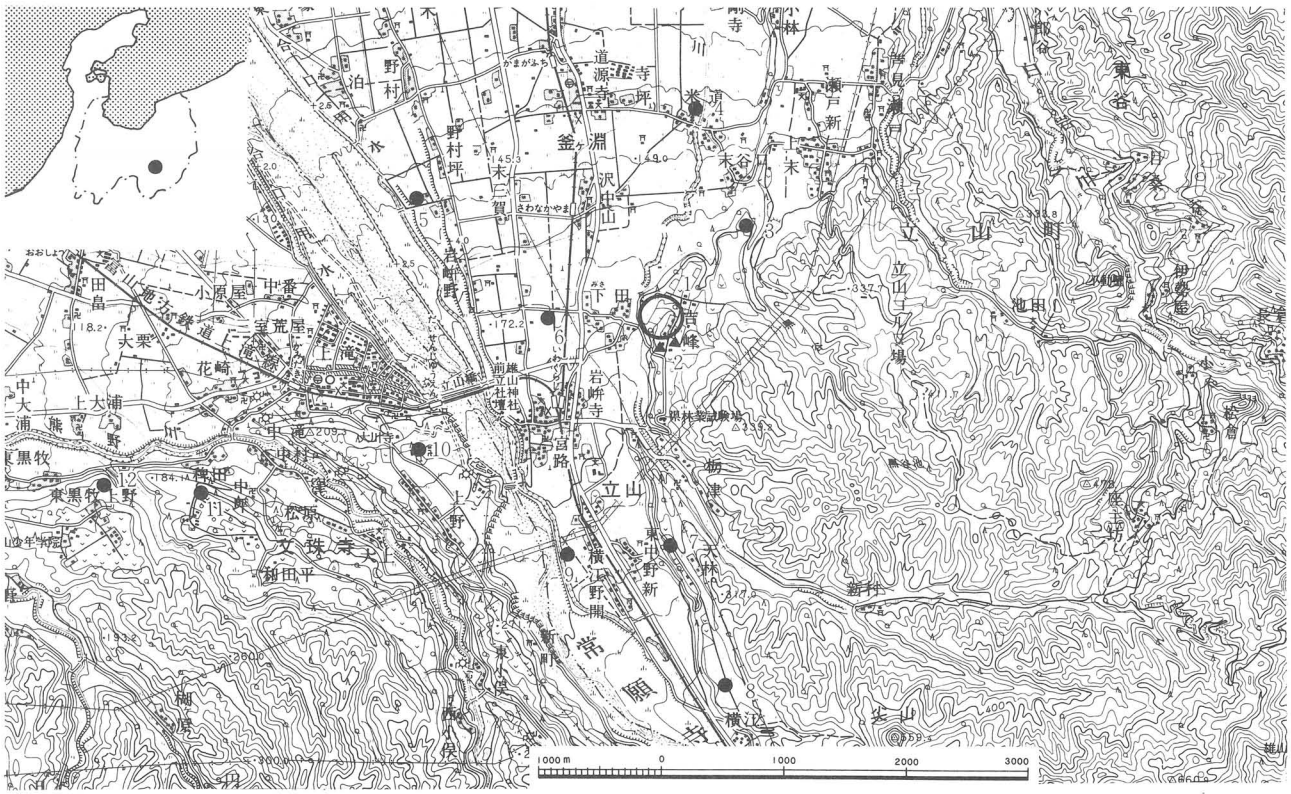
このような地形の中で、遺跡は扇頂部に近接した高位段丘上に位置し、今回の調査区は標高約215mを測る。

遺跡からの眺めは素晴らしく、西方には富山平野が広がり、北方には富山湾のかなたに能登半島がのび、そして東方には北アルプスの3,000m級の山々が間近に望まれる。

周辺には、旧石器時代から近世にまで至る多数の遺跡が存在するが、特に一帯の段丘上は、県内有数の縄文時代遺跡の宝庫となっている。

これらの遺跡の中で吉峰遺跡に関連があるものとしては、高位段丘上には天林南（縄文時代早～晩期）・天林北（縄文時代前～晩期）・吉峰祭祀（平安時代）・末谷口（縄文時代中期）の各遺跡が、一段低い段丘上には岩峅野（縄文時代中～後期）・横江中ノ林（縄文時代後期）の各遺跡が、さらに一段低い段丘上には末三賀中諸見坂遺跡（縄文時代中期）がある。また、常願寺川対岸の段丘上にも東黒牧（縄文時代中期）・文珠寺稗田（縄文時代中期）・大川寺（縄文時代中期）の各遺跡がある。

（森）



第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡　１．吉峰遺跡　２．吉峰祭祀遺跡　３　末谷口遺跡　４．米道福地田遺跡　５．末三賀中諸見坂遺跡　６．岩峅野遺跡　７．天林北遺跡　８．天林南遺跡　９　横江中ノ林遺跡　10．大川寺遺跡　11．文珠寺稗田遺跡　12．東黒牧遺跡

Ⅱ　調査に至る経緯

吉峰遺跡が立地する河岸段丘上の小丘は、かつてはアカマツ・コナラを主体とする二次的植生の雑木林であった。第二次大戦後、当地に開拓民の入植が始まり、丘陵上は開墾によって畑地化が進められ、縄文時代前期の遺物を採集できる地として、県内における該期の著名な遺跡の一つとなっていた。

しかし、地域開発事業の進行に伴い、河岸段丘上の良質の土砂が注目され、各地で土取り事業が行われるようになった。当遺跡地も良質な赤土を産し、土取り事業の対象地となったため、事業に先立ち、昭和44年に富山県教育委員会が主体となり、第１次の発掘調査がおこなわれた。以後の調査とその概要は下記のとおりである。

昭和44・45年調査（第１・２次）調査は、遺跡範囲の北部と中央部で、一辺２ｍのトレンチを入れ、遺跡の規模・層序・遺構の確認を目的として行われた。層序の概要と、縄文時代早期の炉跡・前期の住居跡４棟が確認された。

昭和48年度調査（第３次）調査区は遺跡の中央部北寄りで、面積約2,520㎡に及ぶ全面発掘調査であった。縄文時代前期中～後葉の住居跡が８棟検出された。

昭和49年度調査（第４次）調査区は丘陵のほぼ中央部、第３次調査区の南にあたり、発掘面積は約3,200㎡。縄文時代前期中葉～中期初頭の住居跡が８棟検出された。

昭和55年度調査（第５次）調査区は第４次調査区の東にあたり、発掘面積は約1,100㎡。

なお、以上の調査により、吉峰遺跡においては縄文時代前期集落の内容が明らかにされ、貴重な資料が多数提供されたが、これらの調査区は、現在では基盤から消失してしまっている。

昭和63年度調査（第６次）昭和62年秋、土取り業者から、遺跡当該地での事業申請がなされた。このため、立山町教育委員会が調査主体となり、国庫補助を受けて３カ年計画で記録保存調査を実施することとなった。

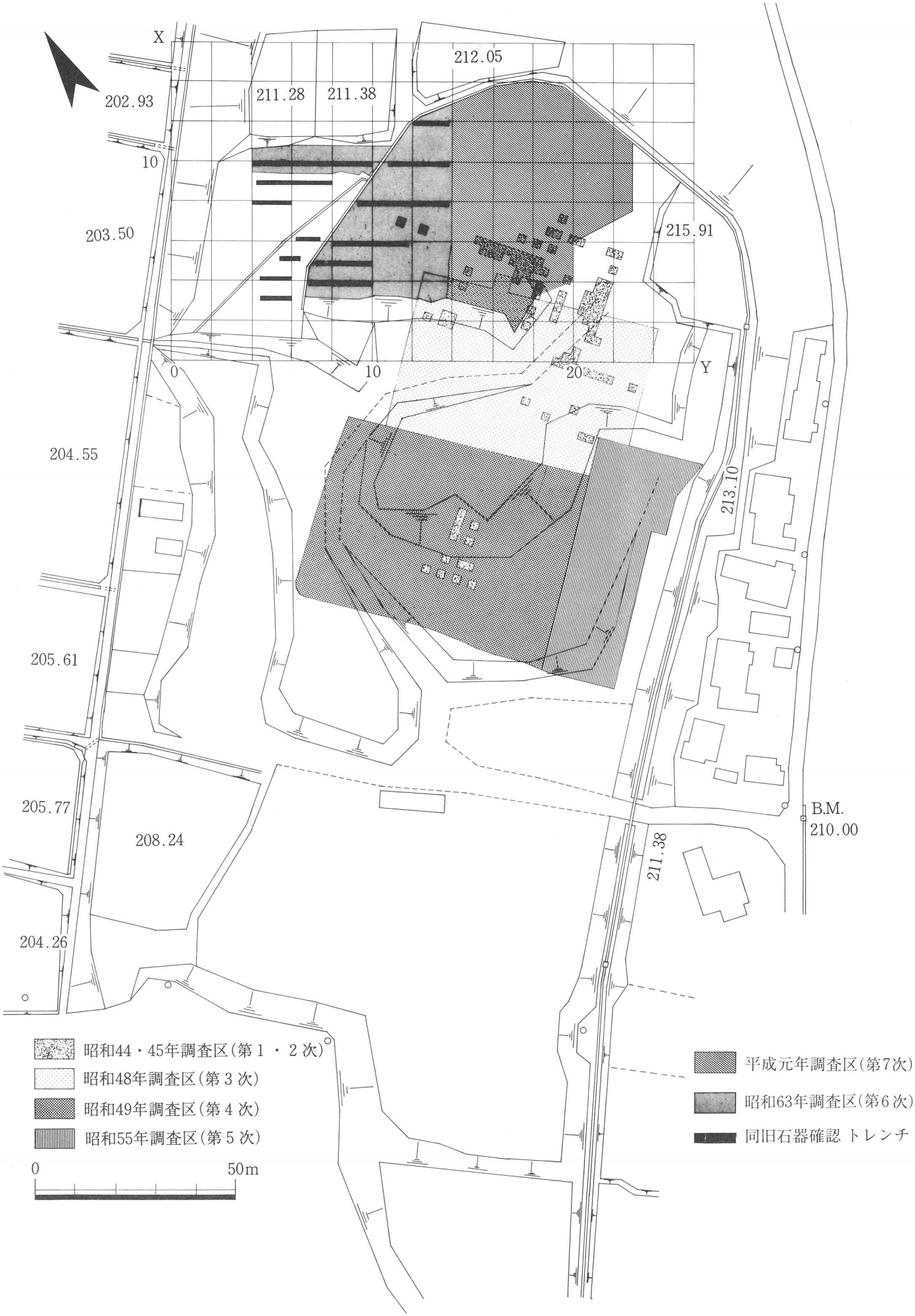
調査区は第３次調査区の北東にあたり、発掘面積は約2,000㎡。縄文時代前期中葉の住居跡２棟が検出された。

平成元年度調査（第７次）調査区は第６次調査区の東にあたり、発掘調査面積は約2,000㎡。

なお、当初は３カ年計画で着手した発掘調査であるが、今年度の調査で遺跡の北及び東北端が確認されたため、計画を２カ年に短縮することとなり、平成元年度をもって吉峰遺跡の発掘調査は完了した。

調査年度	発掘面積	調査期間	調査の概要	
			遺構	遺物
昭和44年 第１次	約382㎡	11月16日～12月１日	縄文時代前期の住居跡３ 縄文時代前期の炉跡１	縄文時代早期～中期中葉・晩期の土器、石器
昭和45年 第２次		３月10日～３月31日	縄文時代早期の炉跡１ 縄文時代前期の住居跡３	先土器時代のナイフ形石器２、両面加工のポイント１、エンドスクレイパー１、ドリル１ 縄文時代早期～中期・晩期の土器、石器
昭和48年 第３次	約2,520㎡	８月６日～９月18日	縄文時代前期中葉の住居跡６ 縄文時代前期後葉の住居跡２ 穴20	縄文時代前期中葉～後葉の土器、石器
昭和49年 第４次	約3,200㎡	６月３日～11月２日	縄文時代前期中葉の住居跡１ 縄文時代前期後葉の住居跡６ 縄文時代中期初頭の住居跡１ 縄文時代中期初頭の埋甕１ 穴81	先土器時代の削器２、先刃型掻器１、他３ 縄文時代早期～中期後葉の土器 縄文時代中期初頭以前の板状の土製品 縄文時代前期初頭の土板（メンコ） 石器
昭和55年 第５次	約1,100㎡	８月27日～９月９日	穴５	縄文時代早期～晩期の土器、石器
昭和63年 第６次	約2,000㎡	５月16日～９月27日	縄文時代前期中葉の住居跡２ 穴255	縄文時代早期～中期初頭・後・晩期の土器、石器 平安時代の須恵器・土師器
平成元年 第７次	約2,000㎡	10月16日～12月15日	縄文時代前期の住居跡４ （この内、２棟は再検出） 穴126	縄文時代早期～中期・後・晩期の土器、石器 縄文時代前期の抉状耳飾り２・未製品１

表１　調査結果一覧

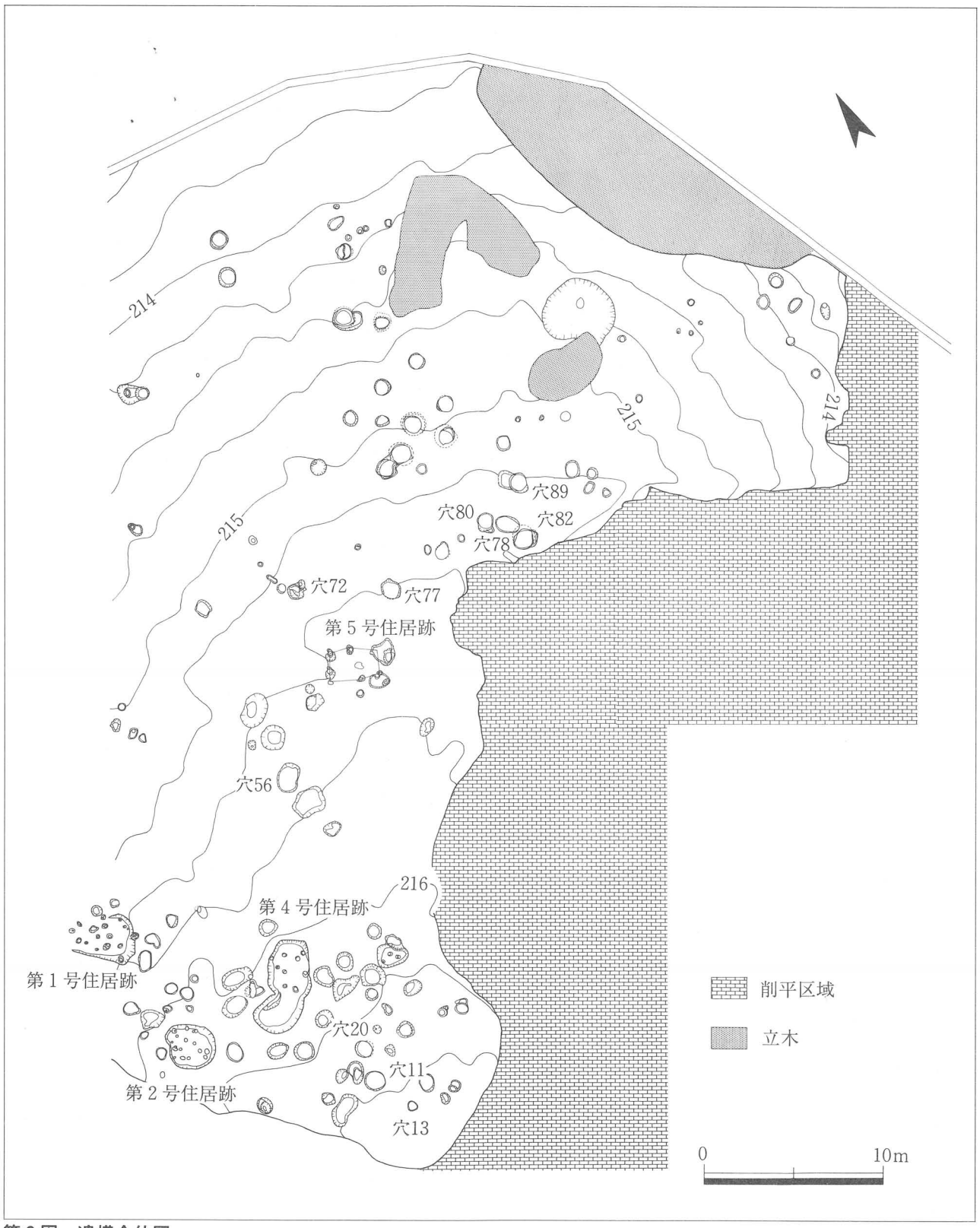

X
Y
212.05
211.28
211.38
202.93
10
203.50
215.91
0
10
20
204.55
213.10
205.61
205.77
208.24
211.38
B.M.
210.00
204.26
昭和44・45年調査区(第1・2次)
昭和48年調査区(第3次)
昭和49年調査区(第4次)
昭和55年調査区(第5次)
0
50m
平成元年調査区(第7次)
昭和63年調査区(第6次)
同旧石器確認 トレンチ

第2図　地形と区割図

Ⅲ　調査概要

1　立地と層序（第２・３図）

吉峰遺跡は、富山地方鉄道岩峅寺駅の北東約１km、立山町下田字川除山に所在する。一帯は、常願寺川扇状地の扇頂部にあたり、東側には、旧扇状地が隆起してできた河岸段丘が形成されている。



第３図　遺構全体図

遺跡は、高位段丘である吉峰段丘の小丘上に立地する。この小丘は、吉峰集落の西にあり、標高は230m前後である。川除山と呼ばれていたが、大規模な土砂採掘により破壊され、現在では原形をとどめていない。

今年度の調査対象地区は、丘陵の北東端部、第３次調査区の北、第６次調査区の東にあたり、北に向って緩やかに傾斜している。東側から南側にかけては、調査以前に削平をうけ、地山面が露出した状態となっている。また、調査区南端には、土砂採掘時に除去された表土が、土手状に３m程度盛り上げられている。

層序は、第１層・茶褐色土（約20cm)、第２層・暗茶褐色土（約20cm)、第３層・黄褐色粘土層（地山）となっており第２層が遺物包含層である。

調査区南側（X２～５区）は、土層の遺存状態が良好で、包含層の遺物も大部分がこの地区に集中している。調査区中央部以北（X６～14Y15～20区）は、第１層がほとんど除去された状態で、遺物量も南側に比べると極端に少なくなる。特にX６・７付近では、所々で削平が地山近くにまでおよんでいる。調査区東側（X10～Y21～23区）は、土層の遺存状態は良好だが、急な下り斜面となっており、遺物の量はごく少量であった。

２　遺構（第３図）

検出した遺構は、縄文時代の住居跡４棟、穴126である。なお、住居跡４棟のうち２棟は、第１～３次調査において報告されているものの再検出である。

第１号住居跡（第４図）　標高は約215.5m、X５Y14・15に位置する。住居跡の西側は、第６次調査区に一部かかっている。規模は、長軸約14m（推定)、短軸約2.8mの楕円形プランである。

覆土は下から、黄褐色粘質土、暗茶褐色土の順に堆積している。黄褐色粘質土は、東側では４cm程度と薄いが、西側へいくに従って厚くなり、10cm程度となる。暗茶褐色土は、東半にのみ存在し、東端では25cm程度堆積している。

壁は、東壁は30cmと壁高が高く、立ち上がりもしっかりしているが、西側ほど低くなり、西から北西にかけては、立ち上がりが確認できなかった。

床面は、平坦でほぼ水平である。床面及び壁面で、計17個の穴を検出した。この内、P１～７が主柱穴となる可能性が高く、P６とP７の間に想定できる柱穴を含め、８本主柱Y型のプランが考えられる。主軸方位は、N―54°―Wである。なお、P９～11も、掘り方等から主柱穴と考えられ、この場合、P１・２・７・９～11の６本主柱Y型となる。そして覆土の状態から、６本主柱Y型から８本主柱Y型へという、住居の拡張を考え得る。

柱穴以外の穴には、P８とP12がある。P12は、直径約40cmの円形で、深さ約20cm、覆土中よりスクレイパーが出土している。P８は、深さ約14cmの不整形で、遺物は出土していない。

炉は、床面を精査したが、検出できなかった。住居跡覆土中からは、土器の小破片が数点出土している。

時期は、遺物等から、縄文時代前期後葉に位置づけられよう。

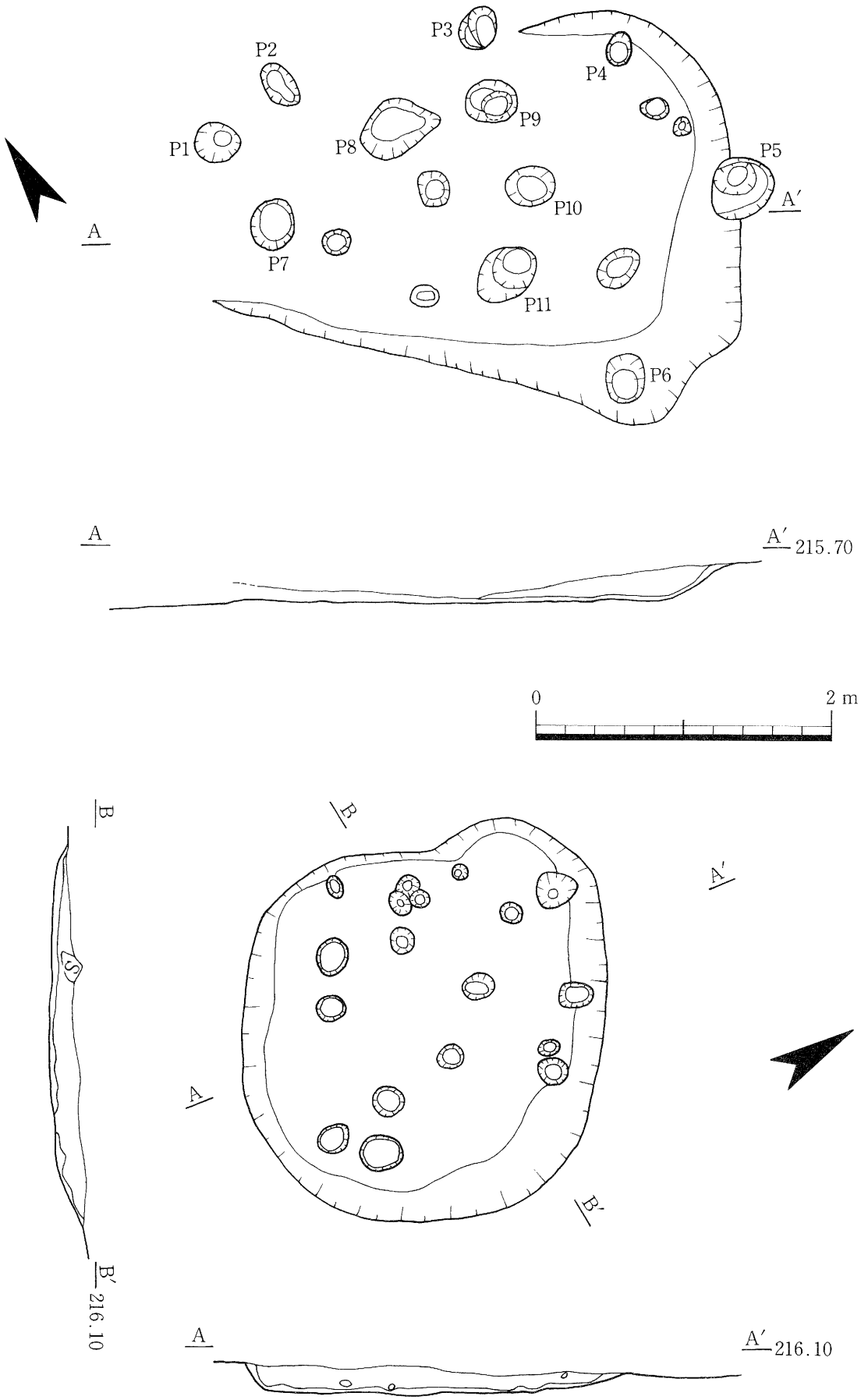
第２号住居跡（第４図）　標高は約216m、X３・４Y15・16に位置する。今年度検出したのは、長軸2.8m、短軸、2.4mの不整円形プランであるが、位置関係から、昭和48年度（第３次）調査における第13号住居跡（第25図上）の再検出であることが判明した。以後、第13号住居跡について、第３次調査の概報から、要点を略記しておく。

規模は、長軸５m、短軸4.5mの楕円形プランで、南側に２個連結した張り出しピットを設ける。主柱は二重の環状を呈し、外環は９本主柱XY型、内環は７本主柱XY型のプランである。

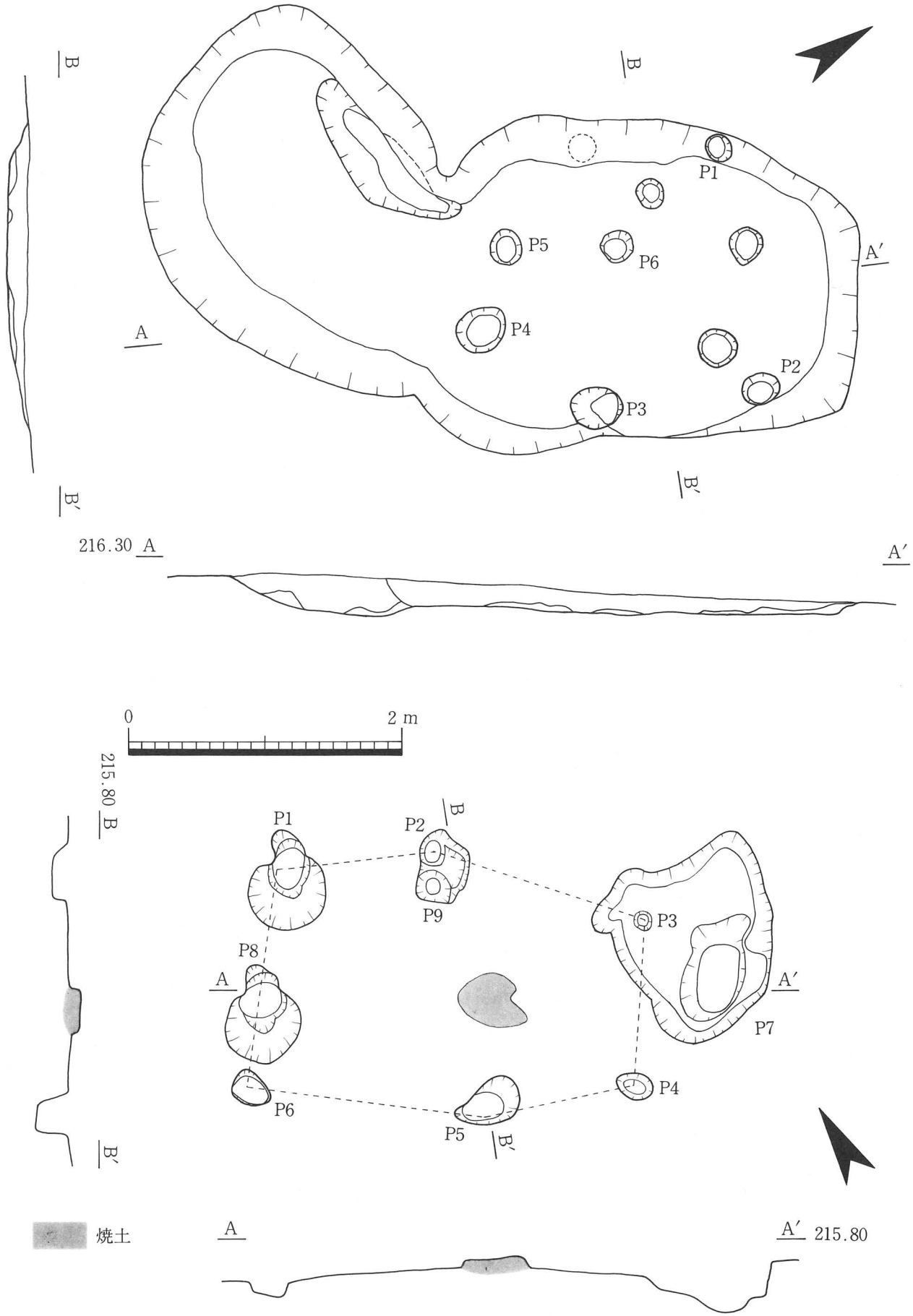
住居跡中央付近に、地床炉を持つ。主軸方位は、N―32°―Wである。

時期は、縄文時代前期中葉に属する。

第４号住居跡（第５図）　標高は約216m、X４・５Y16・17区、第２号住居跡の東側５mに位置する。位置関係から、昭和48年度（第３次）調査における第14号住居跡（第25図下）の再検出であることが判明した。なお、第３次調査の概報では、プランの検出が困難としてあるが、今回の所見と合わせて記述しておく。



第4図　遺構実測図　上:第1号住居跡　下:第2号住居跡



第5図　遺構実測図　上:第4号住居跡　下:第5号住居跡

規模は、長軸3.5m、短軸2.1mの楕円形プランである。なお、第3次調査の実測図にみられる張り出しピットは、穴33にあたるが、住居跡にともなうものではないと考えられる。

床面は、全体に平坦で、ごく緩やかに北へ向って傾斜する。床面及び壁面上で、計9個の穴を検出した。この内、P1～5が主柱穴となる可能性が高く、P1の南側に想定できる柱穴を含め、6本主柱X型と考えられる。主軸方位は、N—27°—Eである。

時期は、第3次調査の所見から、縄文時代前期中葉に属する。

第5号住居跡（第5図）　標高は約215.5m、X8Y17・18に位置する。厚さ約10～15cmの盛り上がった焼土と、周辺の穴群によって構成される。床面の状況から、第2層に掘り込まれた浅い竪穴住居か、平地式住居と考えられる。

穴の掘り方及び深さから、P1～6が主柱穴となる可能性が高く、6本主柱X型のプランと考えられる。また、P7は、穴の形状等から、住居に伴うものである可能性が高い。なお、P8については、掘り方はP1に似ているが、深さが約10cmと浅く、柱穴とは考えにくい。

規模は、柱穴配置から、長軸が4m前後、短軸が約2.5mの楕円形プランと推定できる。主軸方位は、N—55.5°—Wとなる。

穴（第6・7図）　穴は、126個検出し、その内71個から遺物が出土した。しかし、土器は小破片が多く、時期の判別できる遺物が出土した穴は、わずか9個にすぎない。遺物は、全て縄文時代に属するもので、早期後葉、前期中葉前期後葉、後期後葉の4時期に大別できる。

早期の遺物が出土した穴は、4個である。穴19は、X3・4Y17に位置し、径約1m、深さ約45cmの円筒形の穴である。穴24は、X4Y15に位置し、径約70cm、深さ約15cmで、中央部に径約20cm、深さ約10cmのピットを持つ。穴99は、X11Y17に位置し、径約90cm、深さ約60cmの円筒形の穴である。穴104は、X11Y18に位置し、径約95cm、深さ約25cmの浅い円筒形（皿状）の穴である。これらの穴は、全て整った円形の平面プランを持ち、掘り方もしっかりしている。また、覆土は、いずれも炭化物が少量混入した茶褐色土の単層で、短期間で堆積したと考えられる。

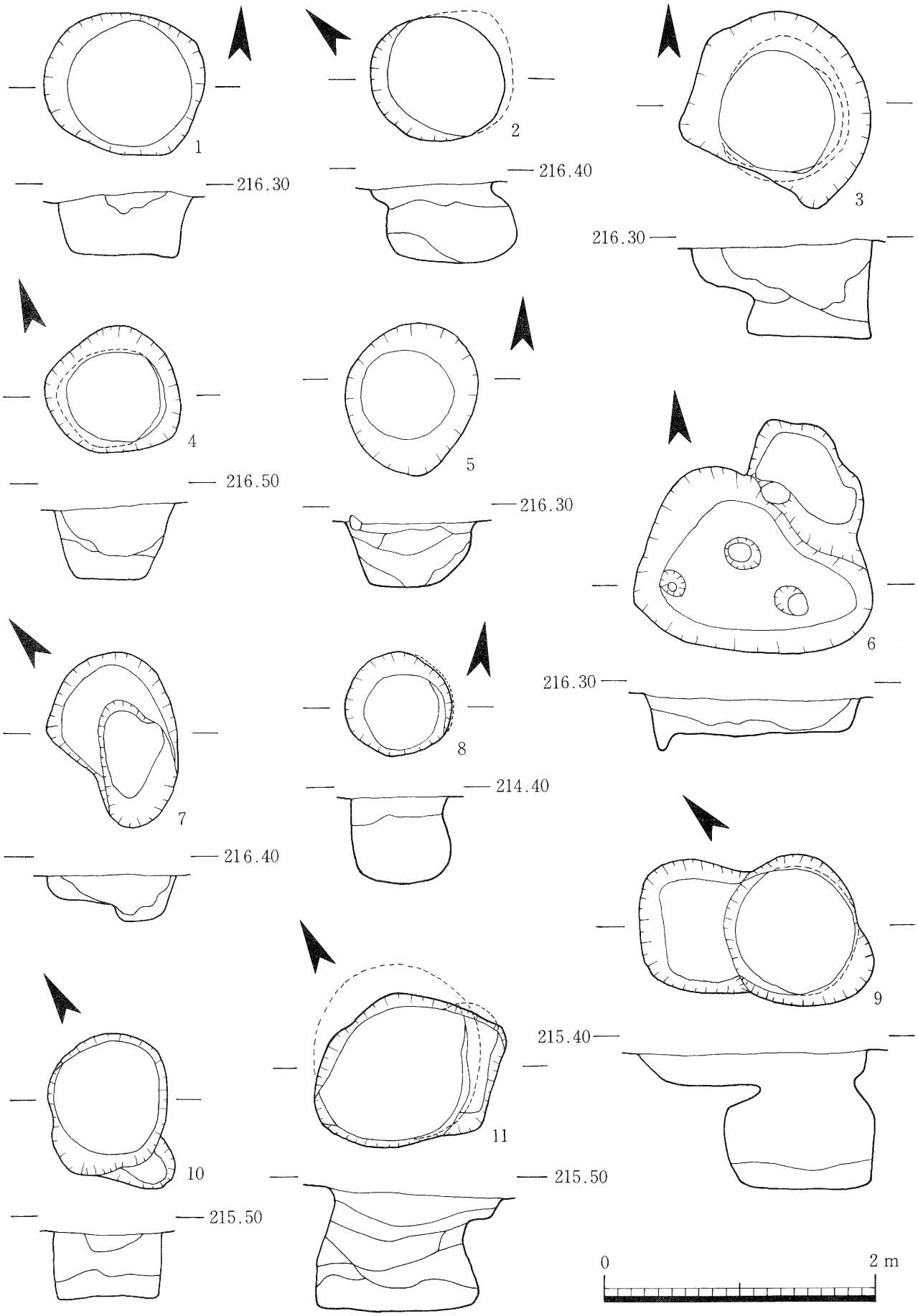
なお、第4号住居跡及び穴11・33からも、早期の遺物が出土しているが、前期中葉のものなど他の時期の遺物も出土しており、後世の攪乱をうけていると考えられる。

前期中葉の遺物が出土した穴は、穴80・82の2個のみである。穴80は、X9・10Y19に位置し、径約90cm、深さ約50cmの円筒形の穴である。穴82は、X9Y19に位置し、穴80とは近接している。いわゆる袋状ピットと呼ばれている穴で、径約1m、深さ約90cmで、東側に足場状の段を設けている。穴80の覆土は、炭化物の混入が少く、単純な堆積状態であるが、穴82の覆土は、炭化物の量も多く、堆積も複雑である。

前期後葉の遺物が出土した穴は、3個で、調査区南側に集中している。穴20は、X4Y17に位置し、径約1m、深さ約60cm、いわゆる袋状ピットである。穴25は、X4Y15に位置し、径約45cm、深さ約5cmの浅い皿状で、南西側が径20cm、深さ約15cm掘り込まれ、2段状になっている。穴154は、X3Y17に位置し、穴20に隣接する。南側が深い2段状の穴で、長軸約1.3m、短軸約90cmの不整楕円形を呈し、深さは約30cmを測る。いずれの穴の覆土も、炭化物の混入は少く、単純な堆積状態である。

後期の遺物が出土した穴は、穴96を除けば、X9～12Y17～19区に集中しており、計8個である。遺物は、穴103出土のものが宮滝式系統と考えられ、その他は全て井口式に属する。穴86・88・89・103・126は、いわゆる袋状ピットで径は1m前後、深さは、穴86が約65cmとやや浅いが、他は1m近くである。穴78は、径約80cm、深さ20cm、穴84は、径約90cm、深さ約50cmで、深さは異なるが、平面形はしっかりした円形である。穴96だけは、他の穴からやや離れてX11Y15に位置する。径約20cmの円形の穴だが、覆土の状態から根穴と考えられる。

これらの他に、時期のはっきりしない穴として、底部で袋状になる穴（穴40・119・125）円筒形の穴（穴22・48・



第6図　遺構実測図　1．穴-19　2．穴-20　3．穴-40　4．穴-22　5．穴-48　6．穴-152　7．穴-154
8．穴-119　9．穴-89　10．穴-80　11．穴-82

128)、平面形はしっかりした円形だが、深さが30cm前後と浅い穴（穴77・102・104・123・130)、底に小ピットをもつ穴(穴152）などがある。

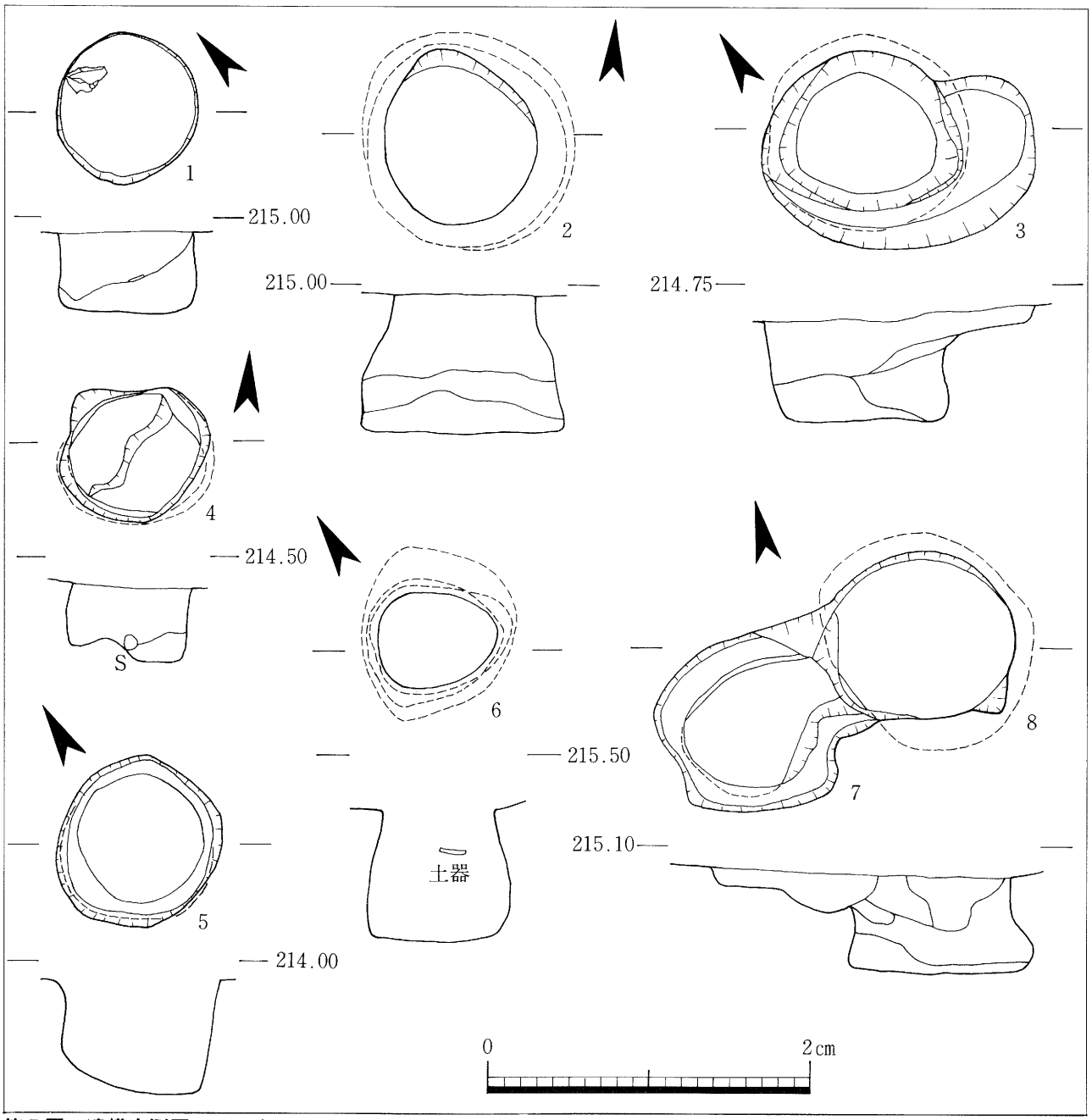
なお、今回の調査区では、穴が時期別に編在する分布状態を示しているので、その概要を記しておく。

早期末葉の穴は、調査区南側（X４区）と北側（X11区）に、各２個存在する。この時期は、吉峰において土器が多量に出土する最初の時期であり、形成期の集落範囲を考えるうえで重要な遺構といえよう。

前期中葉末（蜆ヶ森Ⅱ式期）の穴は、調査区北側（X９Y19区）に、２個隣接して存在する。蜆ヶ森式土器は、全調査を通して出土量がきわめて少く、吉峰集落の中間衰退期（あるいは中間廃絶期）と考えられる。

後期の穴は、調査区北側に、X10・11Y18区を中心として、８個存在する。この時期の遺構は、今回の調査で初めてまとまって検出された。従来、吉峰における生活活動は、中期初頭で終ると考えられていたが、後期にもある種の活動拠点として利用されていたことを裏づけた意義は大きい。

（山嵜）



第７図　遺構実測図　１．穴-84　２．穴-103　３．穴-125　４．穴-130　５．穴-128　６．穴-126　７．穴-85　８．穴-86

3　遺物

大部分の遺物は、遺物包含層及び盛土（第３次発掘調査の契機となった、除去された表土）から出土しており、遺構から良好な状態で検出し得た個体は少ない。

(1)　土器

今回出土した土器は、全て縄文時代に属するものである。

早期（第８図１～６）　１は、細い沈線で格子目文を描き、格子目の中央に円形刺突文を施す。文様の下端は横位の沈線で区切られており、外反する口縁部近くと考えられる。焼成は良好で、胎土には白色砂粒を含む。早期中葉、三戸式系の土器と考えられる。

２～５は、常世式に比定できる一群である。[註1] ２は、口縁にそって２条の沈線をめぐらし、その下には斜位の条痕文が施される。３は棒状工具で、５は貝殻腹縁で、綾杉文が施文される。４は、横位の連続刺突文を２段に施している。２・４は焼成良好だが、３・５は焼成不良で脆い。胎土は緻密で、５は白色砂粒が多めである。

６は、突起をもつ口縁部で、突起上面を指押えで凹め、２条の沈線を施文している。胎土には、白色砂粒を多く含み、繊維が少量混入されている。東海系の入海式に比定できよう。[註2]

早期末葉（第８図７～25）　神明原A式[註3]に属する土器群である。

７～17は、条痕文で施文する一群である。８～10・12は、細い条痕文（貝殻表面を使った条痕文）で、７・11・13～17は、太い条痕文（貝殻内面を使った条痕文）で施文する。11～14は、内面にも横位の条痕文を施す。文様としては斜位の条痕が多いが、９・10・12は上部で湾曲する縦位条痕文を、17は綾杉文を施文している。

18～22は、縄文で施文する一群である。縄文は、20がLRで、他はRLである。18は、波状の口縁部で、口唇部にも縄文を施す。19は、羽状縄文を施す。20は、胴部破片である。21は、口唇に２連の突起を付ける。22は、口縁端部を棒状具の連続押圧によって小波状に整形し、内側口縁直下に波形にあわせて連続刺突を施す。

23は、絡条体の一種による施文と考えられる。口縁端部は、22と同様の整形が施される。

24は、少し内削りの口縁部で、篦状工具による連続刺突で施文される。

25は、あげ底状の底部で、直径は約７cmである。外面にはRLの縄文が施され、底面には連続爪形文が円形に施されている。南太閤山遺跡[註4]の、第Ⅱ群土器、第10―B類に類似する。

焼成に関しては、焼成良好で黒く硬いもの（７・12・14・19）と、いわゆる赤焼きかそれに近い焼成で脆いもの、（８～11・13・15～18・20～25）の２種類があり、後者が主体を占める。

胎土には、７・21以外は、全て繊維を含む。特に、赤焼きのものには、多量に繊維を含む傾向がみられる。また、白色砂粒は、７・20～23にやや多めに含まれているが、他の個体ははごく少量しか含まれていない。

これらの土器の時期について、ここでは神明原A式に属するものとして扱ったが、あげ底や爪形文・羽状縄文・綾杉文・口唇部への縄文施文など、神明原A式には無い器形・文様も多くみられる。そして、これらの特徴は、後続する極楽寺式によくみられる特徴でもある。ここから、これら早期末葉に位置する一群は、早期後葉（神明原A式）から前期前葉（極楽寺式）へという土器型式の変化を考えるうえで、重要な一群であるといえよう。

前期中葉（第９図）　朝日C式から蜆ヶ森Ⅱ式にかけての時期のものであるが、蜆ヶ森Ⅰ式・同Ⅱ式古段階[註5]のものはみられず、空白期間となっている。

１～６は、北白川下層Ⅱｂ～ｃ式に比定できる一群である。

１は、波状口縁の鉢である。器形の特殊さに加え、表面に赤彩の痕跡をとどめており、祭祀用などの特殊な用途が考えられる。文様は、C字形Ⅱ型爪形文を、２条１単位にして、口縁部と胴部に２段に施文する。胎土は、白く緻密で、大きめ砂粒を少量含む。同様な器形は、北白川小倉町遺跡[註6]と村山遺跡[註7]でみられるが、両者とも水平口縁であり、

きわめて稀な器形といえよう。なお、胎土などからみて、搬入品である可能性が高い。

2は、無文の口縁直下に、C字形Ⅱ型爪形文を、2条1単位で施文する。口唇部は、なでて面とりしてある。

3は、条痕文地の上に、C字形Ⅱ型爪形文を1条づつ施文する。

4は、口唇部を棒状工具の連続押圧で小波状とし、直下に内外面から連続刺突を施して、粘土紐を貼付したような効果をあげている。文様は、C字形Ⅱ型爪形文を1条づつ施文する。

5は、凸帯上を交互に斜めに刻み、山形刻みを施している。地文については、表面の磨耗が激しく、判明しない。

6は、口唇部に粘土紐を貼付し、頂部を平坦に押え、T字形の断面としている。文様は、LRの羽状縄文で、口唇部外面には、縄文の連続押圧を施す。また、口縁部に狭い無文帯を設け、小孔を穿っている。

7～13は、諸磯a～b式に比定できる一群である。

7～9は、同一個体で、外反する深鉢である。文様は、半截竹管による平行線文で施文される。口縁直下に5条、胴部との境に3条の平行線文を施し、口縁部文様帯とする。文様帯には、格子目文と、格子目の交点に同一原体で爪形刺突を施す。胴部には、撚りのゆるいRL縄文が施されている。

10・11は、刻みのある浮線文で施文するものである。口縁部に、口縁と平行な2本の浮線をめぐらし、11ではさらに浮線を垂下させて、入組文を形作っている。

12は、外反する深鉢の口縁部で、2連の山形突起を設けている。文様は、平行線文と押圧文（または刺突文）によって施文される。平行線文により、幅約1㎝の文様帯を3段に設け、そこに棒状工具の押圧で、長楕円形の文様を連続して施文する。また、突起部の口唇上には、半截竹管による押し引きがなされている。

13は、浅鉢の口縁部で、急角度で内屈する。口縁直下と屈曲部直下には、太く浅い沈線がめぐらされ、屈曲部には浅い斜めの連続刻みが施され、その下には小孔が穿たれている。また、口縁部には、3本の短い粘土紐を縦に貼付し、胴部（屈曲部より下部）には、連続刺突文によって入組文が描かれる。なお、表面はよく磨かれている。

以上、2～13は、系統は異なるが、前期中葉の前半というまとまった時期の土器であり、胎土と焼成状態から2群に分類できる。すなわち、胎土は、2・4・7～9・12・13がやや粗くて白色砂粒を多量に含むのに対して、3・5・6・10・11は緻密で砂粒もごく少い。また、焼成状態も、前者は良好だが、後者は若干不良でやや脆い。

なお、この時期の土器型式（福浦下層式）の特徴として、諸磯式や北白川下層式など、周辺諸地域の影響を強く受けた土器を主体に構成されている点があげられる。この様な状況は、吉峰遺跡だけでみられるのではなく、北陸の他の遺跡においてもみられる傾向であり[註8]、同時期の北陸の一般的特徴と考えられる。

14・15は、蜆ヶ森Ⅱ式新段階に比定できる土器である。

14は、指による横ナデで微隆起線文を作り出し、その下にはRL縄文を施文する。典型的な蜆ヶ森Ⅱ式土器である。

15は、ゆるく外反する深鉢の口縁部で、RLとLRの縄文を交互に横走させ、羽状縄文を施文している。

前期後葉前半（第10図1～12）　福浦上層式に比定できる土器群である。

1～4は、鋸歯状印刻文を施文する一群である。

1は、結節状沈線文と組んで、2・4は結節状浮線文と組んで、3は半隆起線文と組んで施文している。口縁端部には、1はコブ状の、2は耳状の突起を付している。焼成は、いずれも良好である。

5～7は、縄文地の上に、結節状浮線文で施文する一群である。8も、表面の磨滅が著しいが、この一群に属するものと考えられる。なお、8は緻密な胎土でやや脆い焼成状態なのに対して、他は全て良好な焼成状態を示す。

9は、結節状沈線文のみで施文する。胎土は、粗く、やや大きめの砂粒を多く含み、焼成不良でたいへん脆い。

10は、半隆起線文と鋸歯状印刻文で施文する、胴上部破片である。焼成は良好である。

11・12は、縄文地の上に、やや太めの粘土紐を貼付する一群である。粘土紐の上からは、連続押圧が施される。

前期後葉後半（第10図13～17）　朝日下層式に比定できる土器群である。

13～16は、細い粘土紐の貼付（いわゆるソーメン貼り）により施文する一群である。

13・15は、縄文地の上に粘土紐を貼付しており、13では、波状口縁の形状にあわせて、山形に貼付している。

14は、無文地の上に粘土紐を貼付しており、やはり波状口縁の形状にあわせて山形に貼付し、波頂部にも粘土を貼付してコブ状の突起を付している。

16は、結節状浮線文とソーメン貼りを組んで施文している。

17は、の字状突起である。突起の周囲は結節状沈線文で囲まれ、内側は無文となっている。

後期中葉～後葉（第10図18～22、第11図１・２）

18は、注口の屈曲部と考えられる。文様は、円形圧痕文と沈線文によって施文される。胎土には、白色砂粒と雲母を含み、焼成は良好である。宮滝式系（井口Ⅱ期併行[註9]）の土器と考えられる。

19は、外反する深鉢で、ゆるい波状口縁の波頂部又は突起部である。井口Ⅲ期に属するものと考えられるが、文様が異節斜縄文[註10]で施されているため、前期に属する可能性もある。

20・21は、沈線によって、やや幅の狭い無文帯と縄文帯を作り出している。井口Ⅲ期に属するものと考えられる。

22は、胴上部でゆるやかに屈曲し、口縁部が外反ぎみにのびる深鉢である。口唇部には、４ヶ所に小さな山形突起が付される。文様は、胴屈曲部に４条の沈線がみられるだけである。井口Ⅲ～Ⅳ期に属するものと考えられる。

１は、皿又は蓋である。表面は無文で、口縁内部には押圧縄文が施される。井口Ⅰ期に類似したものがみられる。

２は、内湾ぎみに立ち上がる深鉢で、口縁部に沈線を２条めぐらし、胴部には細かいLR縄文が施される。井口Ⅲ式に属するものと考えられる。

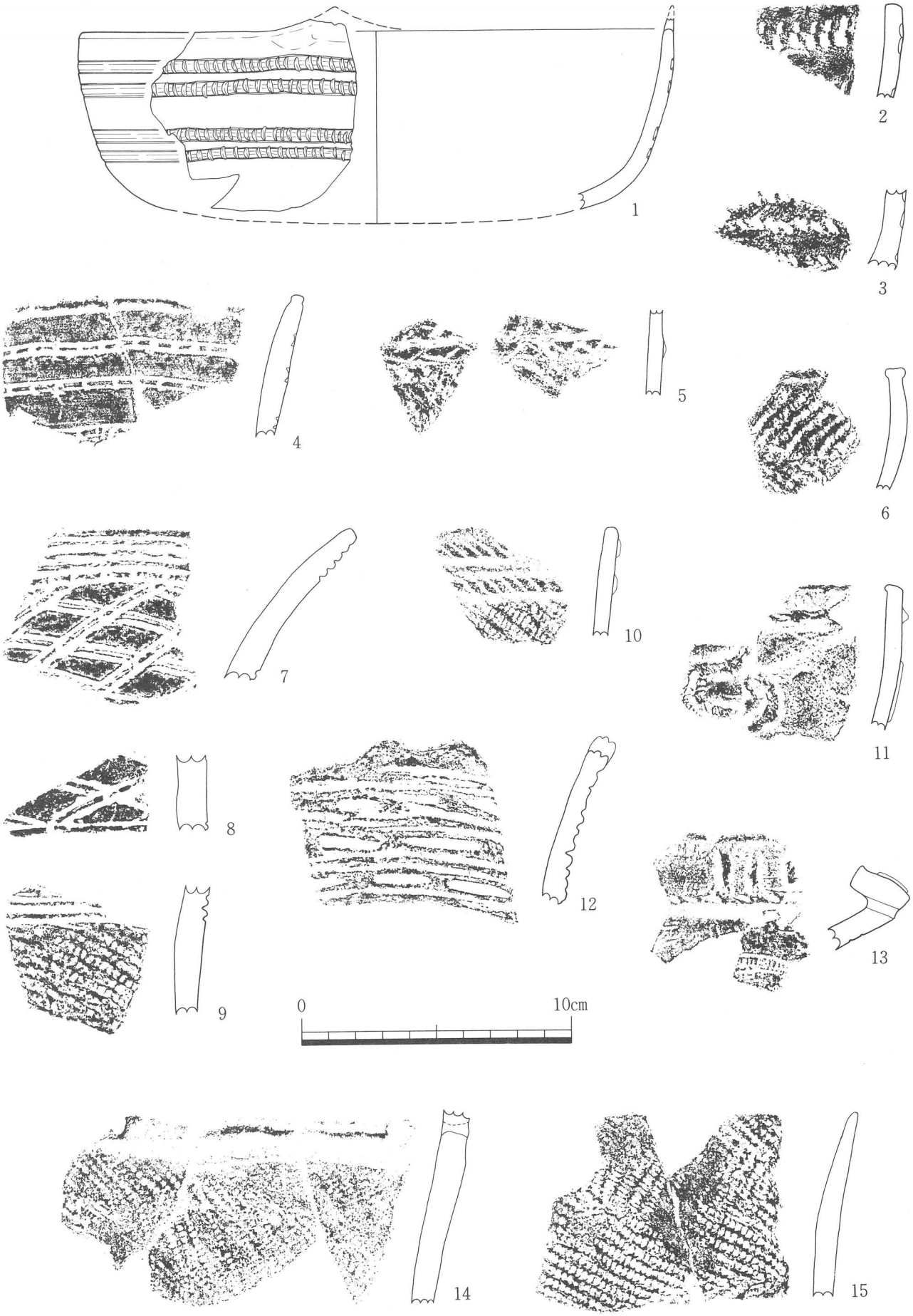
以上、18～２の胎土は、いずれも白色砂粒と雲母を含み、19がやや粗い他は、良く似ている。焼成状態も、１がやや赤焼きぎみである他は、全て良好である。

晩期（第11図３・４）　大洞A式に属する土器である。

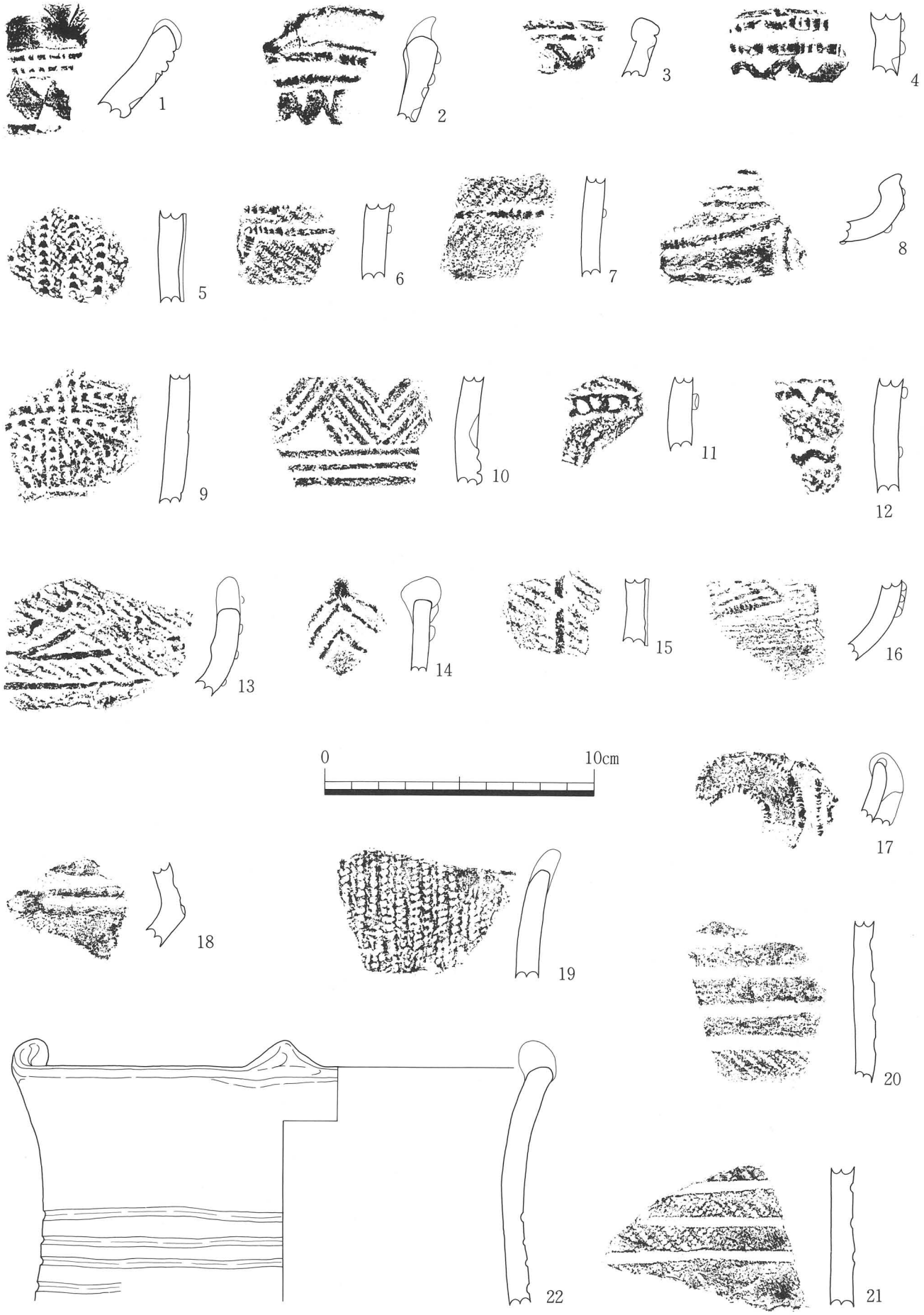
３は、内湾ぎみに立ち上がる深鉢である。文様は、棒状工具による平行沈線文で施文され、沈線で胴部と区切られた口縁部文様帯に、連弧文が施される。表面には、赤彩の痕跡が残り、大量のススが付着する。胎土には、砂粒が大量に含まれており、焼成は良好である。

４は、大きく外反する深鉢である。口唇部は、平坦に面とりし、棒状工具を押圧する。外面には擦痕がみられる。胎土には、砂粒が大量に含まれており、焼成は良好である。　（森）

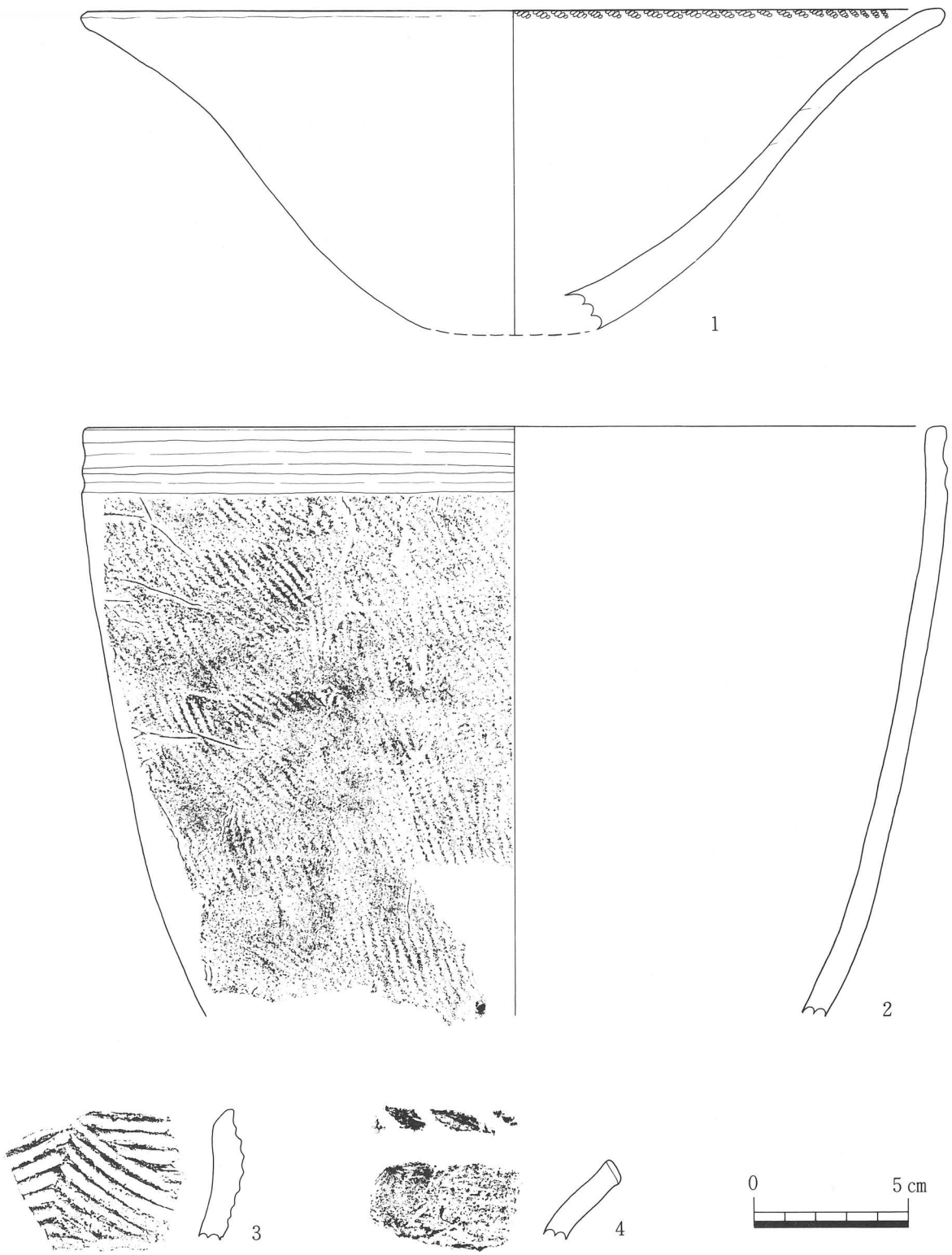
第8図　遺物実測図　3・17．住04　4．穴11　7・13．穴33　8．穴24　11．穴19　16．穴99　その他、包含層



第9図　遺物実測図　5左．穴11　5右．住04　7．穴33　14．穴82　その他、包含層



第10図　遺物実測図　2．穴154　14．穴20　15．穴25　18．穴103　19．穴88　20．穴96　22．穴86
その他、包含層



第11図　遺物実測図　1．穴78　2．穴126　3・4．包含層

(2) 石器

出土した石器には、石匙1・削器7・楔形石器1・石錐1・石錘2・打製石斧3・石ランプ2・磨製石斧24・叩石3・凹石20・擦石60・石皿13・砥石2・抉状耳飾り3がある。磨製石斧および、凹石・叩石・擦石・石皿といった堅果類を加工する道具が卓越し、打製石斧、石鏃、石錘が低調な様相は北陸地方における山間部の縄文時代前期の石器組成の一般的なあり方を示しているものと考える。

石匙（第12図1）　平面が三角形状の横形の石匙が1点出土している。幅広の剥片を素材とし、周縁部のみ二次加工を行う。石材は流紋岩、器部を欠損する。

削器（第12図2～7、第13図1）　2は周縁を巡るように両面から二次加工を行う。石材は安山岩。3～5は縦長剥片を素材とし周縁の一部に浅い2次加工を施す。3は下半、4は上半を欠損する。石材は3がチャート、4が凝灰岩、5が鉄石英である。6は全長10.8cm、幅6.5cmを測る大型品である。腹面左側縁にはバルブを除去するための二次加工を行う。石材は流紋岩。第12図7・第13図1は横長剥片を素材とし第12図6と同様バルブを除去するための二次加工を行う。石材は第12図7が安山岩、第13図1が鉄石英。

楔形石器（第12図8）　平面形は台形状を呈し背面の上下両端に微細な剥離痕が残る。石材は玉髄。

石錐（第12図9）　周縁部を背、腹両面から二次加工を施し、断面形が凸レンズ状の先端部を作り出している。石材はチャート。

石核（第13図2～5）　作業面を固定し、作業面の全周から剥片を剥離する2、3などがある。4は黒曜石製の石核であり、熱を受けている。

抉状耳飾り（第13図6～8）　6は長さ3.2cm、幅3.3cm、7は長さ4.0cm、幅4.6cmを計る。石材は6が蛇紋岩、7が滑石である。8は抉状耳飾りの未製品である。長さ5.3cm、幅5.6cmを計る。石材は蛇紋岩である。

石錘（第14図1～2）　2点出土しているが、いずれも自然礫を素材とし、長軸両端に抉りを入れるための剥離を行う。重量は1が195g、2が365gである。

ランプ形石製品（第14図3）　2点出土している。口径10cm前後と推定する。詳細は不明。

打製石斧（第14図4～5）、4は縦長で扁平な自然礫を素材とし、周縁部に二次加工を施す。平面形は短冊形を呈する。5は大型の横長剥片を横位に用い、両側縁および基部に背・腹両面から二次加工を施し、刃部は第一次剥離によって生じた面をそのまま用いる。平面形は撥形。石材はいずれも流紋岩である。

有肩打製石斧（第14図6）　横長剥片を横位に用い、周縁部に二次加工を施す。先端を欠損する。

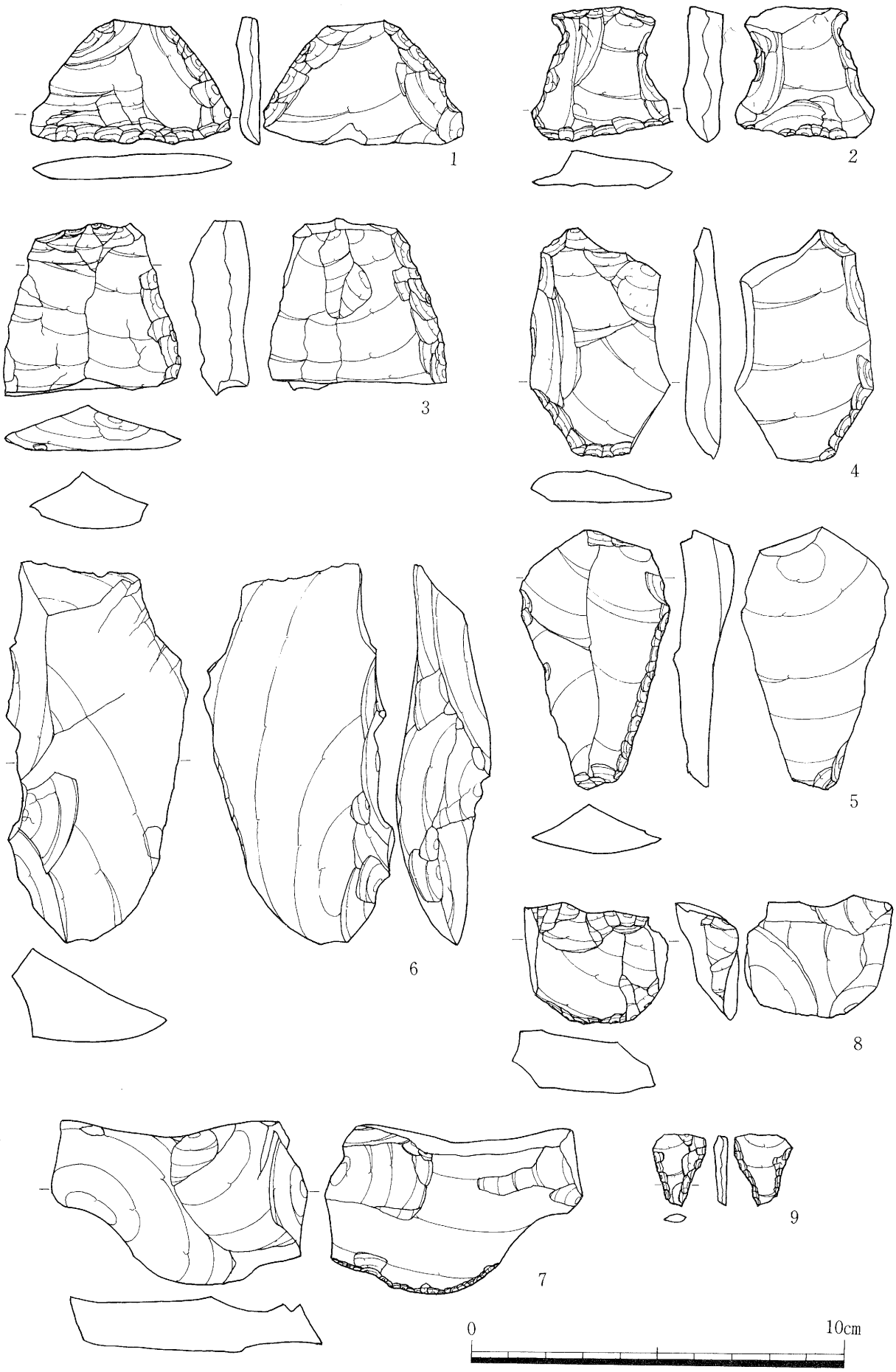
磨製石斧（第14図7～18、第15図）　完成品（第14図7～18、第15図1～10）と未製品（第15図10～11）がある。完成品は刃部・基部を欠損するものがほとんどで、完形品は少ない。磨製石斧の大きさには、Ⅰ長さ17cm～16cm前後のもの（第15図10～11）、Ⅱ長さ13cm前後のもの（第15図6）、Ⅲ長さ8cm前後のもの（第14図10～12）、Ⅳ長さ5cm前後のもの（第14図7）の四者に分類でき、Ⅰ・Ⅱは樹木の伐採と大型材の加工、Ⅲ・Ⅳは細部加工を含む樹木の様々な加工に用いられたものと推定できる。[註11] 形態は定角式の物がほとんどであるが、第15図9・10は乳棒状を呈する。石材は大半が蛇紋岩を用いるが、第14図9・16・17　第15図4・10・18は砂岩系の石材を用いる。第15図1・7・8は刃部再生を試みている。

凹石（第16図、第17図1～6）　長楕円形の自然礫を素材とし両面の主軸にそって直線的にくぼみが並ぶ第16図1・2・4・5・7、楕円形の扁平な自然礫を素材とし、両面または片面の中央部に敲打痕が集中する第16図3・6・8・9　第17図1～6、縦断面が三角形を呈し両面の中央部付近にくぼみを有する第16図9・10などがある。石材は砂岩系のものを多く使用する。ほとんどのものが片面あるいは両面に磨痕を持ち、また側縁に敲打を持つものも多く存在し、後述する叩石・擦石と重複した機能を持っていたものと考える。重量は400g前後のものが多い。

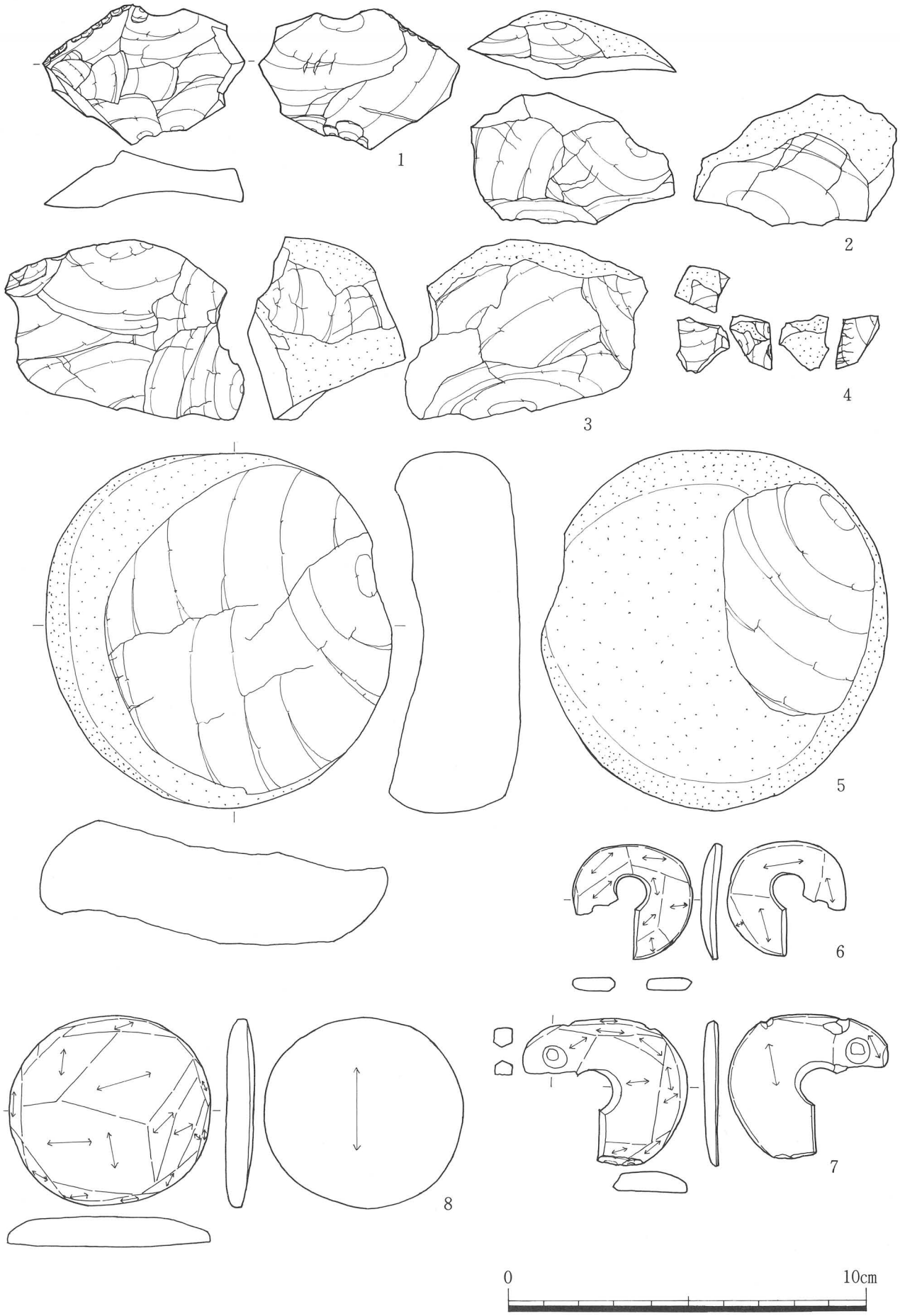
叩石（第17図７～９）　平面が台形状、断面が隅丸方形を呈した叩石が３点出土している。上下両端に敲打痕を有する。重量は７が830ｇ、８が740ｇ、９が1140ｇである。石材はいずれも砂岩系のものを使用する。

擦石（第18図、第19図、第20図１～２）　擦石は、円礫の平面を使用するものが最も多いが、円礫の側縁を利用する第18図７、断面三角形の礫の各側縁を利用する第18図８・９などがある。擦り石の大きさは長さ７cm、幅７cm前後の比較的小型のもの（第18図１～３）から、長さ13cm、幅８cm（第20図１～２）の大型のものまで存在するが、長さ９～10cm、幅８～９cmのもの（第19図）が一般的である。重量は300ｇ前後・600ｇ前後・800ｇ前後と３つのピークがある。石材は凹石と同様砂岩系のものが多用される。

石皿（第20図３～８、第21図）　扁平な礫を素材とした第20図３～８・第21図１～３と厚手の礫を素材とした第21図４がある。いずれも中央部が弓形に凹むが、大きさにはかなりバラエティがある。（春日）



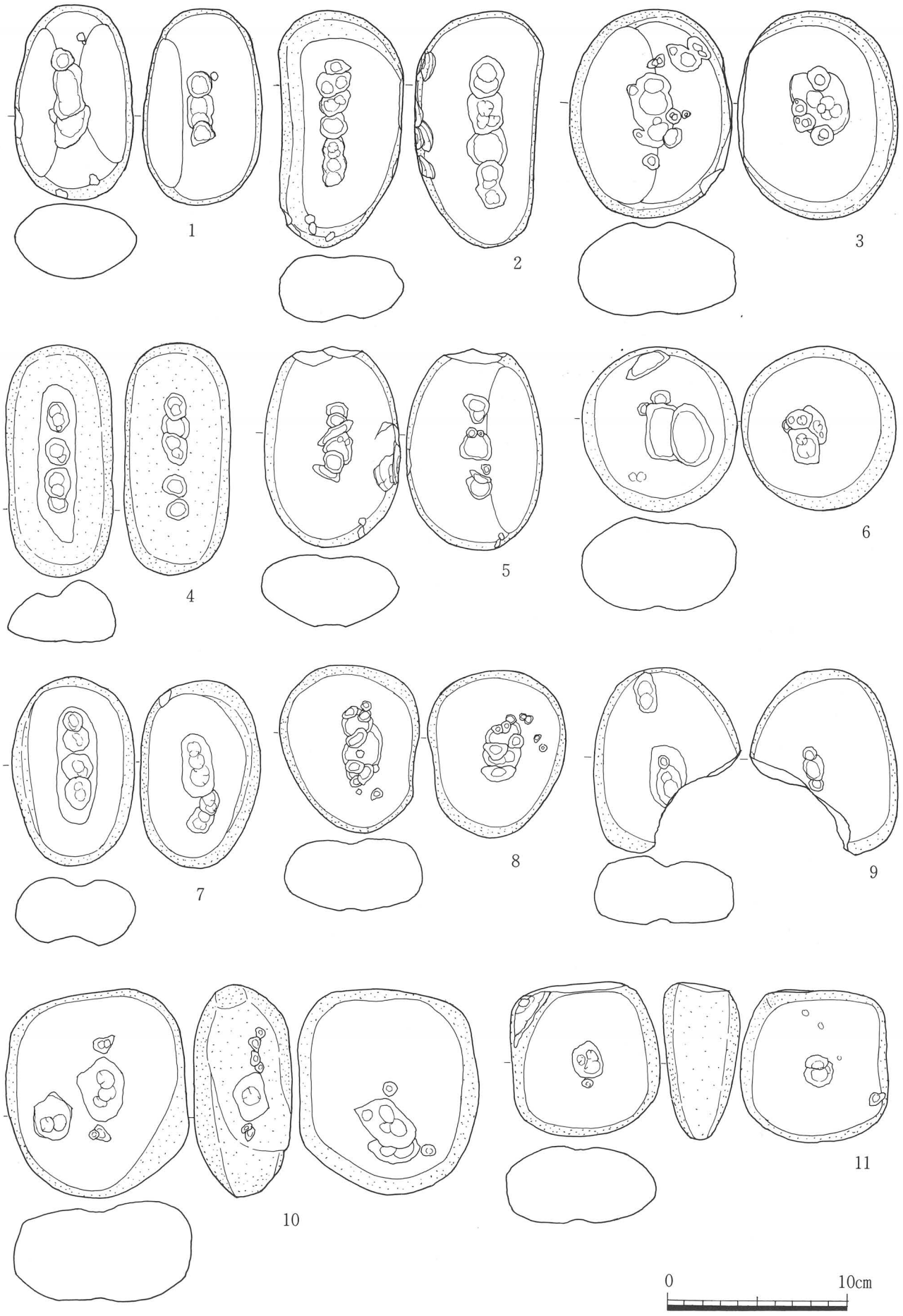
第12図　遺物実測図　2．第1号住居跡　5．穴156　その他、包含層



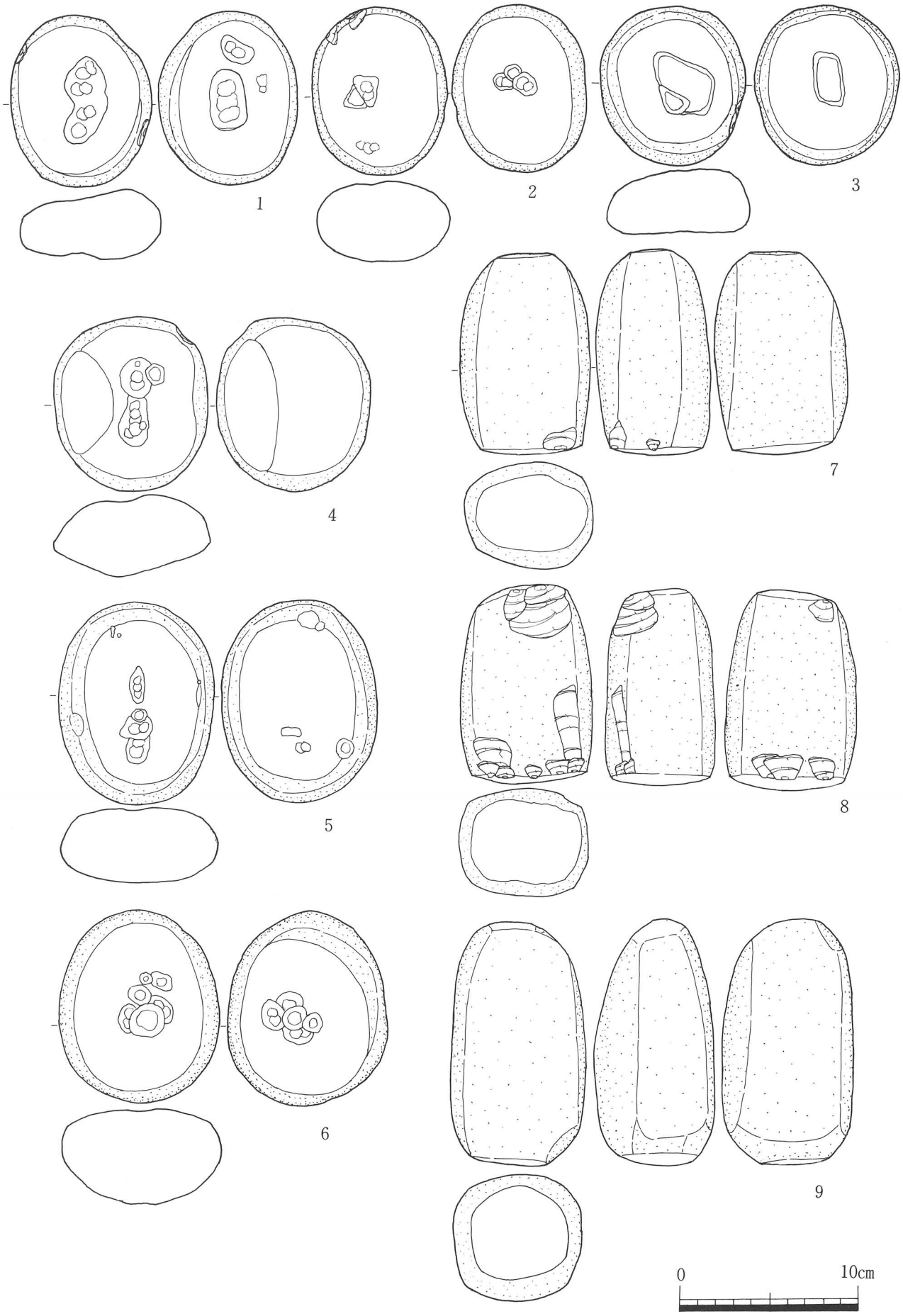
第13図　遺物実測図　6．穴13　その他、包含層

第14図　遺物実測図　1～18．包含層

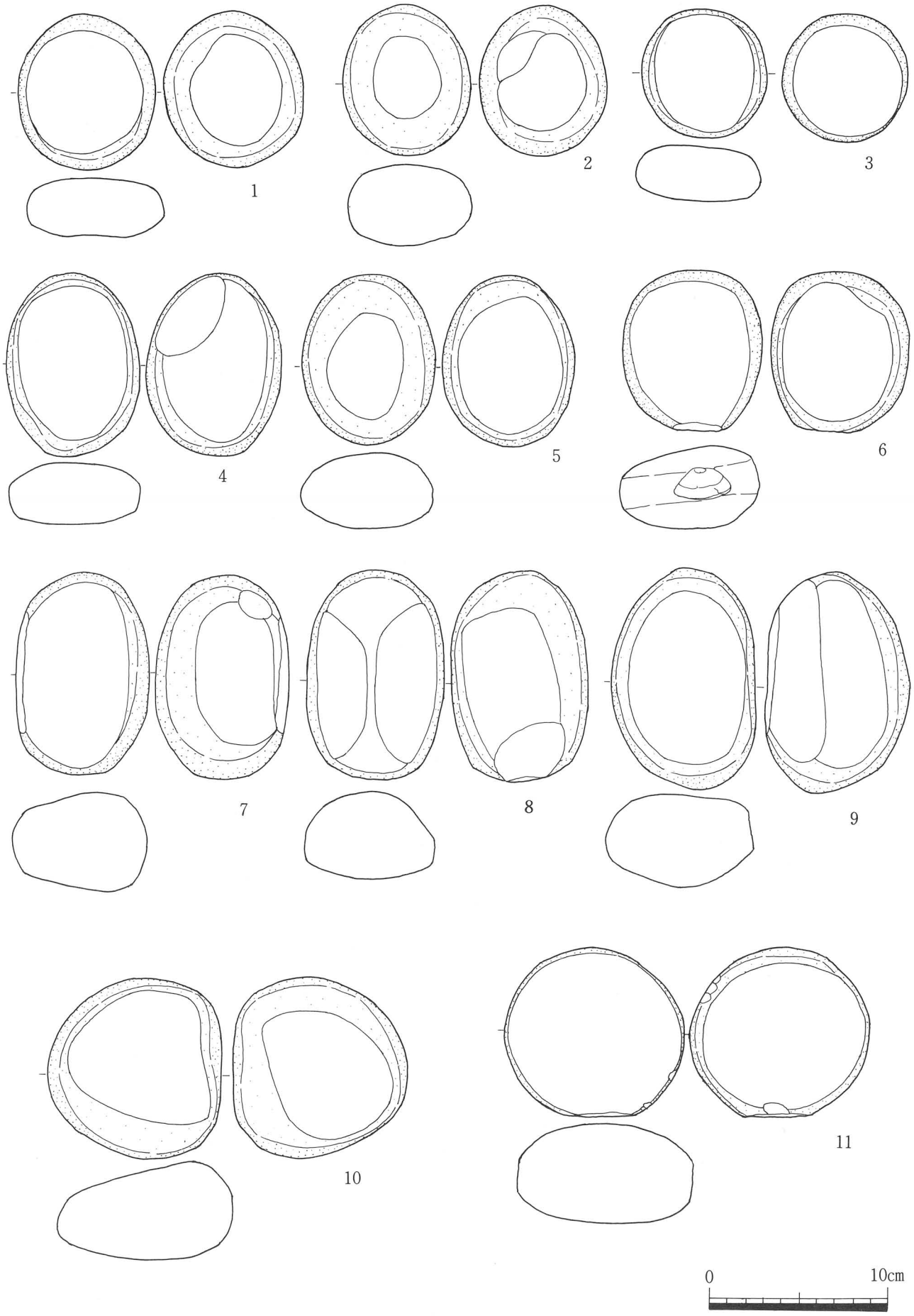
第15図　遺物実測図　5．穴54　その他、包含層



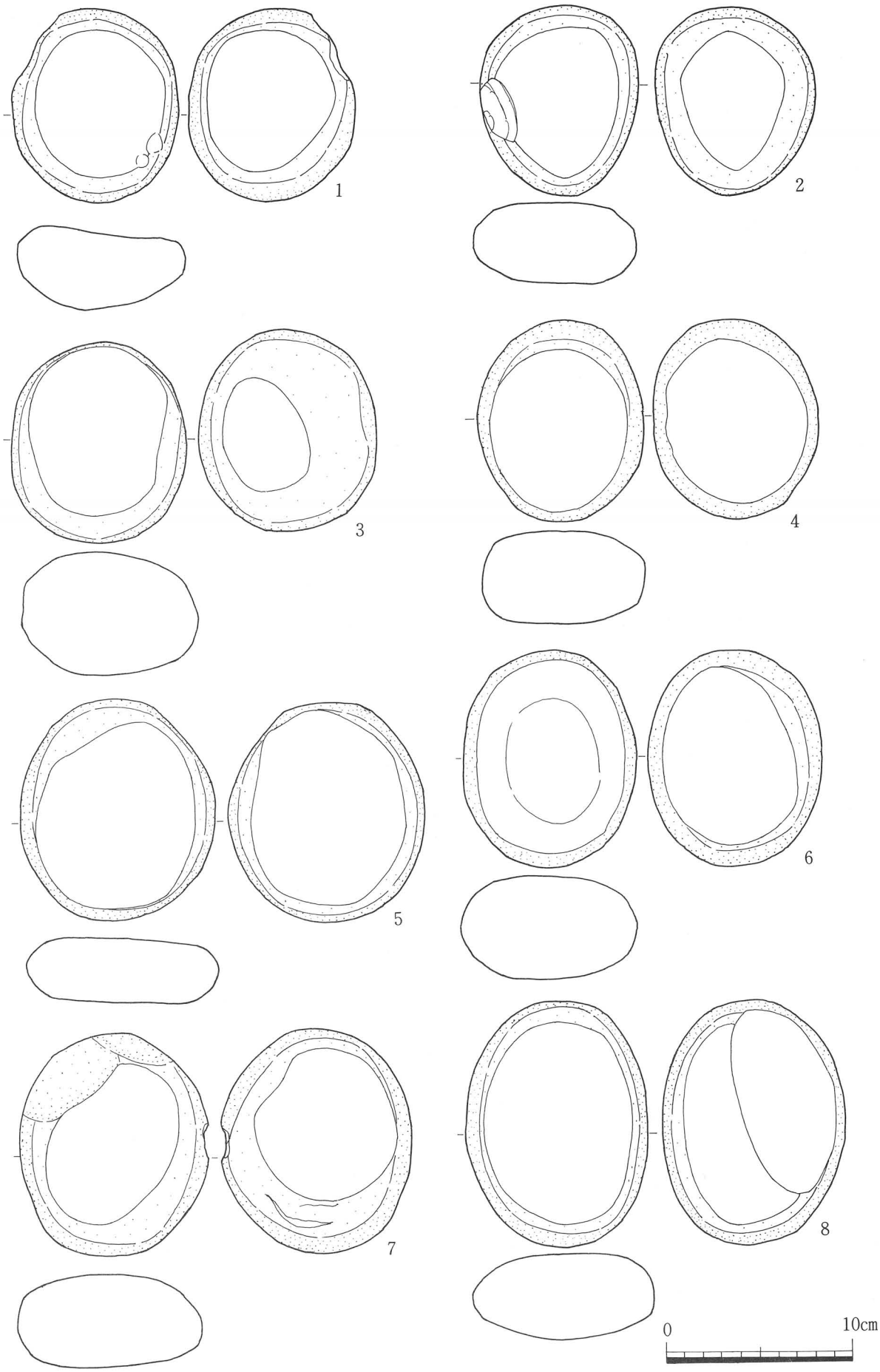
第16図　遺物実測図　9．第1号住居跡　その他、包含層



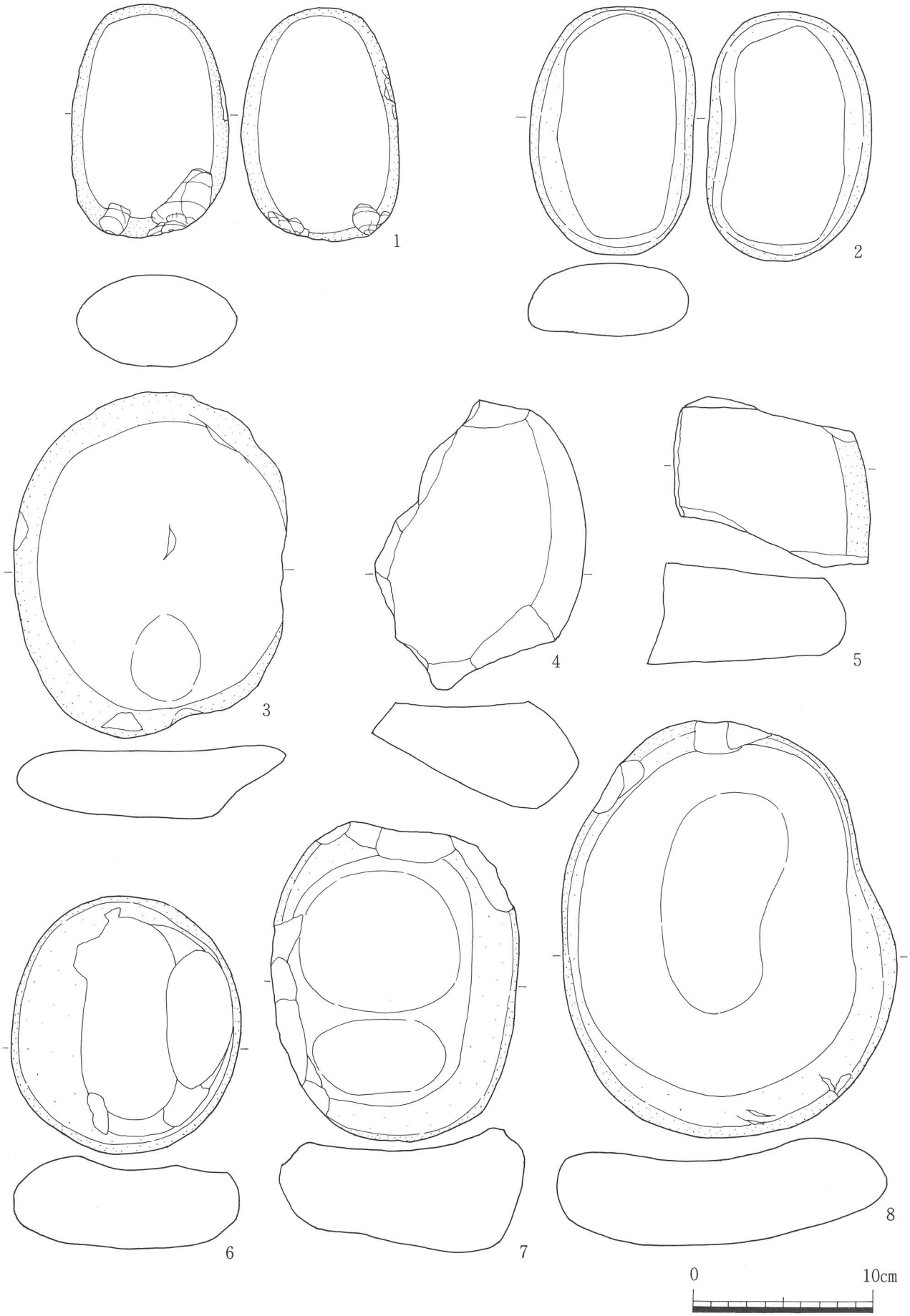
第17図　遺物実測図　1～9．包含層



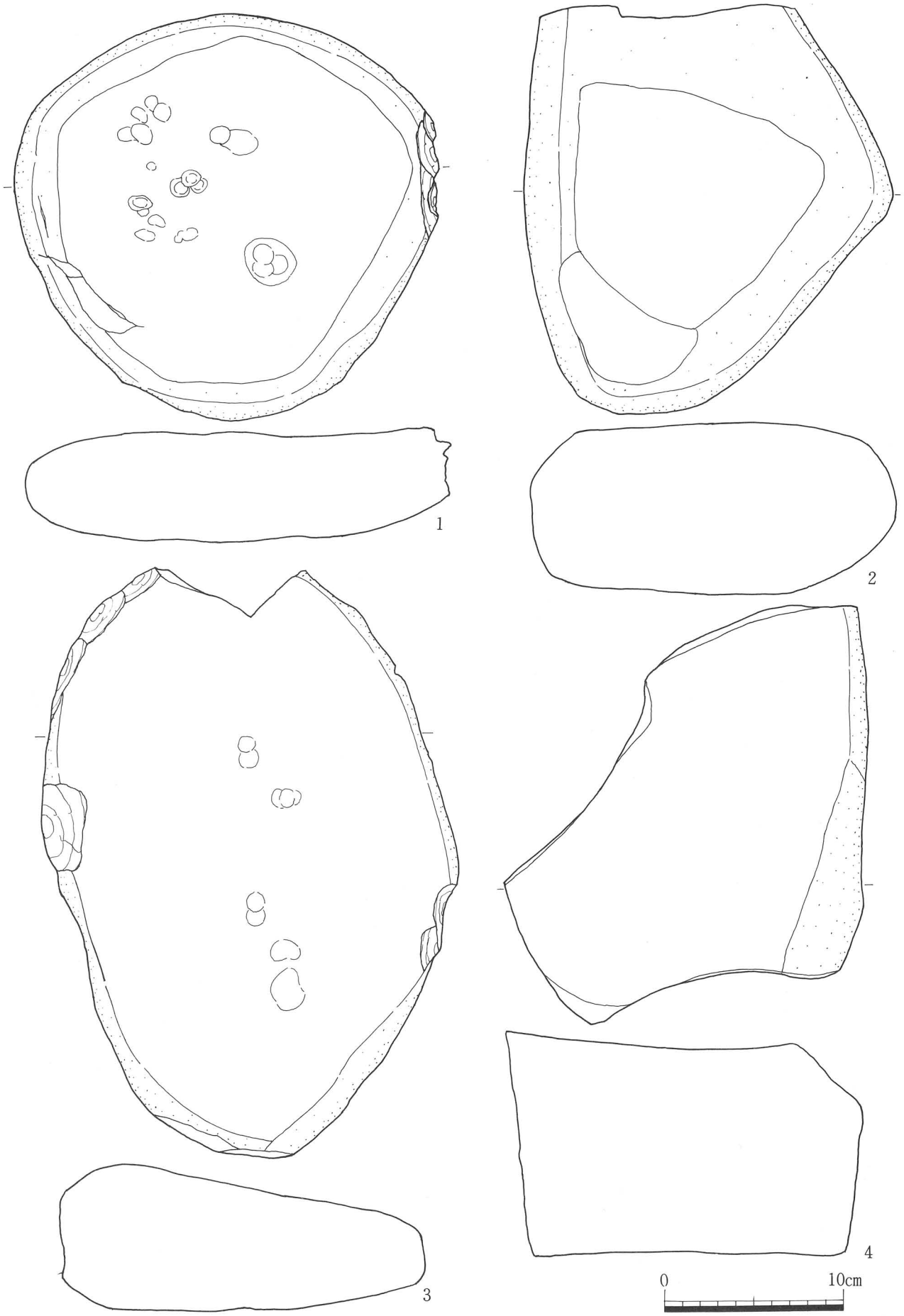
第18図　遺物実測図　1～11．包含層



第19図　遺物実測図　5．第2号住居跡　3．穴72　その他、包含層



第20図　遺物実測図　1．穴33　5．穴13　その他、包含層



第21図　遺物実測図　1．穴33　3．第2号住居跡　2．4．包含層

Ⅳ 調査成果

昭和44年に始まった吉峰遺跡の発掘調査は、７次にわたって行われ、平成元年度をもって終了した。

この調査では、総面積11.200㎡を発掘し、24棟の住居跡、500個近い穴、大量の縄文土器・石器など、縄文時代を中心とする膨大な資料が得られた。特に、前期の拠点集落がほぼ完全に発掘されたことは、全国的にも例が少なく、この調査における最大の成果であったといえよう。

ここでは、１～７次の調査で得られた成果について述べてみたい。なお、遺構番号は、第22図による。

縄文時代前期の集落構造について

(1) 時期区分と遺構（第22図）

出土した遺物は、旧石器時代から平安時代におよぶものだが、主体を占めるのは、縄文時代早期後葉から後期後葉にかけてのもので、時期によって量的変動が大きい。時期の判明した遺構も、縄文時代早期後葉から後期後葉にかけてのもので、竪穴住居跡の検出された時期は、さらに限られる。

遺物と発掘時の所見等から、吉峰遺跡の時期区分は以下のとおりになる。

〈吉峰Ⅰ期〉

早期後葉、神明原Ａ式期。穴４個が検出されており、その内の１個（穴799）は貯蔵穴と考えられる。また、第２次調査で早期の炉が検出されている。吉峰集落の開始期にあたる。

〈吉峰Ⅱ期〉

前期前葉、極楽寺式期。遺物は、Ⅰ期と同じかそれ以上の量が出土しているが、明確にこの時期に属する遺構は検出されていない。

〈吉峰Ⅲ期〉

前期中葉前半、朝日Ｃ式から福浦下層式にかけての時期で、後者の時期が中心である。住居跡10棟と土坑群からなる。吉峰集落の最初の盛期である。

〈吉峰Ⅳ期〉

前期中葉後半、蜆ヶ森式期。蜆ヶ森Ⅱ式新段階に属する穴２個が検出されているが、遺物量は激減しており、集落の中間廃絶期である。

〈吉峰Ⅴ期〉

前期後葉、福浦上層式から朝日下層式にかけての時期である。住居跡11棟と土坑群からなる。吉峰集落の再開期であり、第２の盛期をむかえる。

〈吉峰Ⅵ期〉

中期初頭、新保式期。住居跡１棟が検出されている。集落の衰退期である。

〈吉峰Ⅶ期〉

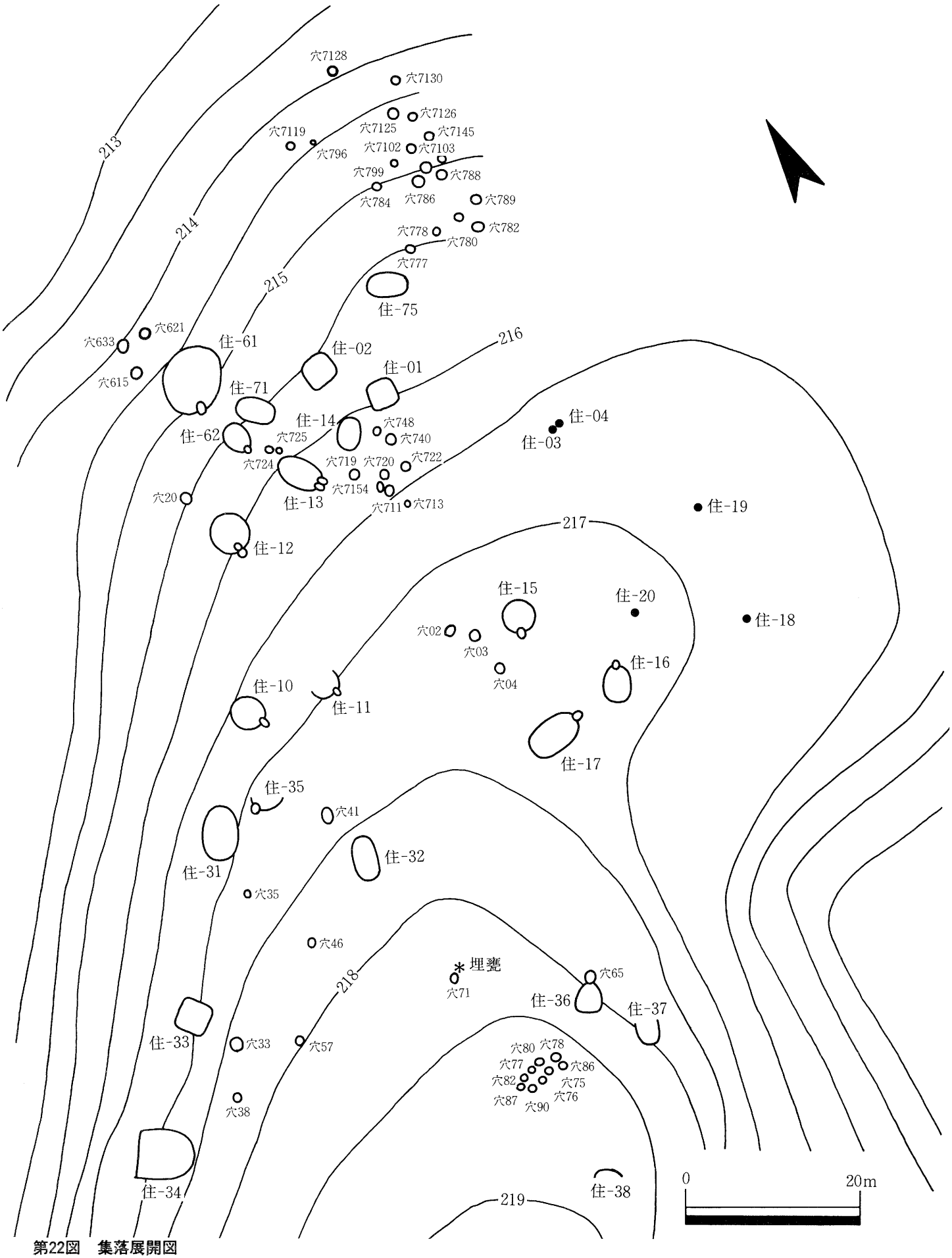
中期前葉から後期中葉までの期間。遺物も散発的にしかみられず、空白期間となる。

〈吉峰Ⅷ期〉

後期中葉末から後葉、井口Ⅰ～Ⅳ式期。土坑群（８個）が検出されている。この内５個は貯蔵穴と考えられ、集落ではないとしても、食料生産に関係した遺跡であろう。

これ以降、吉峰遺跡は確実に廃絶し、散発的に遺物が出土するにすぎなくなる。

このように、吉峰集落の盛期はⅢ・Ⅴ期にある。そして、時期により尾根上の占地状況も集落構造も変化をみせる。また、住居跡の形態も大きく変化する。


213
214
215
216
217
218
219
穴7128
穴7130
穴7126
穴7125
穴7145
穴7119
穴7102
穴7103
穴796
穴799
穴788
穴784
穴786
穴789
穴778
穴782
穴780
穴777
住-75
穴633
穴621
住-61
住-02
住-01
穴615
住-71
住-14
穴748
住-04
住-03
住-62
穴725
穴740
穴724
穴719
穴720
穴722
穴7154
住-13
穴711
穴713
穴20
住-19
住-12
住-15
住-20
住-18
穴02
穴03
穴04
住-16
住-10
住-11
住-17
住-35
穴41
住-32
住-31
穴35
穴46
埋甕
穴71
穴65
住-36
住-37
住-33
穴33
穴57
穴80
穴78
穴77
穴86
穴82
穴75
穴87
穴76
穴90
穴38
住-34
住-38
0
20m

第22図　集落展開図

(2) 住居跡の変遷（第４・５・23～33図、表２・３）

第４次調査までに検出された住居跡については、概報で述べられているが、第７次調査までにさらに６棟が検出されており、これらを含めて再度の検討を行う。

吉峰遺跡の住居跡の分類においては、掘方平面形、主柱配列、炉のあり方などと共に、穴（貯蔵穴と考えられるもの）のあり方が重要な意味をもつ。ここでは、これらの諸要素に、出土遺物から得られた時期区分を加え、住居跡の類型化を行い、その後変遷について考えてみたい。

○A類（第23図、28図上）

台形状の掘方平面形をもつもので[註13]、吉峰Ⅲ期に住―01・02、吉峰Ⅴ期に住―33の計３棟がある。住―01・02は、主柱穴・炉ともに検出されておらず、住―33は、８本主柱Y型で地床炉をもつ。

○B類（第24図、26図上、28図下、29図上、32図）

円形の掘方をもつもので、計６棟があり、全て吉峰Ⅲ期に属する。炉は地床炉で、南側に張り出しピット（貯蔵穴と考えられる）をもつ点も共通している。主柱配列は、XY型（住―15・62）とX型（住―10・12）の２種がある。特殊な住居内設備としては、住―15にテラスがみられる。また、住―35・62の張り出しピットは袋状を呈している。

○C類（第４・５・25図、26図下、27図、29図下右、30・33図）

楕円形の掘方をもつもので、張り出しピットの有無により細分できる。

C１類は、張り出しピットをもつもので、吉峰Ⅲ期に住―13・62、吉峰Ⅴ期に住―16・17の計４棟がある。主柱配列は、Ⅲ期がXY型、Ⅴ期がX型である。炉は全て地床炉だが、Ⅴ期の２棟は２基の炉をもつ。なお、出土遺物から、住―17の時期は前期後葉末と考えられており、炉を２基もつのは新しい様相といえよう。[註14]

C２類は、張り出しピットをもたないもので、計７棟があり、全て吉峰Ⅴ期に属する。主柱配列は、X型（住―25・75）とY型（住―31・32・71）の２種がある。炉は全て地床炉で、住―31は２個の炉をもつ。

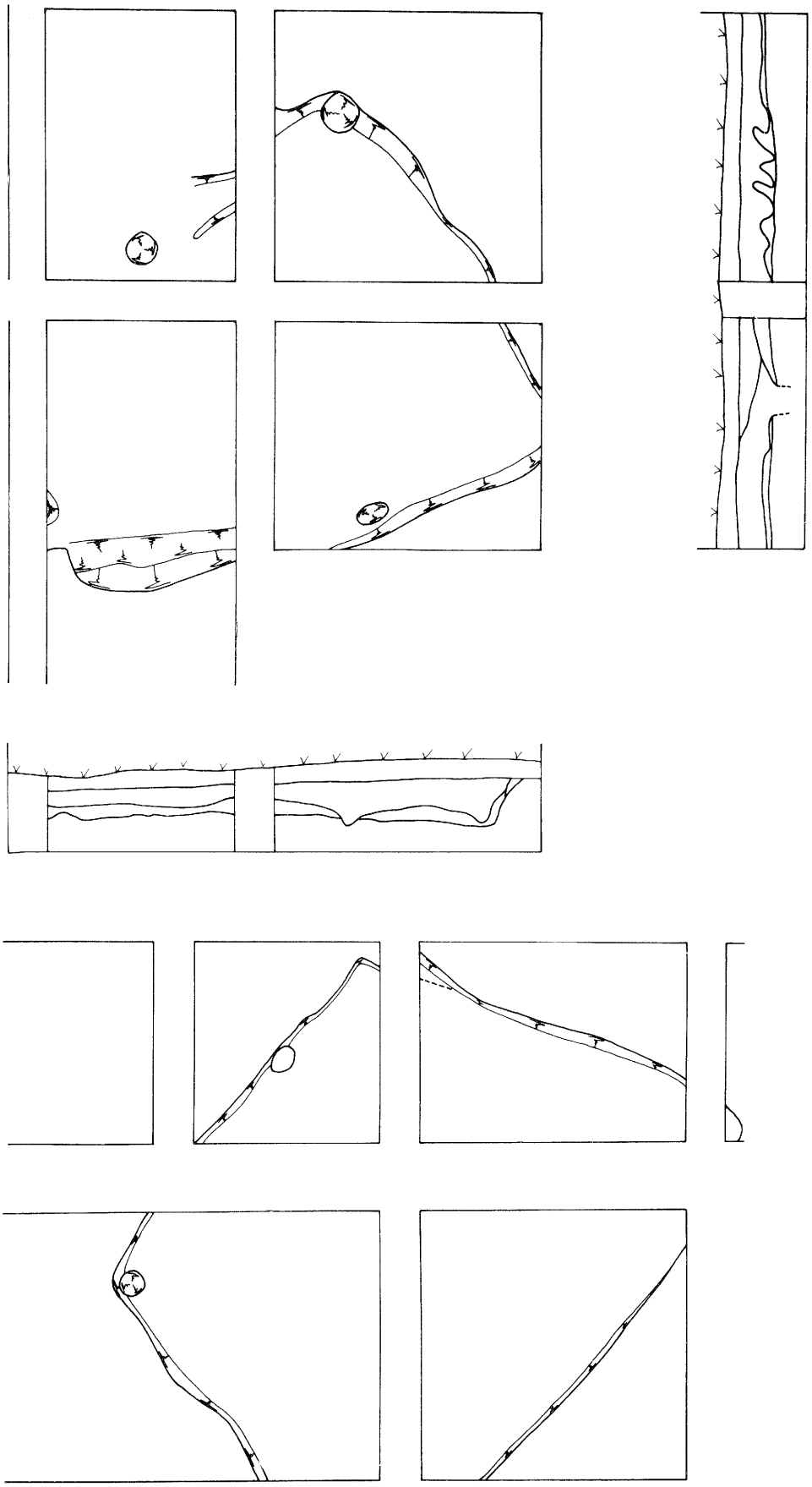
○D類（第29図下左、31図）

馬蹄形の掘方をもつもので、貯蔵穴のあり方により細分できる。

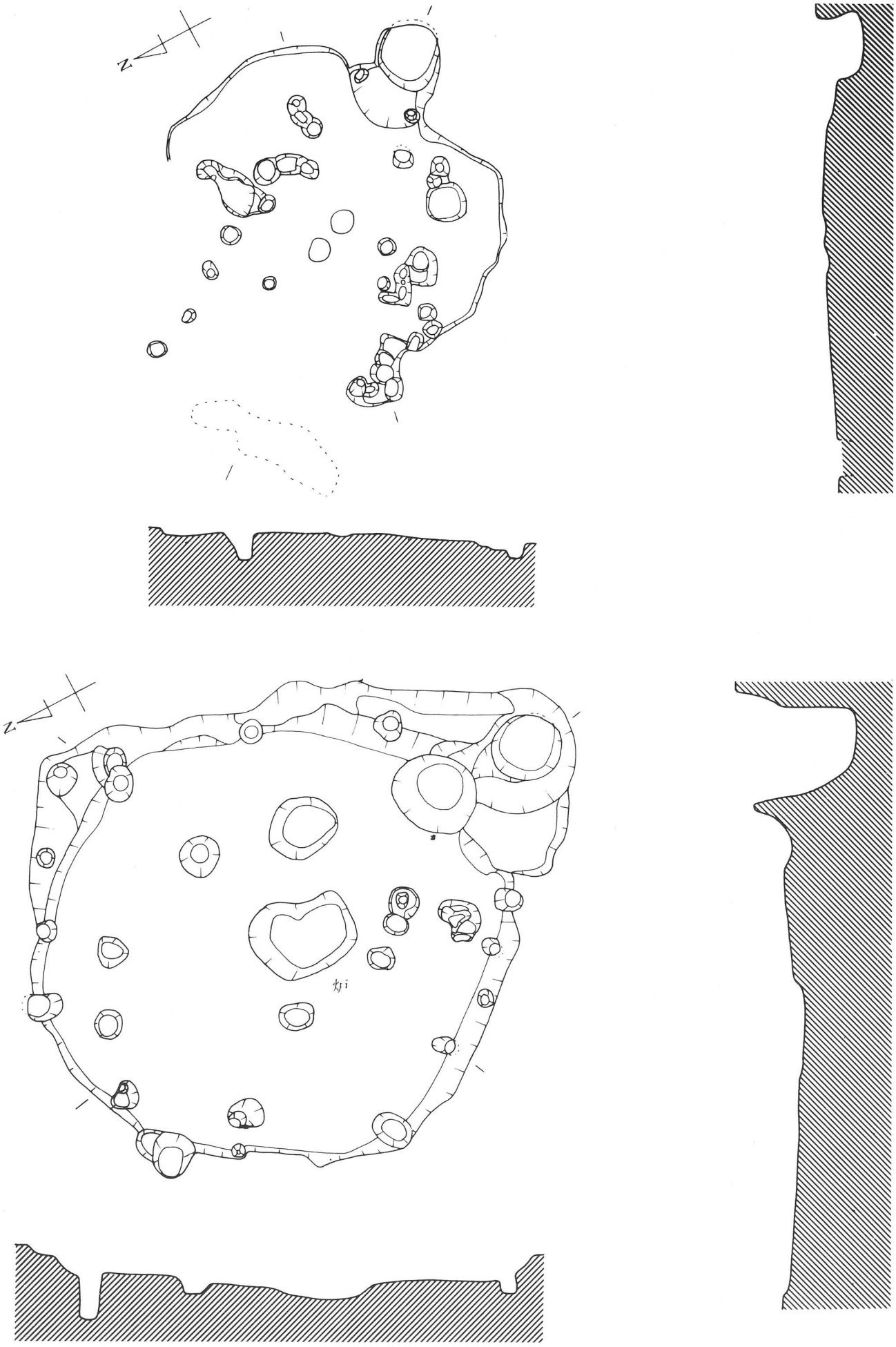
D１類は、貯蔵穴を住居近くに配するもので、吉峰Ⅴ期の住―36がある。主柱配列は６本主柱X型で、地床炉をもつ。貯蔵穴は袋状ピットで、住居に接してはいるが、張り出しピットではない。

時期区分	住居分類	掘方平面形	住居番号	主柱本数	主柱配列	炉の種類と数	貯蔵穴の種類	その他の施設
吉峰Ⅲ期（前期中葉）	A類	方　形	01、02	不　明	不　明	不明		
	B類	円　形	10、12	6	X　型	地床炉１基	張り出しピット	
			15、61	5、7、9	XY型	地床炉１基	張り出しピット	15はテラス有
			11、35	不　明	不　明	不明		
	C１類	楕円形	13、62	5、9	XY型	地床炉１基	張り出しピット	
吉峰Ⅴ期（前期後葉）	A類	方　形	33	8	Y　型	地床炉１基	住居近辺に配置	
	C１類	楕円形	16、17	6	X　型	地床炉２基	張り出しピット	
	C２類	楕円形	14、75	6	X　型	地床炉１基	14は住居近辺に配置	
			31、32、71	6、8	Y　型	31は地床炉２基 他は地床炉１基	31、32は住居近辺に配置	
			37、38	不　明	不　明	不明		
	D１類	馬蹄形	36	6	X　型	地床炉１基	住居に接して配置	
吉峰Ⅵ期（中期初頭）	D２類	馬蹄形	34	6	X　型	地床炉１基	住居内に配置	テラス有

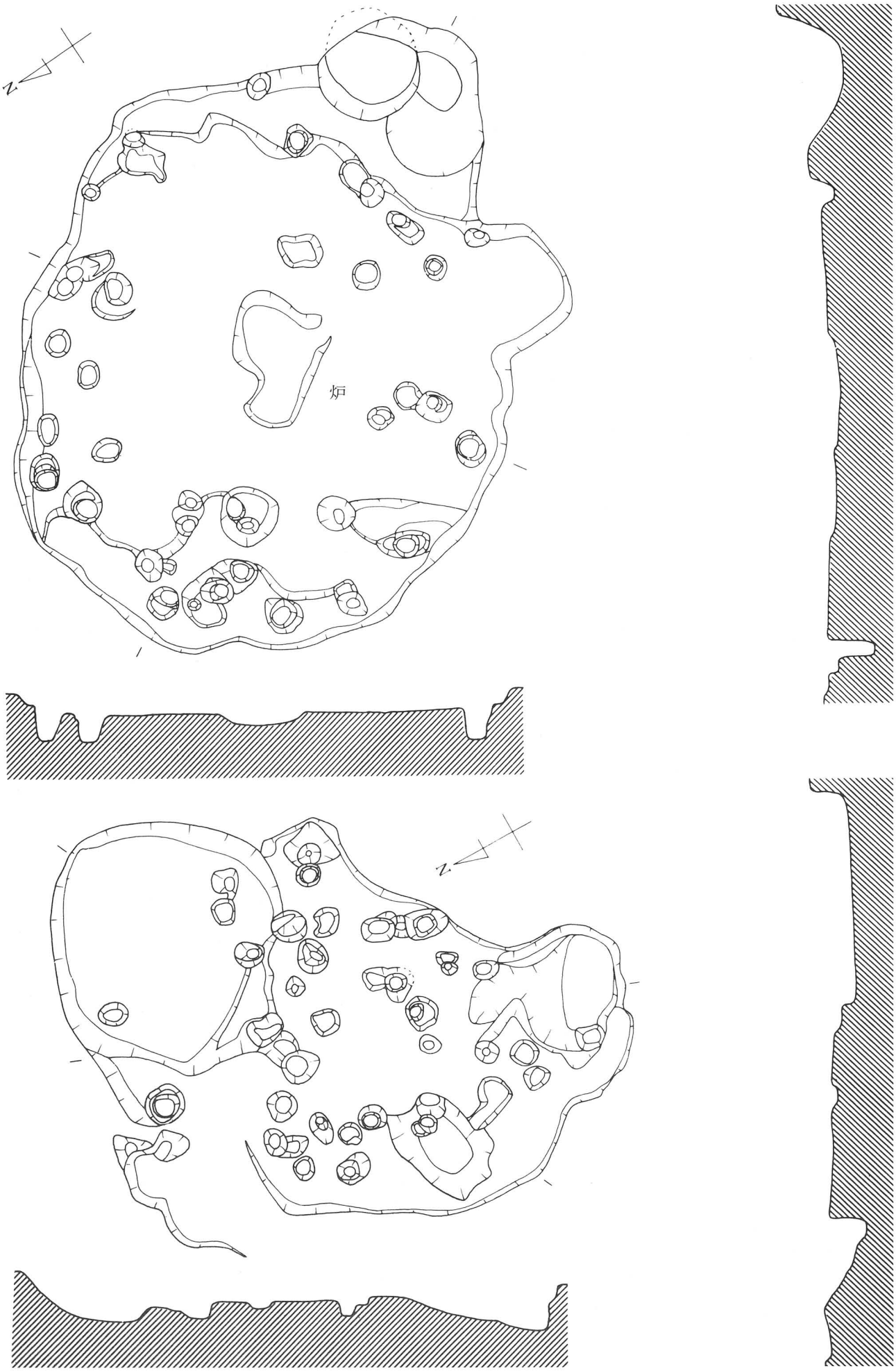
表２　住居跡の分類と時期区分



第23図　上.第1号住居跡　下.第2号住居跡(S=1/50)（「富山県立山町吉峰遺跡発掘調査報告書」1970より転載）

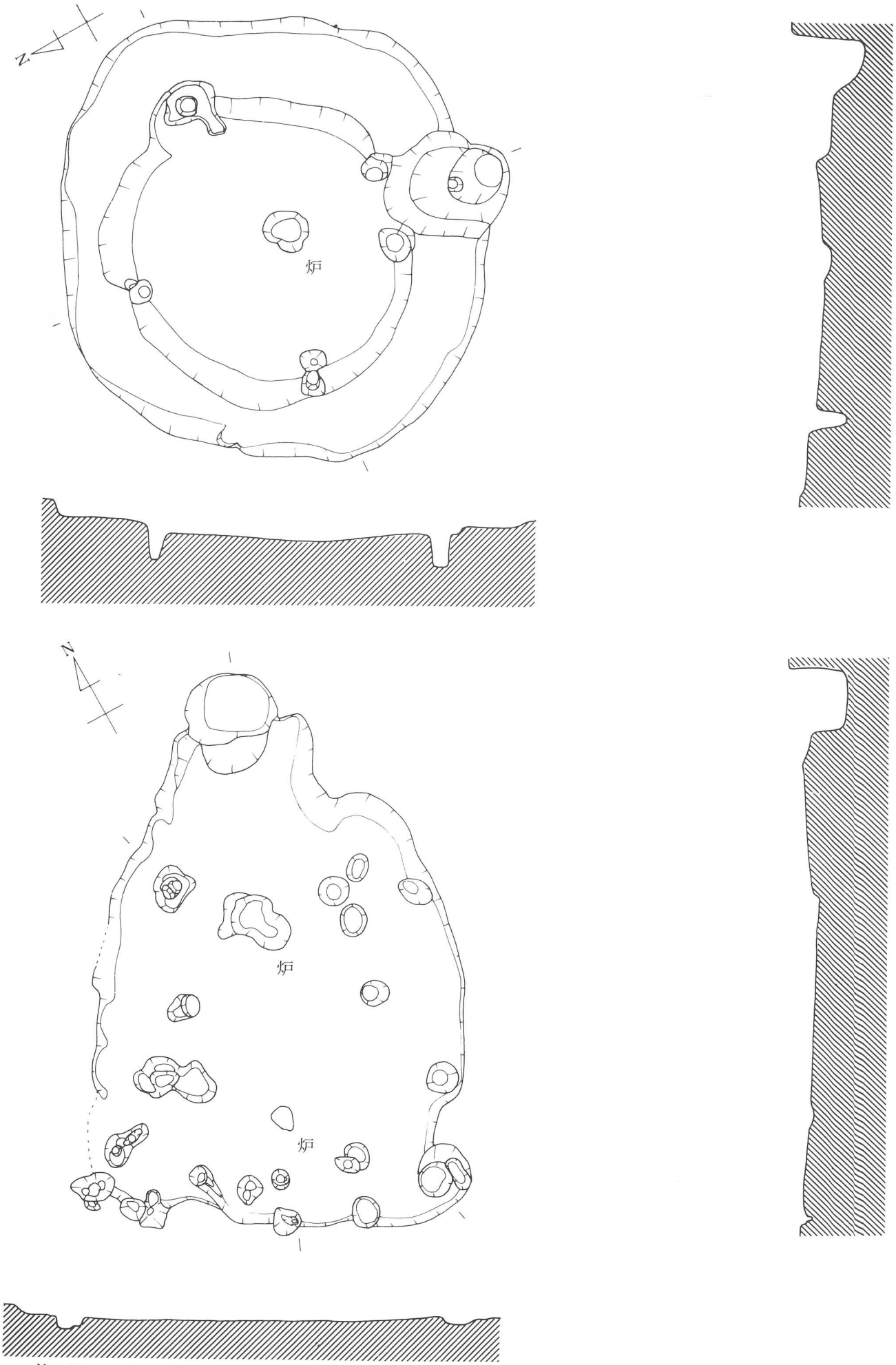


第24図　上.第11号住居跡　下.第12号住居跡（S=1/50）（「富山県立山町吉峰遺跡第４次発掘調査概報」1975より転載）

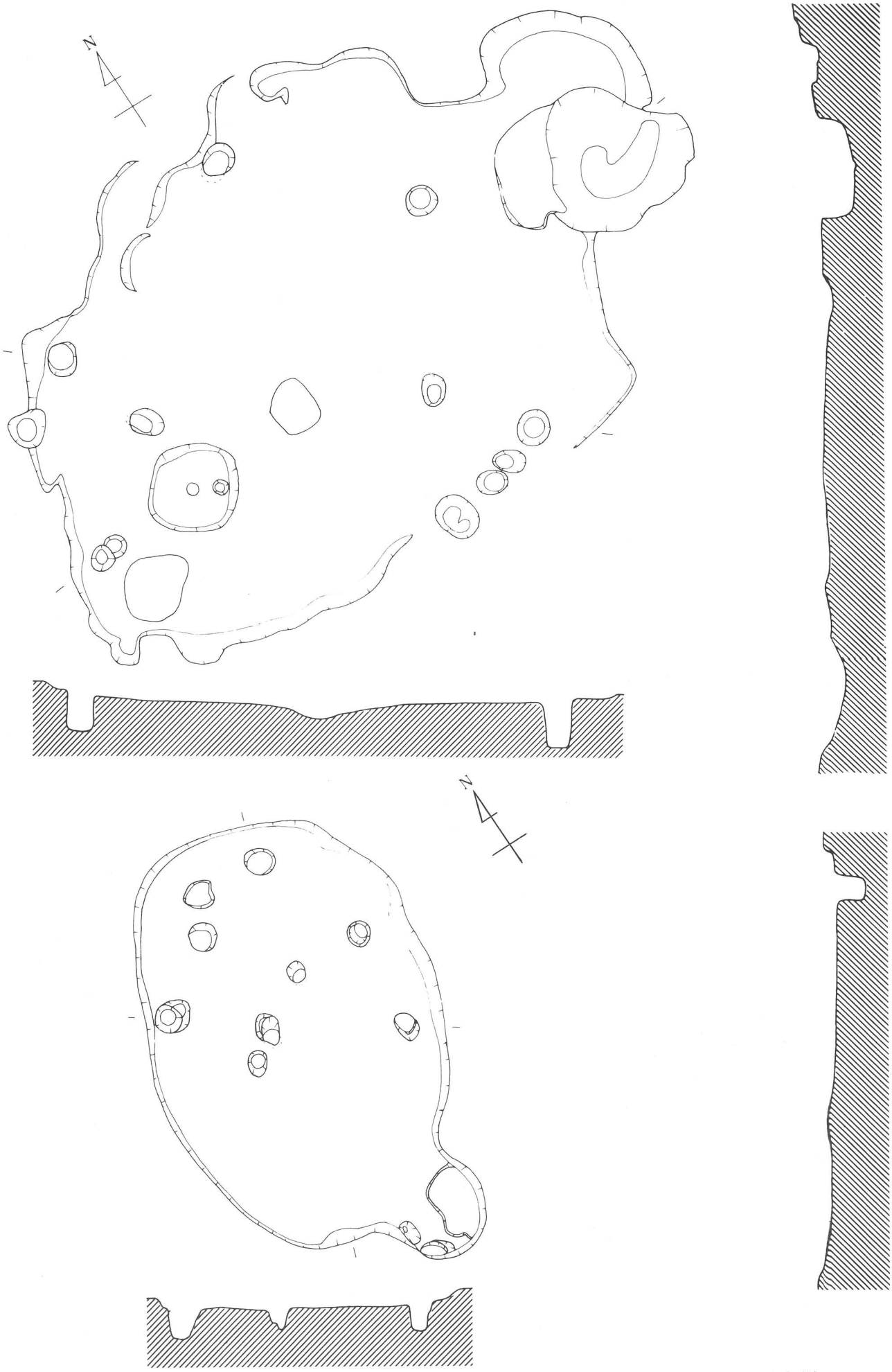


第25図　上.第13号住居跡　下.第14号住居跡(S=1/50)

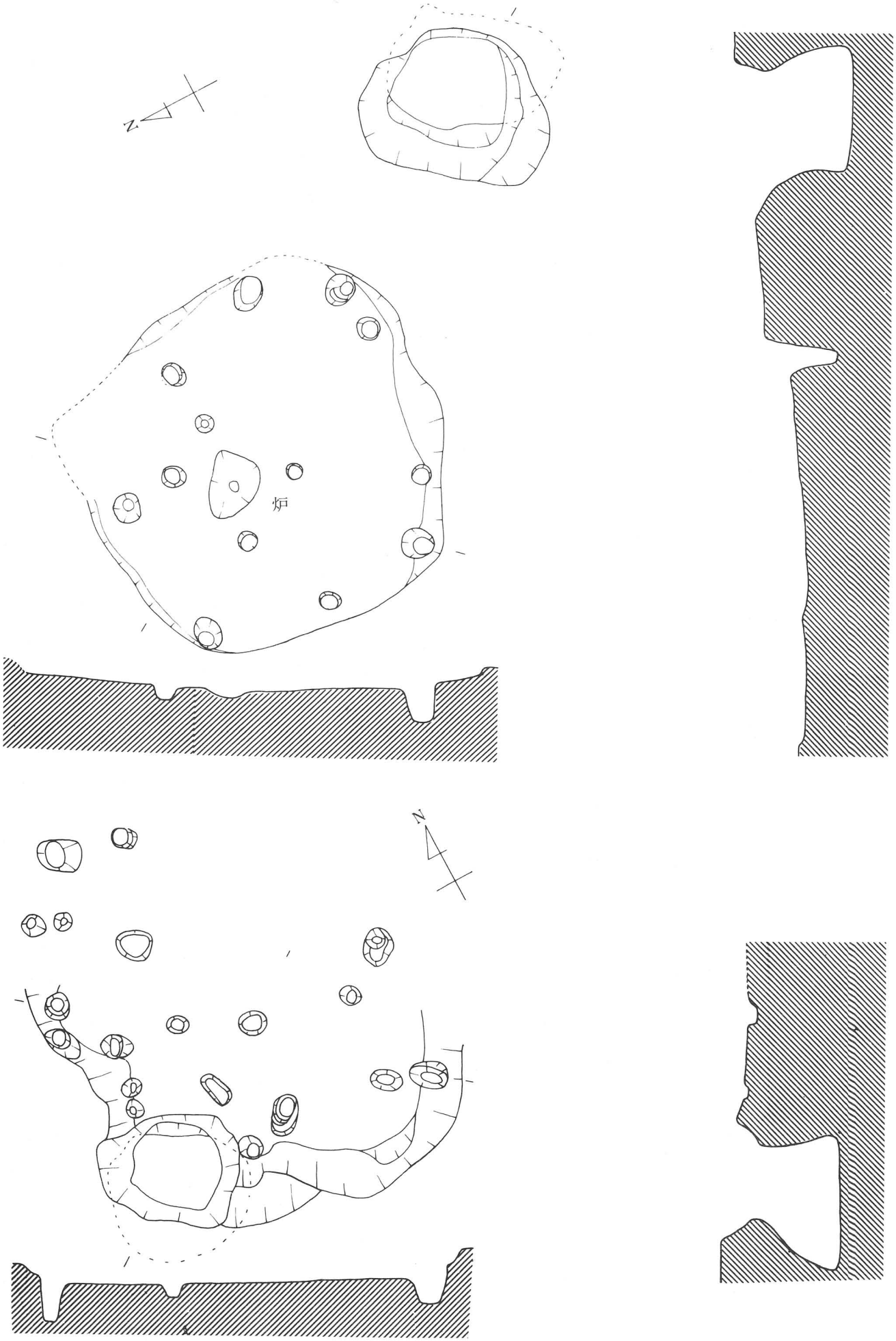
(「富山県立山町吉峰遺跡第4次発掘調査概報」1975より転載)



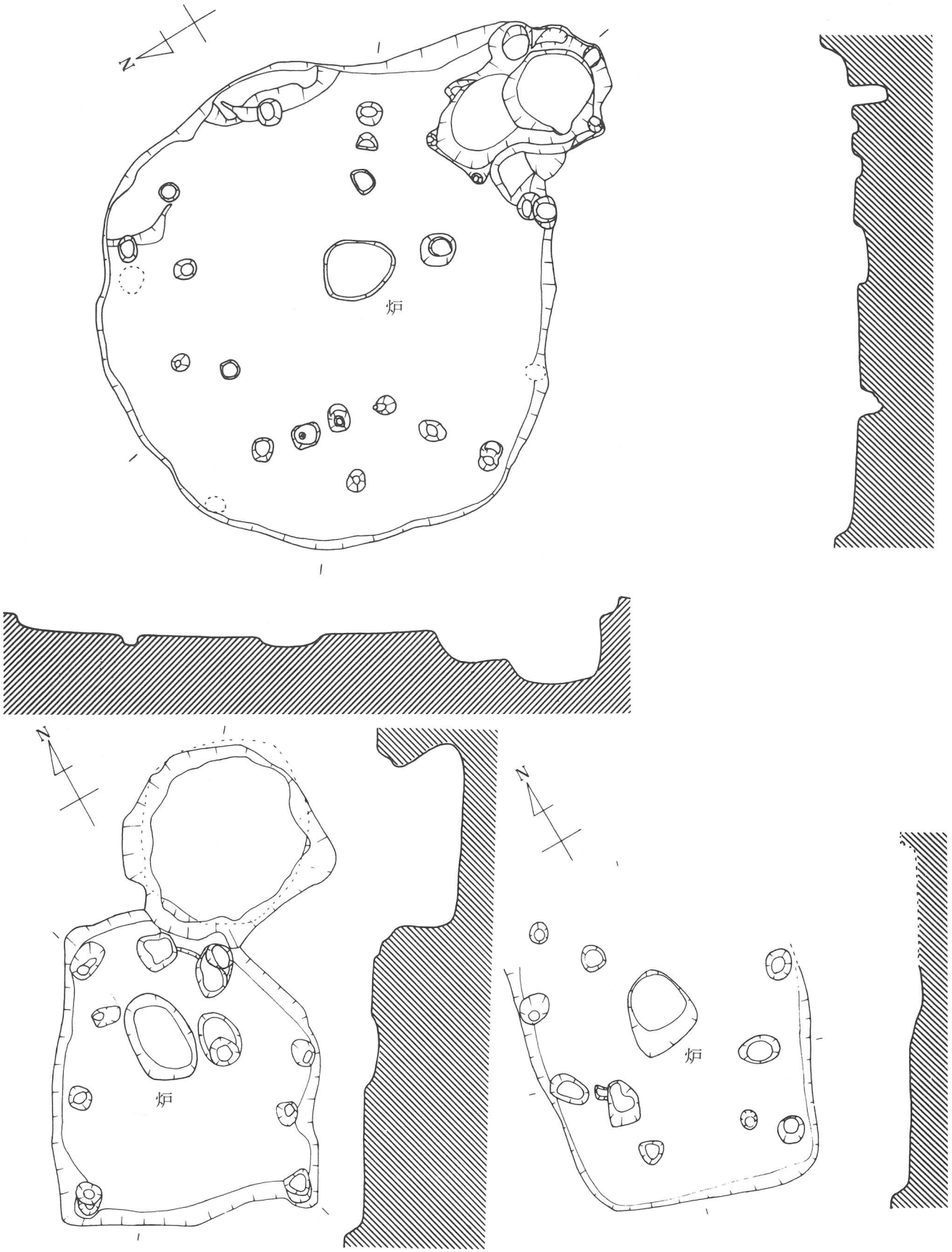
第26図　上.第15号住居跡　下.第16号住居跡(S=1/50)（「富山県立山町吉峰遺跡第4次発掘調査概報」1975より転載）



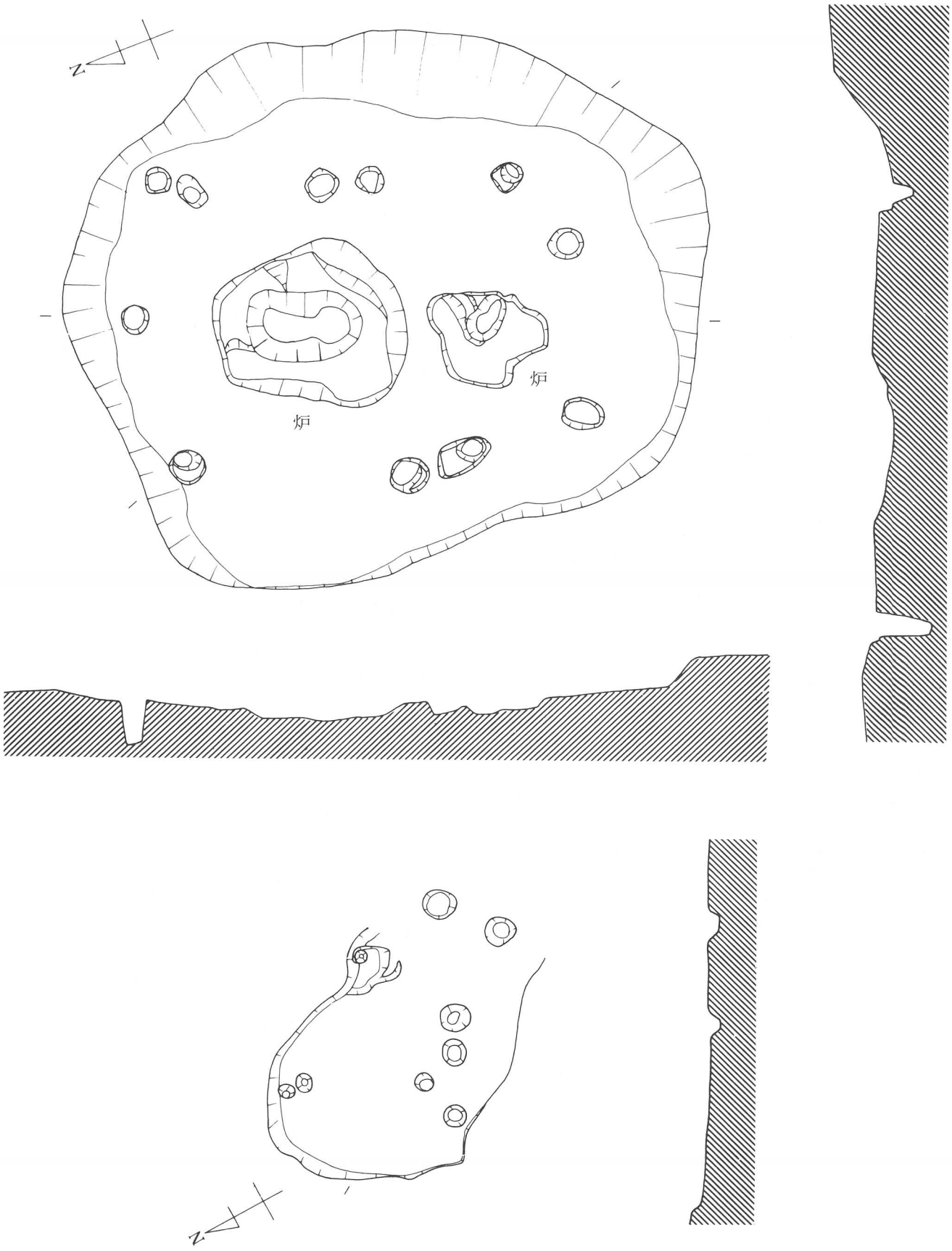
第27図　上.第17号住居跡　下.第32号住居跡(S=1/50)（「富山県立山町吉峰遺跡第４次発掘調査概報」1975より転載）



第28図　上.第33号住居跡　下.第35号住居跡(S=1/50)（「富山県立山町吉峰遺跡第４次発掘調査概報」1975より転載）



第29図　上.第10号住居跡　下左.第36号住居跡　下右.第37号住居跡(S=1/50)
(「富山県立山町吉峰遺跡第4次発掘調査概報」1975より転載)



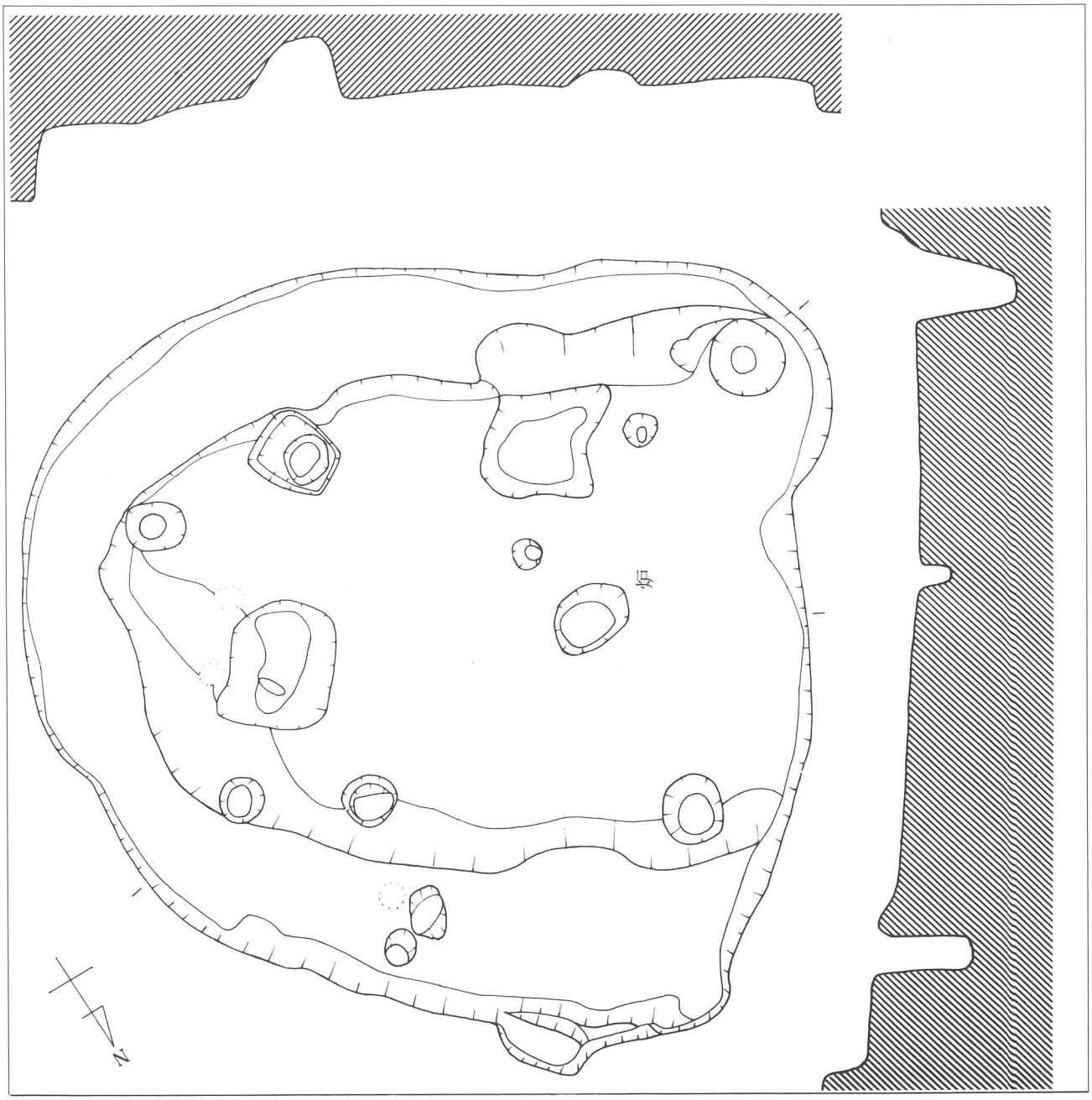
第30図　上.第31号住居跡　下.第38号住居跡　（「富山県立山町吉峰遺跡第４次緊急発掘調査概報」1975より転載）

Ｄ２類は、貯蔵穴を住居内に配するもので、吉峰Ⅵ期の住―34がある。主柱配列は６本主柱X型で、炉は地床炉である。直線状の一辺を除き、馬蹄形にテラスをめぐらせている。

以上の分類をまとめたのが表２であり、以下のとおりの傾向がみられる。

掘方平面形は、Ⅲ期には円形が、Ⅴ期には楕円形が、Ⅵ期に馬蹄形が中心となる。また、各期に主体を占める形が前の時期に出現しており、連続性がみられる。台形（方形）の住居は、早期以来の系統を継ぐものと考えられるが、このような住居が前期後葉まで混在している点は興味深い。馬蹄形住居は、Ⅴ期に出現しⅥ期まで続いているが、吉峰遺跡のみの特殊な状況かどうか、他遺跡との比較検討が必要である。

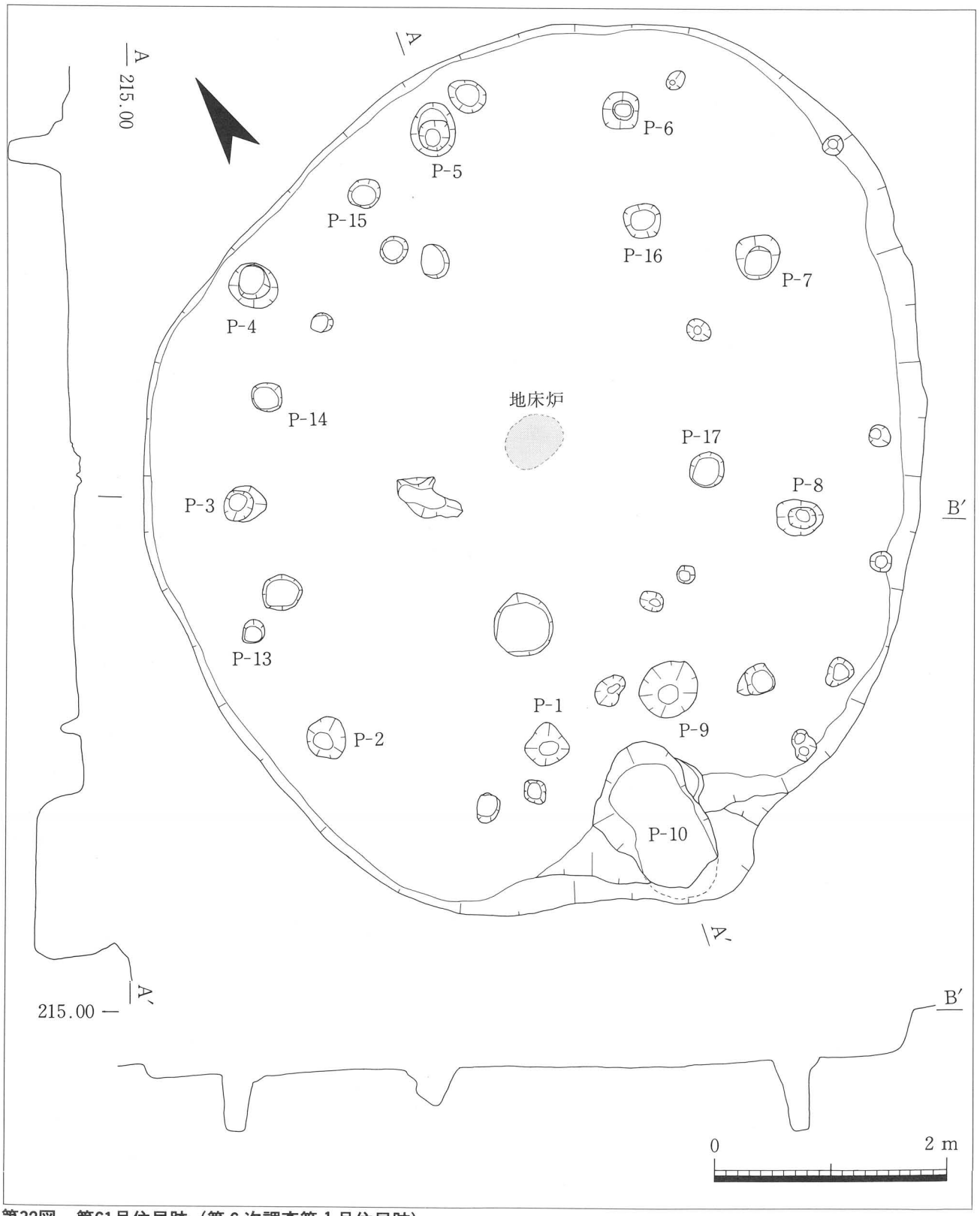
主柱配列は、Ⅲ期がXY型・X型であるのに対して、Ⅴ期ではX型・Y型となり、Ⅵ期ではX型となっている。言いかえれば、縄文時代前期中葉から中期初頭にかけて、主柱配列がXY型・X型からX型・Y型へと変化し、さらにX型へと移ったことになる。これは、第４次調査概報において報告された成果と一致する。



第31図　第34号住居跡
（「富山県立山町吉峰遺跡第４次緊急発掘調査概報」1975より転載）

なお、Ⅲ期には主柱配列が二重の環状をなすものがあるが、住―11は９本主柱XY型の二重構造、住―12は６本主柱X型の二重構造、住―61は７本主柱XY型と９本主柱XY型の二重構造で、いずれも同じ主柱配列での二重構造となっており、これは住居拡張によるものと考えられる。

貯蔵穴は、大筋としては、Ⅲ期には張り出しピットであり、Ⅴ期には袋状ピットが住居付近に設置され、Ⅵ期には住居内に設置する。しかし、Ⅴ期でも住―16・17には張り出しピットが付され、古い様相を残している。一方、Ⅲ期



第32図　第61号住居跡（第６次調査第１号住居跡）

においても住—61の付近には袋状ピット（穴615・633）が設置されるなど、先駆的様相を示すものもある。これは、変化が漸移的であったことを示しているといえよう。

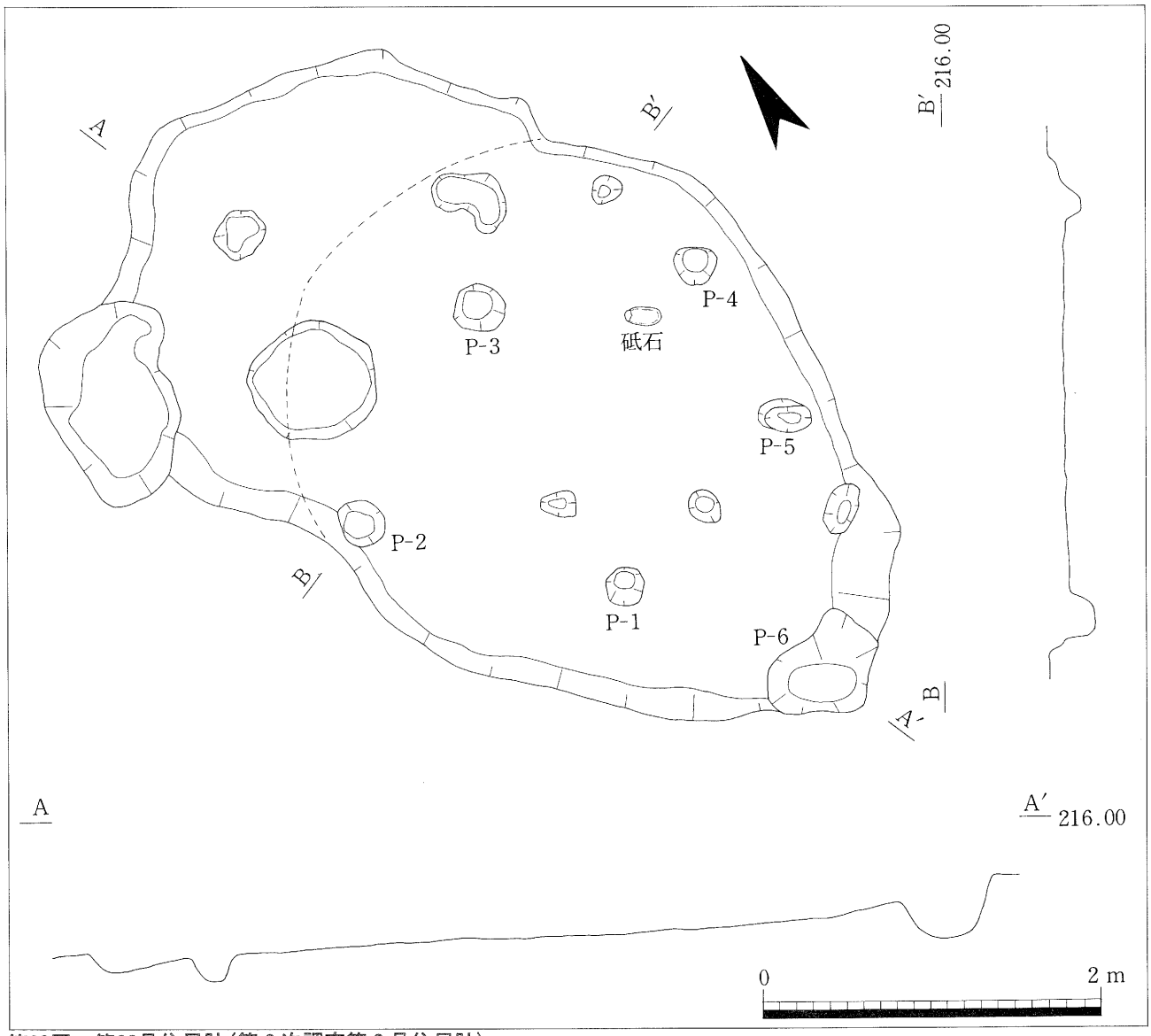
炉は、吉峰では一貫して地床炉が用いられている。ただし、Ⅴ期の住—16・17・31には２基の地床炉がみられ、これは中期前葉に出現する複設式石組炉との関係において重要な存在である。[註15]

(3) 集落構造とその推移（第34・35図）

〈Ⅲ期集落〉（第34図）

集落は、A類・B類・C１類の住居跡10棟で構成される。その構造は、中央に住居跡(住—15)を置く半径約20mの広場を中心として、半径約40mまでの範囲に住居跡群が環状に並び、その環に外接して大型住居跡（住—61）を置くというものである。また、環状に並ぶ住居跡群は、その占地状態から、北・中・南の３小グループに分かれると考えられる。なお、住—15の様に中心広場に存在する住居を、ここでは便宜的に中核住居と呼ぶことにする。

第４次調査の報告書においては、前期中葉（Ⅲ期）の集落構造について、住—15を環に含めた馬蹄形構造が考えられているが、これは次の理由により否定したい。まず、住—15は他の住居から20m以上離れて単独で存在しており、他の住居跡がいずれも２～３棟の小グループを形成しているのとは対照的であり、唯一テラスをもつ特殊な形態であることと考えあわせると、他の住居跡と共に環状を形成しているとは考えにくいのである。また、住—15は尾根上で



第33図　第62号住居跡（第６次調査第２号住居跡）

最も平坦な所のほぼ中央に占地しており、地形上からも、この範囲を広場とするほうが妥当性が高いと考えられるのである。さらに、抉状耳飾りを検出した穴04・穴713の存在、時期不明とされる住—03・04・18・19の配置も考慮にいれると、この範囲が広場となる可能性はいっそう高くなるといえよう。

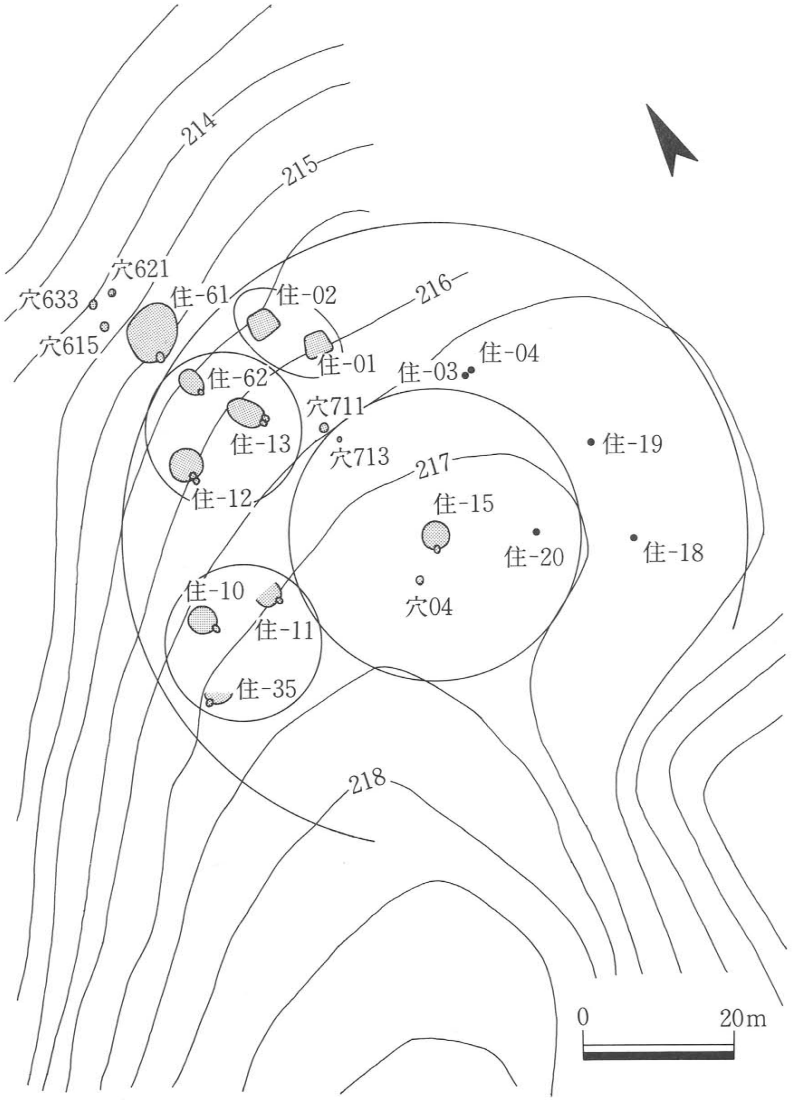
さて、Ⅲ期集落を構成する住居跡群は、その主軸方向からも、a群（住—01・15・61)、b群（住—02・10・12・62)、c群（住—11・13)、d群（住—35）の4群に分けられる。そして、この主軸方向の相違を時間的相違とみるならば、a～d小群に対応する各小期（a～d小期）の集落構造は次の様になる。

a小期は、Ⅲ期集落の開始期であり、A類住居1棟（住—01）とB類住居2棟（住—15・61）で構成される。住居は直線的に並んでいるが、中心広場はすでに意識されているものと考えられる。なお、住—61については、7本主柱（拡張前）の時期で、一般的な住居であったと考えられる。

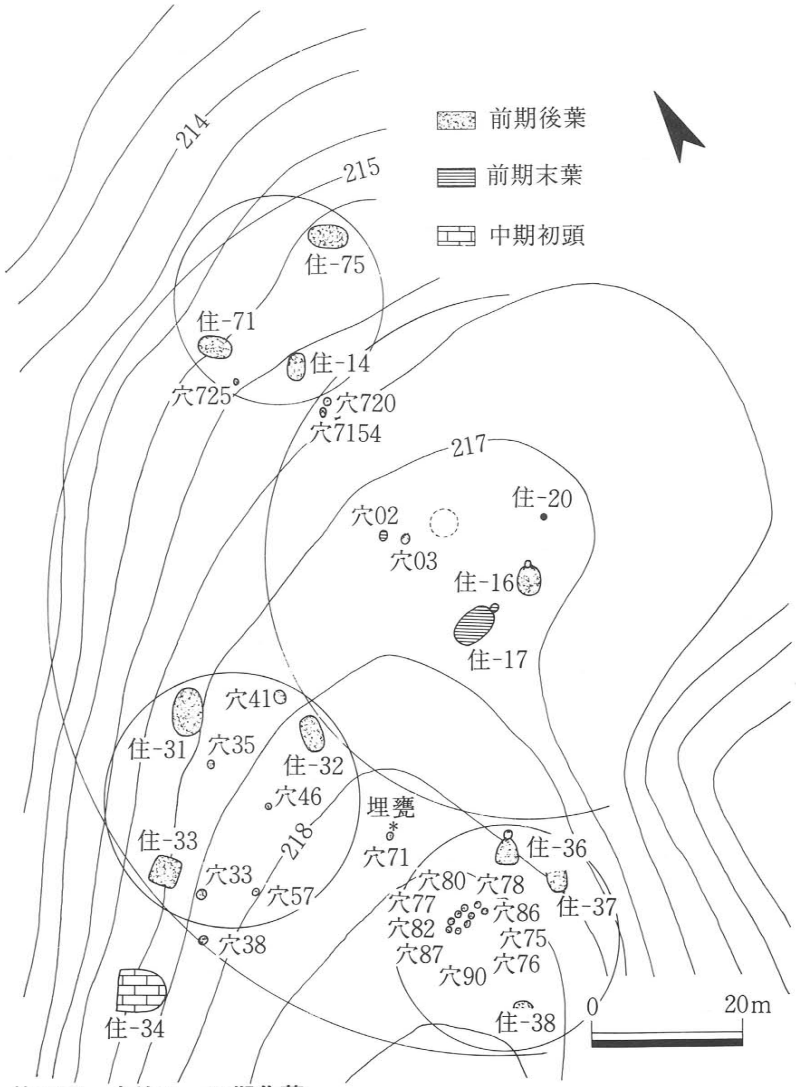
b小期は、A類住居1棟（住—02)、B類住居（住—10・12・15・61)、C1類住居（住—62）で構成され、中核住居・環状住居群・大形住居からなる構造が明確となる。環状住居群は、各小グループに対応して存在しており、集落の完成期（最盛期）といえよう。なお、住—61の拡張時期（大型住居化の時期）については、集落の構成員数が最大となる

住居番号	掘方平面形	規模(m)	主柱本数	主柱配列	炉	貯蔵穴の種類・配置	その他の設備	主軸方向
01	台　形	3×3	不明	不　明	不明			N—9°—E
02	台　形	3.5×3.5	不明	不　明	不明			N—14°—E
10	円　形	4×4	6	X　型	地床炉1基	張り出しピット		N—14°—E
11	円形か		不明	不　明	不明	張り出しピット		N—36°—W
12	円　形	4.5×4.5	6→6	X　型	地床炉1基	張り出しピット		N—11°—W
13	楕円形	4.5×5	9→9	XY型	地床炉1基	張り出しピット		N—32°—W
14	楕円形	2×3.5	6	X　型	不明	住居近辺に設置		N—20°—E
15	円　形	4×4	5	XY型	地床炉1基	張り出しピット	テラス有り	N—10°—E
16	楕円形	3.5×4	6	X　型	地床炉2基	張り出しピット		N—23°—E
17	楕円形	4×6	不明	X型か	地床炉2基	張り出しピット		N—83°—E
31	楕円形	4×6	8	Y　型	地床炉2基	住居近辺に設置		N—24°—E
32	楕円形	3×5	6又は8	Y　型	不明	住居近辺に設置		N—15°—E
33	台　形	3.6×3.6	8	Y　型	地床炉1基	住居近辺に設置		N—41°—W
34	馬蹄形	6×6	6	X　型	地床炉1基	住居内にピット設置	テラス有り	N—66°—W
35	円　形	4×4	不明	不　明	不明	張り出しピット		N—61°—E
36	馬蹄形	2.5×3	6	X　型	地床炉1基	住居に接して設置		N—25°—E
37	楕円形	2.5×?	不明	X型か	地床炉1基	住居近辺に設置		N—19°—E
38	楕円形	2×?	不明	不　明	不明	住居近辺に設置		N—21°—W
61	円　形	7×7.5	7→9	XY型	地床炉1基	張り出しピット		N—12°—E
62	楕円形	3×4	5	XY型	地床炉1基	張り出しピット		N—12°—W
71	楕円形	3×4	8	Y　型	地床炉か			N—54°—W
75	楕円形	2.5×4	6	X　型	地床炉1基			N—56°—W

表3　住居跡一覧



第34図　吉峰Ⅲ期集落



第35図　吉峰Ⅴ　Ⅵ期集落

この小期と考えられる。また、住—62の時期及び性格については、主軸方向が若干ずれていること、楕円形の掘方平面形などから、他の住居と比べてやや後出的に感じられ、住—12の建て替えか、住—12の構成員増によって増設されたものと推定する。

c小期には、北の小グループが存在しなくなり、集落規模がやや縮小するが、その他の点についてはb小期と同様であり、基本的構造は保たれていたと考えられる。

d小期になると、住居は南の小グループにしか存在せず、集落は衰退に向う。なお、住—61については、集落の規模構造からみて、存在しなかったものと考えられる。

〈V期集落〉（第35図）

集落は、A類・C1類・C2類・D1類の住居跡11棟で構成される。基本的な構造は、Ⅲ期と同様であるが、集落が南へ広がって規模が大きくなり、大型住居も存在しない。

さて、V期集落を構成する住居跡群も、主軸方向から、a群（住—33・71・75・38？）[註16]、b群（住—14・16・31・32・36・37）、c群（住—17）の3小群に分けられる。そして、Ⅲ期の場合と同様に考えるなら、a～c小期の集落構造は次の様になる。

a小期は、A類住居1棟（住—33）、C2類住居3棟（住—38・71・75）で構成される。中央に広場をもち、環状に住居を配置するが、中核住居は存在しない。なお、時期不明とされる住—20が中央広場にあるが、これがa小期の中核住居であった可能性も考えられる。

b小期は、C1類住居1棟（住—16）、C2類住居4棟（住—14・31・32・37）、D1類住居1棟（住—36）で構成される。中核住居、広場、環状住居群という基本構造はしっかり守られ、住居数も最も多く、V期集落の最盛期といえる。なお、中と南の小グループには、2棟の住居跡があるが、共存したものかどうかは明確でない。

c小期に属するのは、C1類住居1棟（住—17）だけであり、V期集落の衰退期である。なお、住—17からは前期末葉の遺物が出土しており、これがV期集落の終末期と考えられる。

以上が、V期の集落構造の推移の概略であるが、a・b小期の順序に関しては、次の理由により推定した。

第1は、吉峰遺跡全体で、時代が下るに従って居住地が南に動く傾向があり、この傾向がV期の各小期においてもあてはまると考えられるのである。第2は、b小期にD1類住居（住—36）が存在することで、これはⅥ期と同型式に属し、新しい要素と考えられるのである。そして第3には、住—16・17・31にみられる地床炉の複設化があげられ、これは住居の項でも述べたように、新しい要素と考えられるのである。

〈Ⅵ期集落〉（第35図）

当期に属する住居は、D2類住居1棟（住—34）だけであり、吉峰集落の最終末期である。

(4) 結語

このように、吉峰遺跡における7次の調査によって、縄文時代前期の集落像は、ほぼその全容を現わした。それは広場を中心として2～3棟の住居が環状に並ぶという、いわゆる縄文モデル集落[註17]に属するものであった。しかし、吉峰遺跡においては、Ⅲ・V期を通じて中核住居が集落の要として存在している。これは、他の集落には見られない特徴であり、吉峰集落あるいはそこに住んだ人々について考えるうえでの鍵となるであろう。特に、Ⅲ期においては、中核住居と大型住居が共存しており、どのような機能分担がなされていたかを考えることは、縄文時代中期の大型住居の性格を考察することにも通じ、たいへん興味深い。このような意味において、この中核住居の性格を解明することは、今後に残された重要な課題といえるであろう。

（森）

註

註1　富山県埋蔵文化財センター主任橋本正氏の御教示による。

註2　註1に同じ

註3　註1に同じ

註4　註1に同じ

註5　上野　　章　1977　「Ⅰ、5　福光町神明原A遺跡」『富山県福光町・城端町立野ヶ原遺跡群第五次緊急発掘調査概要』富山県教育委員会

註6　四柳　嘉章　1986　「第6章第1節3　福浦下層式期」『石川県能都町真脇遺跡』能都町教育委員会、真脇遺跡発掘調査団

註7　越坂　一也　1986　「第6章第1節4　蜆ヶ森式期」『石川県能都町真脇遺跡』能都町教育委員会、真脇遺跡発掘調査団

註8　久々　忠義　1980　「3、遺物　1、縄文時代後期の土器」『富山県井口村井口遺跡発掘調査概要』富山県教育委員会

註9　戸田　哲也　1983　「4、施文原体　縄文」『縄文文化の研究5』雄山閣

註10　註1に同じ

註11　山本　正敏　1989　「北陸における縄文時代の石斧」『縄文時代の木の文化』富山考古学会縄文時代研究グループ

註12　神保　孝造　1975　「Ⅳ　調査の成果」『富山県立山町吉峰遺跡第4次緊急発掘調査概要』富山県教育委員会

註13　住―23は、むしろ隅丸方形といったほうがよいかもしれない。

註14　橋本　　正　1974　「Ⅲ　調査の成果」『富山県小杉町水上谷遺跡緊急発掘調査概要』富山県教育委員会

註15　註14に同じ

註16　住―38は、ごく部分的な検出のため、はっきりとしないが、この群に入るものと考えられる。

註17　小林　達雄　1986　「2　原始集落」『岩波講座　日本考古学4』岩波書店

参　考　文　献

ア　安達　厚三　1983　「石皿」『縄文文化の研究7』雄山閣

網谷　克彦　1982　「北白川下層式土器」『縄文文化の研究3』雄山閣

イ　今村　啓爾　1982　「諸磯式土器」『縄文文化の研究3』雄山閣

ウ　上野　　章　1977　「Ⅰ、5　福光町神明原A遺跡」『富山県福光町・城端町立野ヶ原遺跡群第五次緊急発掘調査概要』富山県教育委員会

梅原　末治　1935　「京都北白川小倉町石器時代遺跡調査報告」『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』第16冊

オ　岡村　道雄　1983　「ピエスエスキーユ」『縄文文化の研究7』雄山閣

カ　樫田　　誠　1988　「第4章2節　石器」『念仏林遺跡―小松短期大学建設事業に伴う埋蔵文化財調査報告書』小松市教育委員会

キ　岸本雅敏・山本正敏　1986　『都市計画街路七美・太閤山・高岡線内遺跡群発掘調査概要(4)南太閤山Ⅰ遺跡』富山県教育委員会

コ　小島　俊彰　1965　『極楽寺遺跡発掘調査報告書』富山県教育委員会

小島　俊彰　1974　『富山県立山町吉峰遺跡第3次発掘調査概報』富山県教育委員会

小島　俊彰　1979　「本江遺跡」『滑川市史』考古資料編　滑川市史編さん委員会

小島　俊彰　1981　「井口式土器」『縄文文化の研究4』雄山閣

小林　達雄　1986　「2　原始集落」『岩波講座　日本考古学4』岩波書店

小林　康男　1988　「縄文時代の磨石」『中部高地の考古学―長野考古学会15周年記念論文集』長野考古学会

サ　酒井重洋・神保孝造・奥村吉信　1981　「Ⅲ　吉峰遺跡」『富山県立山町埋蔵文化財緊急発掘調査概要　白岩藪ノ上遺跡　吉峰遺跡』立山町教育委員会

笹沢　　浩　1982　「阿久遺跡」『縄文文化の研究8』雄山閣

ス　鈴木道之助　1981　『図録石器の基礎知識Ⅲ　縄文』柏書房

鈴木　保彦　1984　「集落の構成」『季刊考古学第7号』雄山閣

セ　関根　孝夫　1982　「貝の花遺跡」『縄文文化の研究8』雄山閣

タ　立山町教育委員会　1989　『吉峰遺跡―第6次発掘調査概要―』

ト　富山県教育委員会　1987　『北陸自動車道遺跡調査報告―朝日町編3―馬場山D遺跡・馬場山G遺跡・馬場山H遺跡』

ハ　橋本　　正　1970　『立山町吉峰遺跡発掘調査報告書』富山県教育委員会

橋本　　正　1972　「第Ⅱ部立山町吉峰遺跡・第Ⅴ部縄文時代前期の諸問題」『富山県埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』富山県教育委員会

橋本　　正　1972　「三、縄文早・前期」『富山県史』考古編

橋本　正・神保孝造　1974　『富山県小杉町水上谷遺跡緊急発掘調査概要』富山県教育委員会

橋本　正・酒井重洋・久々忠義　1980　『富山県井口村井口遺跡発掘調査概要』井口村教育委員会

ヒ　平口　哲夫　1987　「縄文前期の石器」『富来町福浦港　ヘラソ遺跡発掘調査報告書Ⅰ―縄文前期編―』能登ダイヤモンドゴルフ場（予定地）内埋蔵文化財調査委員会

フ　藤田富士夫　1983　「抉状耳飾りの編年に関する一試論―特に北陸およびその周辺を中心として―」『北陸の考古学　石川考古学研究会会誌第26号』石川考古学研究会

藤田富士夫　1983　「抉状耳飾り」『縄文文化の研究7』雄山閣

ミ　水野　正好　1969　「縄文時代集落復原への基礎的操作」『古代文化第21巻第3・4号』

ヤ　安田　良栄　1977　「郷土のあけぼの」『立山町史』上巻

柳井　睦・神保孝造　1975　『富山県立山町吉峰遺跡第4次発掘調査概要』富山県教育委員会

付載

富山県立山町吉峰遺跡の考古遺物包含層の火山灰層序学的研究

富山大学教養部地学教室

小林武彦・等々力政彦・豊本正成・大野周二

1．緒言

吉峰遺跡はおもに縄文時代以降の複合遺跡であるが、旧石器文化の遺物が発見されたため旧石器文化層の年代判定を主な目的として土層の火山灰層序学的研究をおこなった。

2．遺跡の地形、地質環境

この遺跡は立山町東部、常願寺川扇状地を縁取る段丘上にある。この段丘面は上段面（または天林面）と呼ばれ、かつては根拠もなく下末吉期の河岸段丘とされたが（藤井　1966)、火山灰層序学的な検討により現在は約５万年前の河岸段丘面とされている（小林　1975、松田　1980)。この段丘では第三期層の基盤が高く、段丘面下約10m付近まで露出している。段丘を作る地層は厚さ10mほどの河成礫層とその上位の細礫を少量含む灰色シルト層（厚さ1.5m前後）である。この段丘面を覆って今回の調査の主な対象である厚さ60～80cmの火山灰質土壌層が存在する。

本遺跡の南方約１kmにある天林段丘面は吉峰の段丘面に対比される段丘面であるが、砂利取り場の露頭には富山平野の更新世テフラ層の標式的断面がある。この断面では大山倉吉軽石層（DKP）の粟砂状の黄色軽石層が露出する（町田・新井　1979)。

3．土層の特徴と試料採取

本遺跡では最上位に厚い腐植土層（約20cm）が発達し、その下位にはやや有機物を含むと思われる淡褐色土層、そして肉眼で識別しうる柱状有色鉱物を含む褐色土層、最下位には細礫混じりシルト層の土壌化した部分と見られる灰黄色土層があり下方へ細礫混じりシルト層に漸移する。

試料は遺跡の発掘調査用に作られていた仮設小屋の斜め前の道路切り割りの壁面を約10cmの柱状に刻んで採取された（図１)。ブロックの厚さは普通３～４cmに分けて削り取られた（図２)。

4．土層試料の砂粒分析

(1)　分析法

これまで北陸地方で遺物包含層の土層断面からテフラ層準を検出・同定した方法（小林・上田　1982など）を用いて、採取した試料の砂粒階級（１／16mm以上）の粒子の粒度組成と鉱物組成の分析を行った。

分析法は以下の通りである。

①砂粒階級粒子の篩別：試料の砂粒階級内の粒度組成測定のため、出来るかぎり機械的破壊をおさえて湿式で篩別する。篩別はタイラー標準篩（#32、#60、#125、#250）を用いて行うが、粒土など細粒部の分散処理とそれにかかわる有機物除去の前処理をする。分散処理として、試料20ｇを蒸留水約300mℓに入れ、１NのNaOH溶液を入れて超音波処理を約15～20分おこなう。この時、試料中に有機物が多いと分散が悪いので、分散処理の前に有機物の除去を要する。有機物の除去は以下の簡便法を用いる。有機物の含有量が多い時には、分散剤のNaOH溶液に有機物が溶けだし、液が濃い暗褐色となるので液の上澄みを篩を通して捨て、再度蒸留水とNaOH溶液を入れて超音波処理をおこなう。この操作を２～３回繰り返すとNaOH溶液の暗褐色化が起こらなくなり、試料は分散するようになる。超音波による分散処理の繰り返しは試料中のガラス片などを破壊する危険性もあるが、これまでのところ明瞭な影響は出ていない。分散処理さえ十分なら篩別は簡単で、ポリエチレン洗浄ビンで蒸留水を注ぐ事によって粘土など細粒部は流れ、篩上に砂粒のみを残すことが出来る。試料は篩のまま乾燥し、薬包紙にとって秤量する。

②重液分離：#250篩上に残った１／８～１／16mm階級の砂粒を、比重を調整したテトラ・ブロム・エタンで重鉱物・軽鉱物に分離する。ロ紙とともに乾燥後、薬包紙にとって秤量する。

③顕微鏡鑑定と計数：重鉱物・軽鉱物の試料をそれぞれカナダ・バルサム（またはレークサイド・セメント）でスライド・グラスに固定した後、偏光顕微鏡を用いて粒子の観察、鉱物種の同定、鉱物種毎の量比を計測、鉱物粒の光学的・鉱物学的測定を行う。

(1) 分析結果

分析結果は図２に要約されているが、白岩藪ノ上遺跡における分析結果（小林・上田　1982）と非常に良く似ており、大山倉吉軽石層（DKP）と姶良Tn火山灰層の層準が明らかに決定され、鬼界―アカホヤ火山灰の層準も判明した。

試料の粒度組成はNo.１からNo.19の間ではほとんど差がなく、No.20から下位へ砂粒が少しずつ増加する。No.21以下の黄灰色土層（2.5YR　７／６―10R　７／６）は、その上部に火山性の砂粒を少量含むが下位の細礫混じりシルト層の特徴を持つ砂粒が卓越しており、シルト層の土壌化した部分とみなされる。

１／８－１／16mm（#250）粒子の重鉱物量はNo.22―20の間で上に向かって顕著に増加し、No.20―15で厚さ約20cmの頂きを作り、No.15から上位へは漸減する。このようにピークを挟んで下位は急激に変化があり、上位では緩やかに減少する量的変化は、本遺跡の火山ガラスの変化でも認められるが、地表面を覆って堆積した細粒の火山灰層が風化していく過程に想定される火山灰物質の量的変化に合致しており一次的な火山灰層として認定できる。重鉱物の頂きにあたる部分は露出で柱状の有色鉱物を肉眼で認められる層準で、有色鉱物は鏡下で大山倉吉軽石層（DKP）の紫蘇輝石と角閃石の斑晶である事が確認された。No.16―19の粒度組成におけるように、１／１／16mm（#250）粒子と１／４－１／８mm（#125）粒子の量がほぼ等しいのも大山倉吉軽石層（DKP）の粒度組成の特徴である。このようにNo.20－15の層準は明瞭に大山倉吉軽石層（DKP）の層準でNo.20付近がその基底にあたる。No.21―24の層準では大山倉吉軽石層（DKP）に由来する砂粒が下位の細礫混じりシルト層に由来する粒子に一部混入している。

1/８－1/16mm（#250）軽鉱物中の火山ガラス含有量はNo.11―10の間で増加が顕著でNo.10から上位ではガラス量が15％を越える。そのなかでNo.10―６の間はうすずみ色ガラスのない層準で姶良Tn火山灰層（AT）にあたり、火山ガラス量変化のピークは安定していないがNo.10は姶良Tn火山灰層の基底と見なされる。他方、うすずみ色ガラスはNo.５－１に含まれており、この層準は鬼界―アカホヤ火山灰層（Ah）の粒子を含むことを示している。もともと鬼界―アカホヤ火山灰層（Ah）の１次的堆積物は富山平野周辺では１cmを越えることはまれであり、本遺跡でもその程度しか堆積しなかったと見なされるので、この層準では姶良Tn火山灰層（AT）の砂粒に少量の鬼界―アカホヤ火山灰層（Ah）由来の砂粒が加わったものであろう。うすずみ色ガラスを含む層準の最下位にあるガラス量のピーク（No.５）付近が鬼界―アカホヤ火山灰層（Ah）の本来の層準と解釈される。

５．まとめ

以上のように、おもに重鉱物量の変化と火山ガラス片の量の変化、顕微鏡観察の結果から、No.10―15の層準は大山倉吉軽石層（DKP）層準にあたり、No.10―６が姶良Tn火山灰層（AT）の層準、そして鬼界―アカホヤ火山灰層（Ah）の層準はNo.５にあたると考えられる。

〔謝辞〕 この調査に関して富山大学人文学部考古学教室教授秋山進午氏、立山町教育委員会の森　秀典氏にお世話になった。記して謝意を表す。

文　献

藤井　昭二（1966）：常願寺川流域の段丘について、地質見学案内書「立山火山」、pp.11―15、日本地質学会（金沢）
小林　武彦（1975）：大町テフラ層と立山火山構成物との関係、日本第四紀学会講演要旨集、no.４、pp.１
小林　武彦・上田　義浩（1982）：立山町白岩藪の上遺跡の遺物包含土層の火山灰層序学的検討、富山県立山町白岩藪の上遺跡調査概要(2)、pp.23―28
町田　　洋・新井　房夫（1976）：広域に分布する火山灰―姶良Tn火山灰の発見とその意義―、科学、Vol.46、pp.339―347
町田　　洋・新井　房夫（1978）：南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラ―アカホヤ火山灰、第四紀研究、Vol.17、pp.143―163
町田　　洋・新井　房夫（1979）：大山倉吉軽石層―分布の広域性と第四紀編年上の意義、地学雑誌、Vol.88、pp.313―330
松田賢一郎（1980）：常願寺川の河岸段丘、富山県地学・地理学研究論集、no.７、pp.25―33

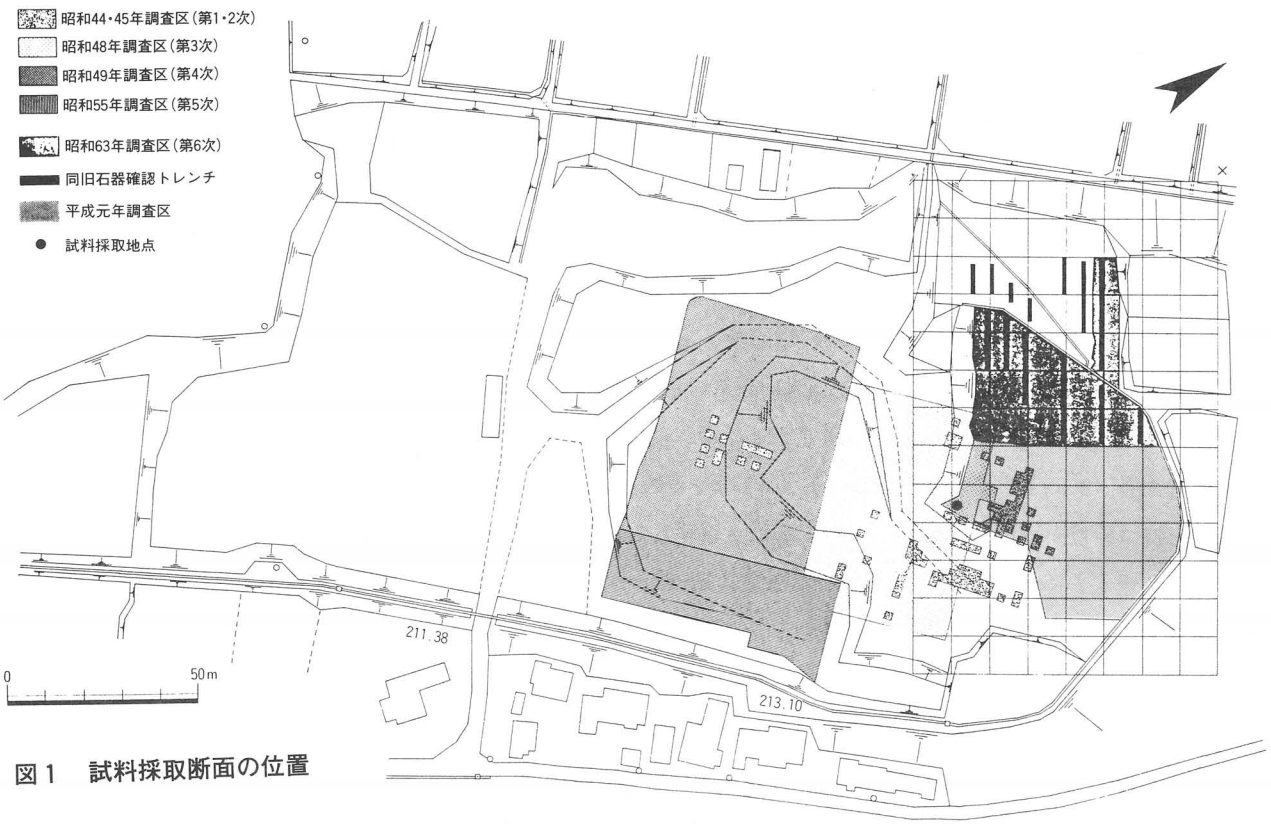


図1　試料採取断面の位置

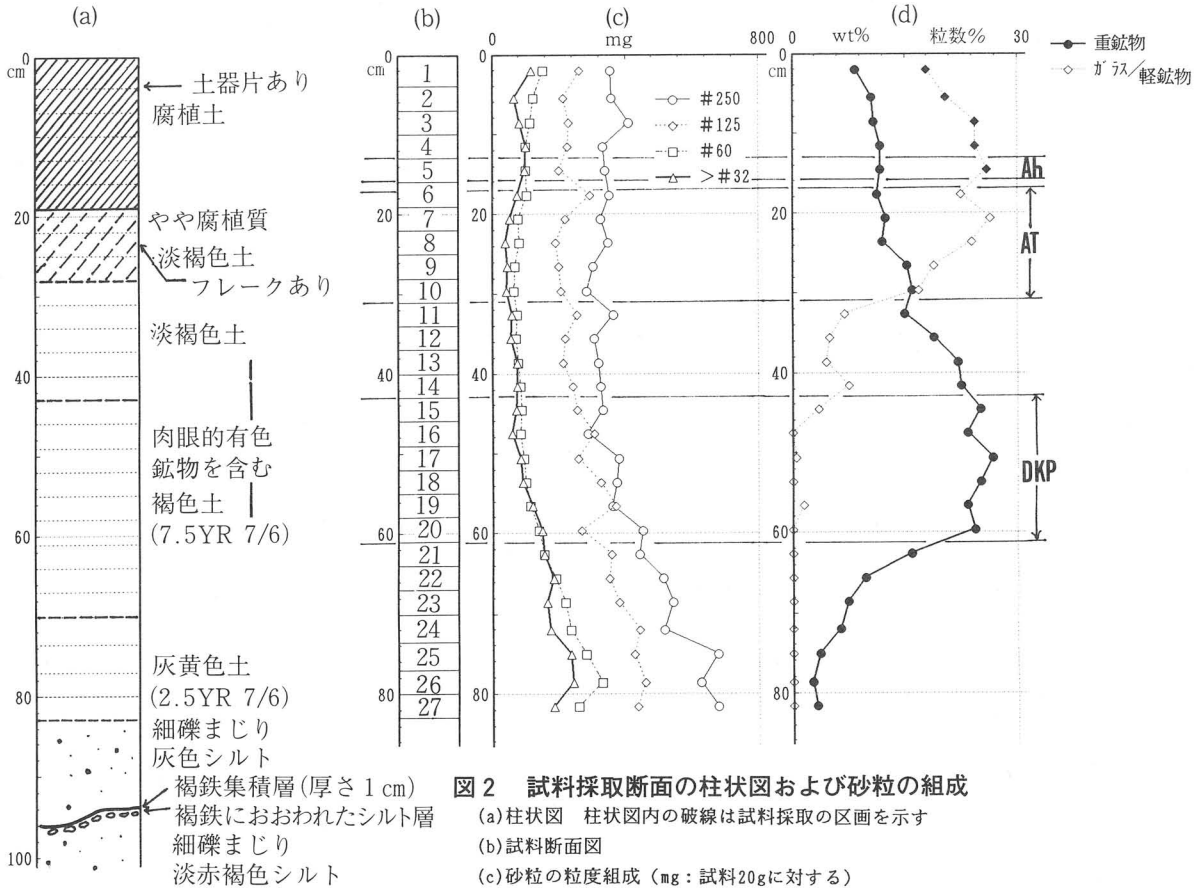


図2　試料採取断面の柱状図および砂粒の組成

(a)柱状図　柱状図内の破線は試料採取の区画を示す
(b)試料断面図
(c)砂粒の粒度組成（mg：試料20gに対する）
(d)重鉱物 wt%（1/8-1/16mm総量に対する）および
火山ガラス片 粒数%（1/8-1/16mm軽鉱物に対する）
黒い菱形はうすずみ色ガラスの存在を表す.

図版1

図版2

昭和38年撮影

図版 3

1．遺跡遠景

（西から）

2．発掘区全景

（東から）

3．発掘区全景

（南から）

図版 4

1．第 1 号住居跡

（西から）

2．第 2 号住居跡

（北から）

図版 5

1．発掘区北東穴群

（西から）

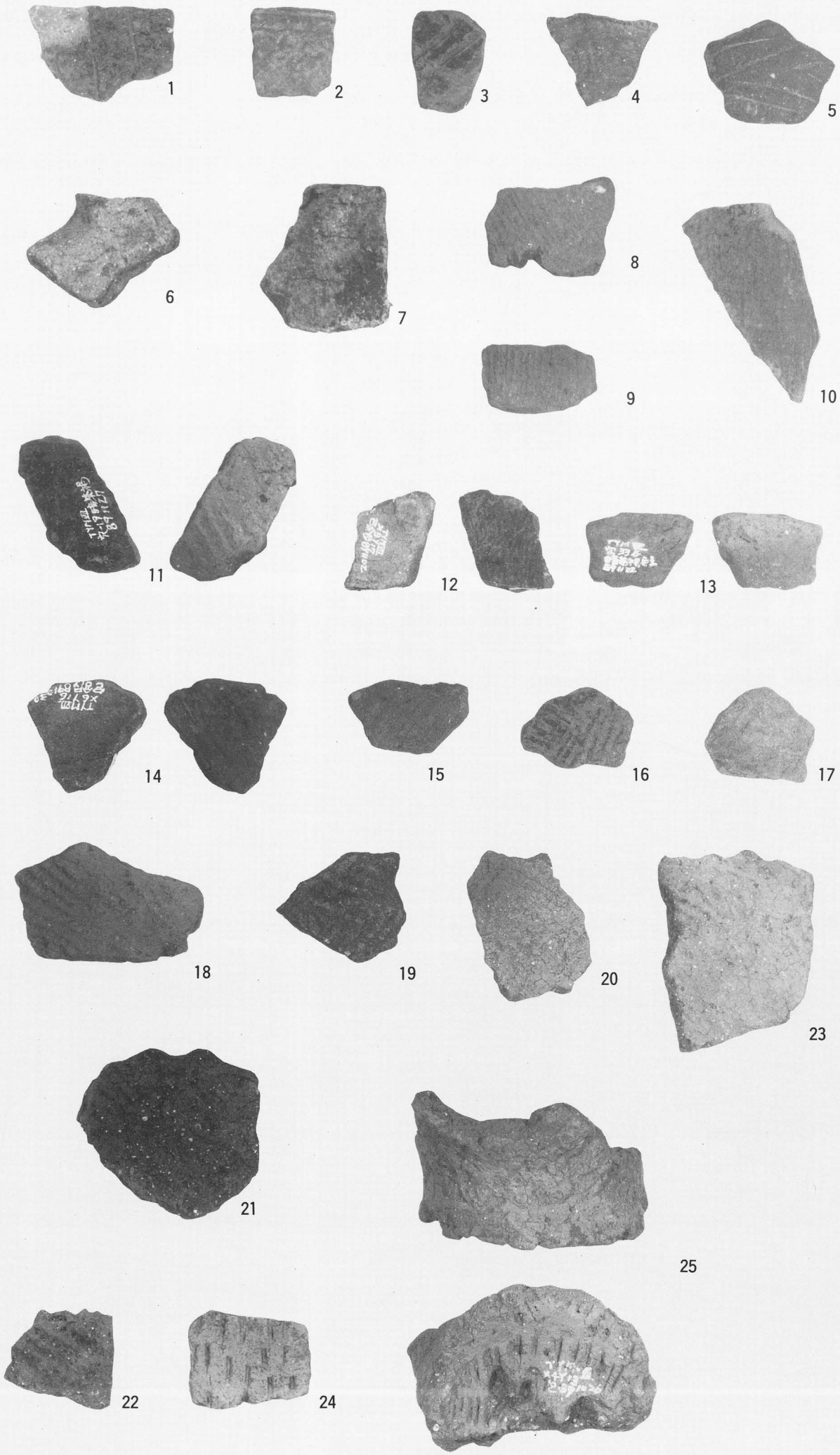
2．発掘区南西

穴・住居跡群

（西から）

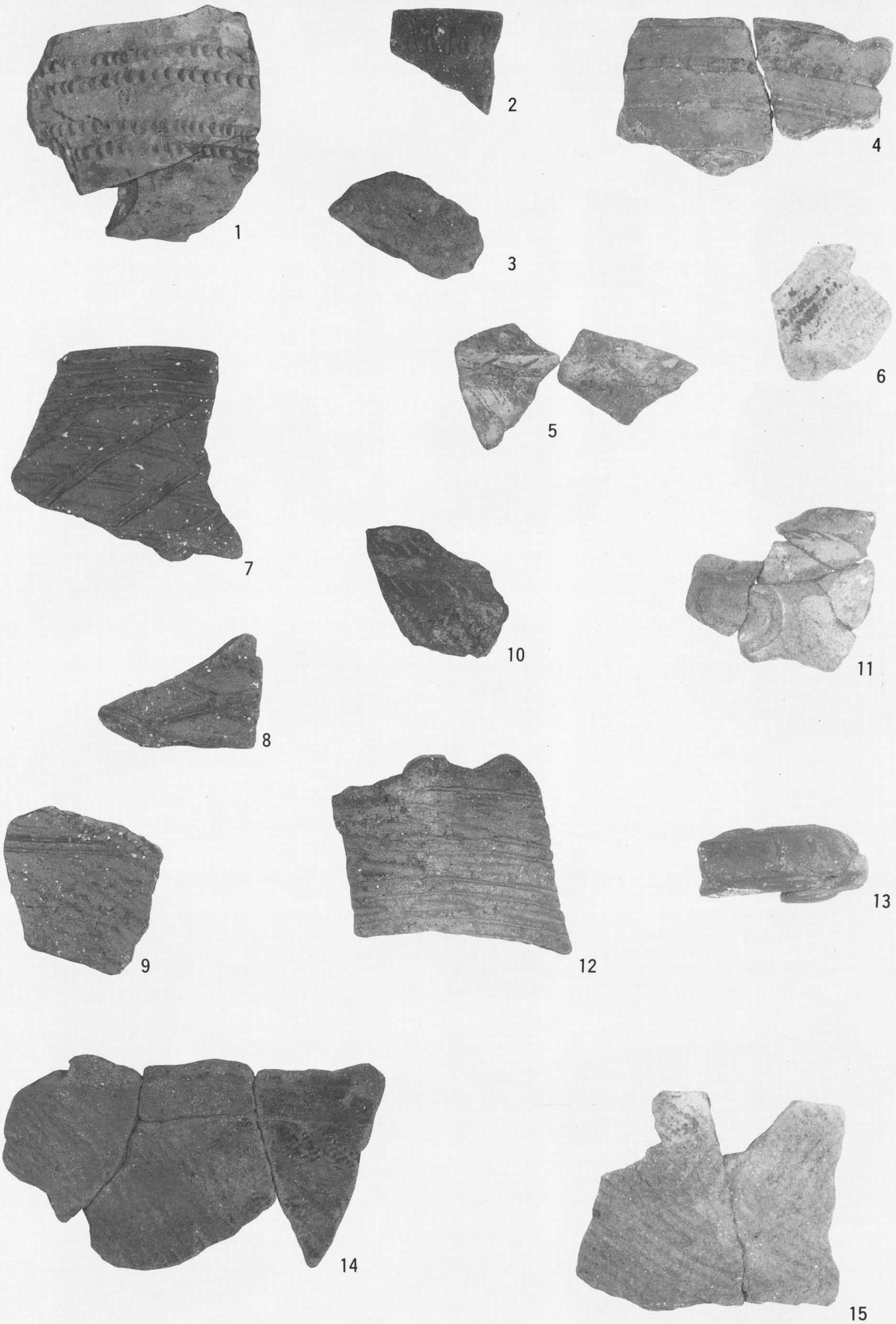
図版6

3・17．第4号住居跡
4．穴11
7・13．穴33
8．穴24
11．穴19
16．穴99
その他、包含層・盛土層



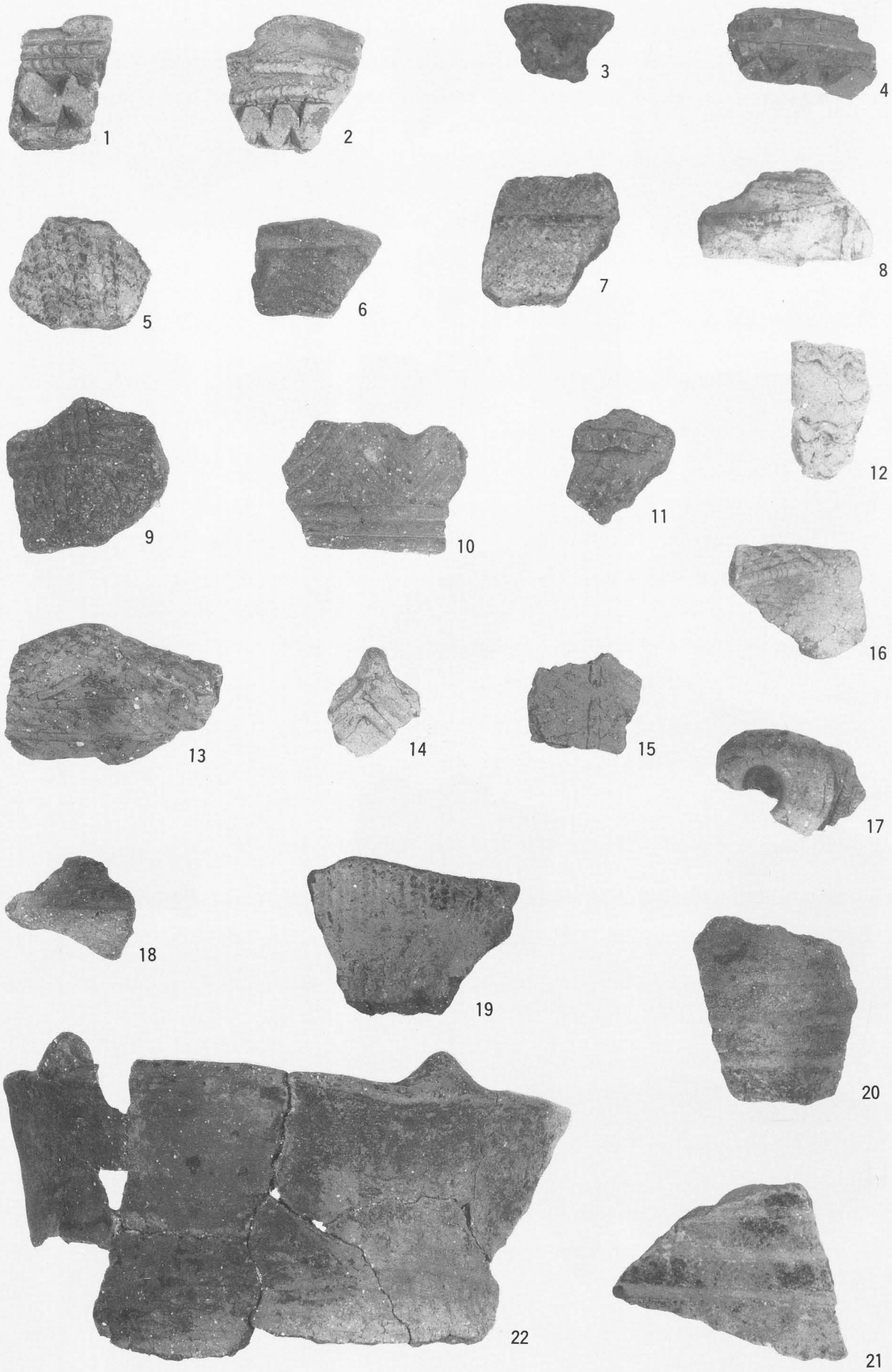
図版7

5左．穴11
5右．第4号住居跡
7．穴33
14．穴82
その他、包含層・盛土層



図版 8

2．穴154

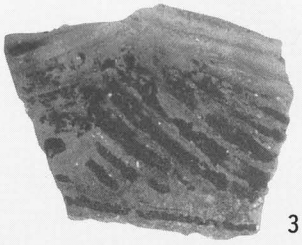


14．穴20
15．穴25
18．穴103
19．穴88
20．穴96
22．穴86
その他、包含層・盛土層

図版 9

1．穴78
2．穴126
その他、包含層・
盛土層

1

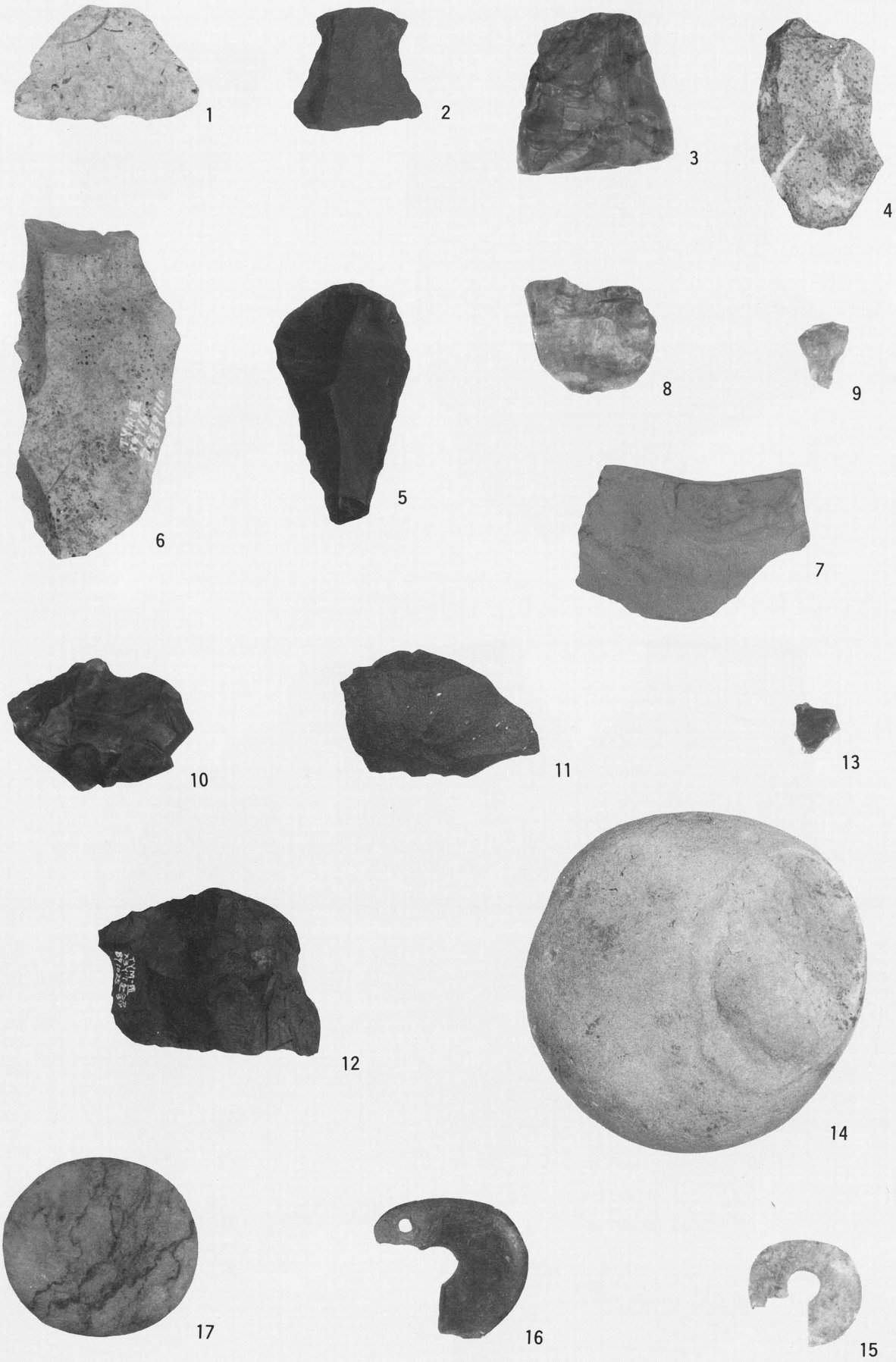

3

4

2

図版10

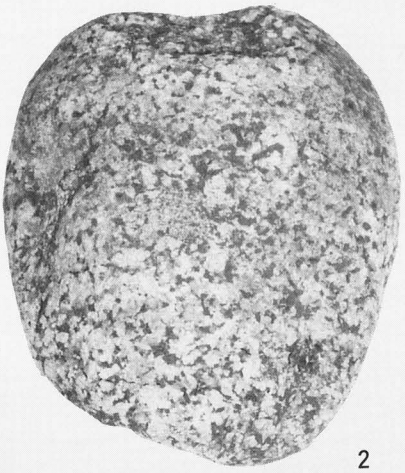
2．第１号住居跡
5．穴156
15．穴13
その他、包含層
盛土層



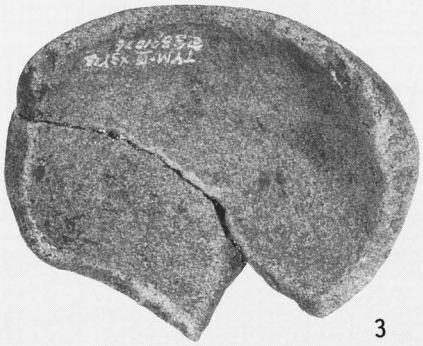
図版11

包含層・盛土層

1



2



3

4

5

6

図版12

包含層・盛土層

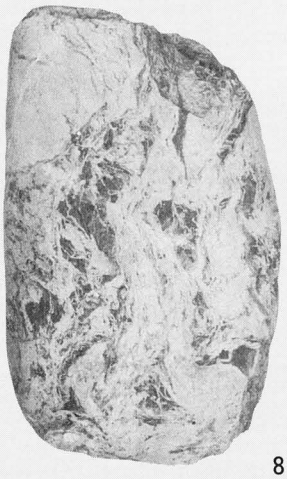
1

2

3

4

5

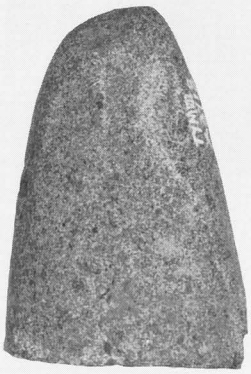


8

6

7

9



10

11

12

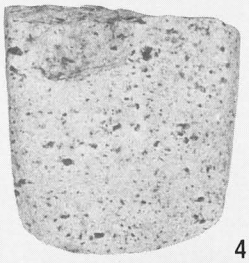
図版13

5．穴54
その他、包含層・
盛土層

1

2

3


4

5

6

7

8

11

9

10

12

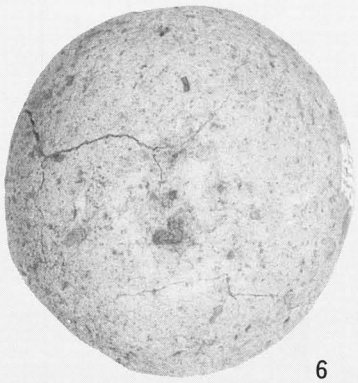
1

2

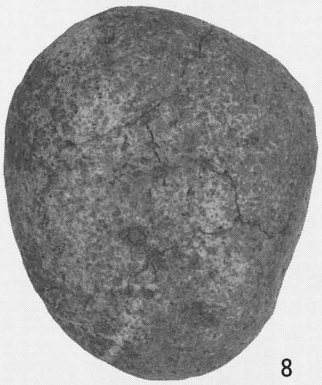
3

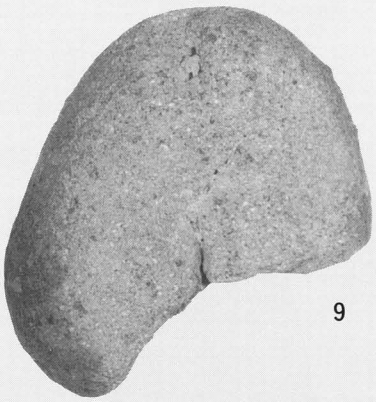
4

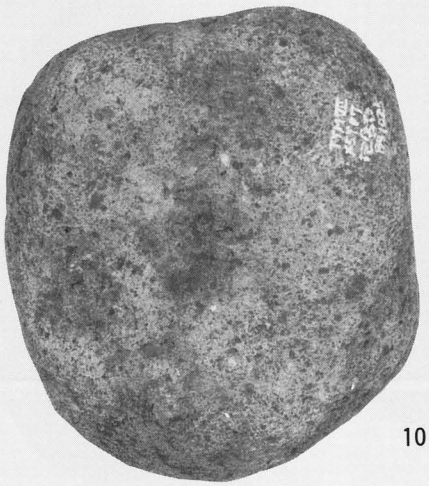
5


6

7


8


9


10

11

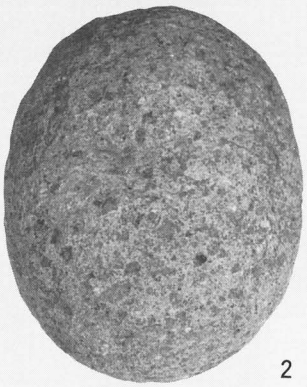
図版14

9．第1号住居跡その他、包含層・盛土層

図版15

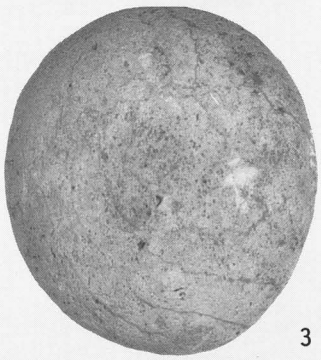
包含層・盛土層

1

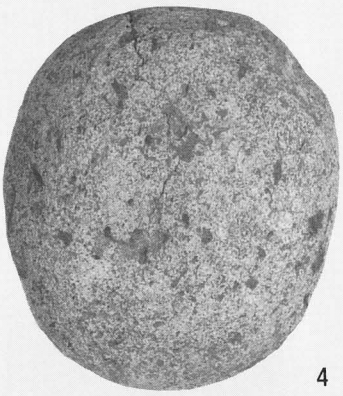


2

7

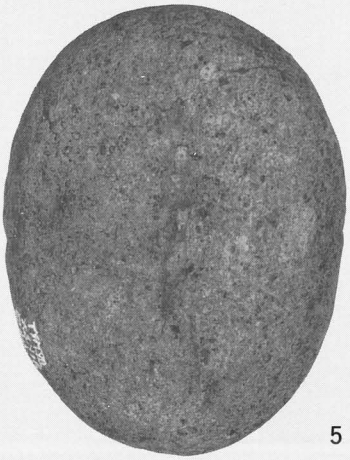


3

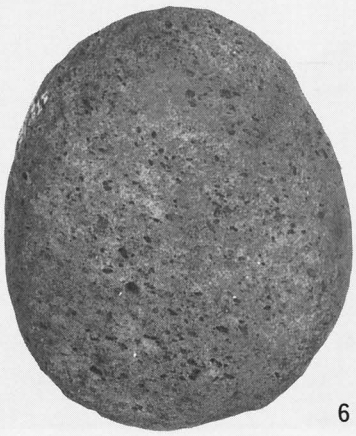


4

8



5

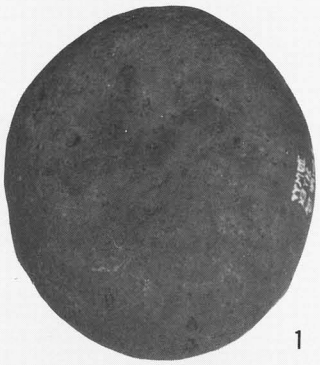


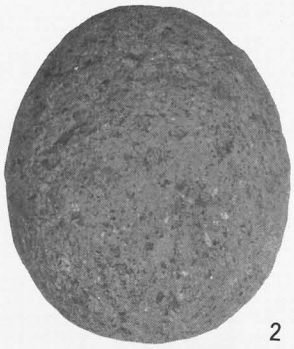
6

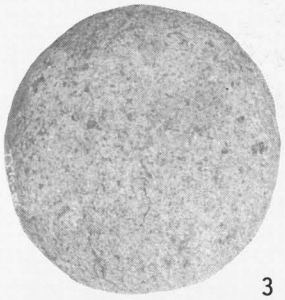
9

図版16

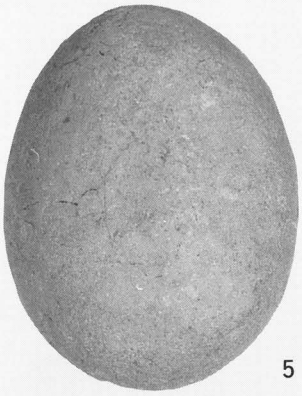
包含層・盛土層

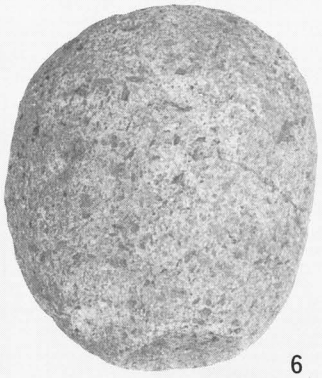

1

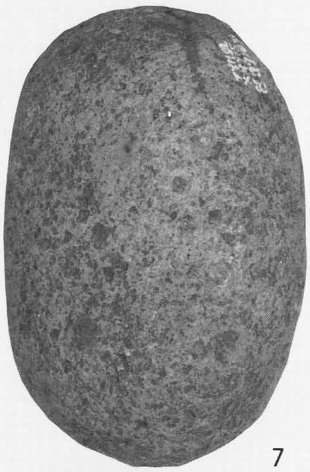

2

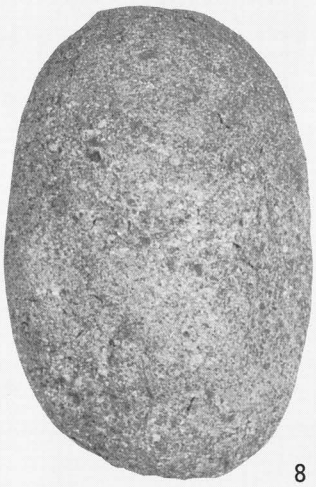

3

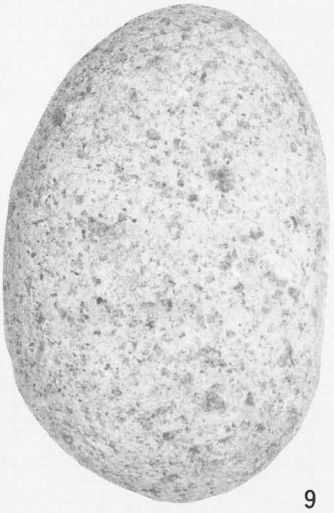
4

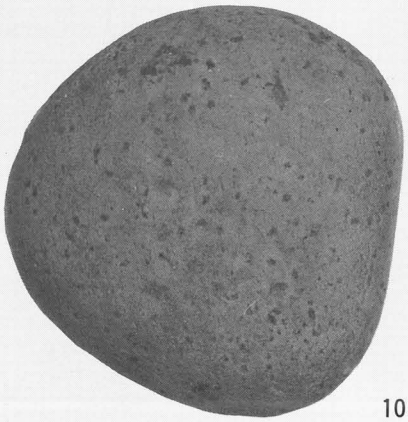

5

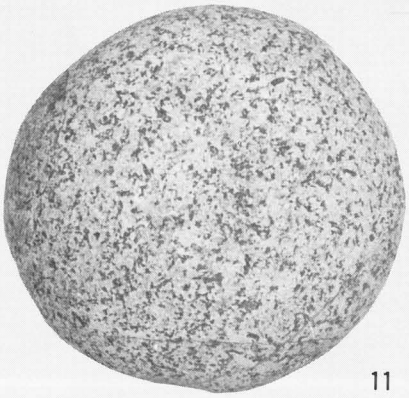

6


7


8


9


10


11